

鯨に戯れて

佐伯寿和2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Hypergraph社、Yostar社により開発、運営されているスマートフォン向けゲームアプリ、アークナイツ（明日方舟）の二次創作です。

メインストーリーを追うものではなく、キャラクターのサイドストーリーのようなものが書ければと思っています。

とにかく「アークナイツ」は設定モリモリで、完全に理解するのが難しいお話です。私も理解していません（笑）

また、原作の公開されているストーリー全て追えている訳ではありません。

なので、ところどころ間違ったことを書くかもしれませんがご容赦ください。

ちなみにタイトルの「鯨に戯れて」は「鯨ゆりかじに戯たわむれて」とルビを振るつもりでしたが、タイトルでルビが反映されなかったので振っていません。

また、「鯨くじら」はロドス・アイランド製薬という会社の本社？基地？陸地を移動する船がゲーム内で表示される時、船のモチーフになっているのか。

クジラの骨格が表記されているので、ここから引用させてもらいました。

マンティコアとデーゲンブレヒャー推しのAsh難民です（笑）

目次

毒針を隠す少女	その一	1	
毒針を隠す少女	その二	17	
毒針を隠す少女	その三	39	
毒針を隠す少女	その四	58	
毒針を隠す少女	その五	82	
毒針を隠す少女	その六	99	
毒針を隠す少女	その七	121	
毒針を隠す少女	おまけ (終)	144	
魅惑の海	く包丁とナイフ編	その一	177
魅惑の海	く包丁とナイフ編	その二	193

魅惑の海	くヒーラの受難編	その一	213
魅惑の海	くヒーラの受難編	その二	232
魅惑の海	くヒーラの受難編	その三	244
魅惑の海	くヒーラの受難編	その四	262
魅惑の海	おまけ	その一	274
魅惑の海	おまけ	その二 (終)	287

毒針を隠す少女 その一

……また、棄てられた……、

黒いマントに身を包んだ軽装の少女が一人、砂嵐吹きすさぶ荒野の直中を歩いていった。

何者からか逃げているのか。何者からか隠れているのか。その歩みは独特で、荒野の住人たちですら少女の存在に気付かない。

雨は降らず、昼も夜も延々と砂嵐になぶ翻られ、陽の光を返す罅割れた大地までもが少女の幼い足取りに渴きを与える。

自生する草花は他人に分け与えることを拒むように乾いた体をこれ見よがしに見せつける。

無数の砂を孕んだ風たちは乾燥した肌に張り付き、血の気を奪っては挨拶もなしに去っていく。

家のない者に等しく与えられる痛みと気怠さが、少女を荒野の囚人に変えていく。

……それでも、まだ、体は動かせる……、

…私、仕事、したよ……？

数日間、少女は独り歩き続けていた。

何処に向かうべきなのかわからない。迎えに来るべき人も現れない。

そのどちらも、彼女には用意されていない。

不幸を呼ぶ種族はもう、この世には必要ない。

そう、ありとあらゆる世界が告げているように思えた。

それでも彼女は喉を哽らせて訴え続ける。

…私、ここに、いる……、

砂嵐は、等しく吹き付ける。

愛も憎しみもなく、等しく「渇き」を与える。

絶望に暮れる涙も。喜びに咽び泣く涙も。何もかも。

それは涸れた大地に雨雲を呼ぶためでもなければ、限られた者のための秘境から盗賊たちを遠ざけるためでもない。

彼らはただ、等しく「渇き」を望むだけ。それが自分たちのあるべき姿だと。

少女は彼らから逃れるように岩陰に隠れる。

しかし、そこが彼らの住まう「荒野」である限り、彼らは等しくやって来る。

震える彼女の膝をソツと折り、岩にもたれかかる彼女の脛にソツと触れる。

…誰か……、

少女は太陽の下で笑い跳ねまわる小さな女の子の夢を見る。

…誰か……、

流れる涙を、砂嵐はソツと拭った。

ブーーツ、ブーーツ、ブーーツ、ブーーツ、ブーーツ！

——あ、あれ……？

目を覚ますと、少女は聞いたことのない耳障りな警告音の中にいた。

「……」

「ここ、どこ？」

私、何、してるの？

そこは見知った荒野でもなければ、王侯貴族が住まう色鮮やかな庭園でもない。砂嵐もなければ、標的もない。

少女は未知の世界にただ一人、訳も分からず放り込まれていた。

完璧に精錬された鉄造りの洞窟。外に続く亀裂でもないのに空色の光が洞窟内に射し込んでいる。規則正しく、延々と続いている。

そして、自分の体から微かに薬品の臭いが漂っていた。

…私、誰に、捕まったの……？

息の荒い人の気配がそこかしこを駆け回っている。

少なくとも仕事の成否を確認しにきた上の人間じゃない。

…だったらどうして、私を、生かしたの……？

あのまま放置していれば彼女は確実に衰弱死していた。放っておくだけで厄介事は全て抹消できた。

誰が、何の目的でそれを拾い上げたのか？彼女には理解できなかった。

冷たい鉄壁てつかべに身を預け、痲かんに障さわる薬品の臭いに堪えて息を殺し、朦朧とする頭で彼女は状況の把握ととに努め続けた。

「……」

そう、いえば……、

少女は僅かながらに、途切れ途切れに思い出した。

どうして自分がここにいるのかを。

——確か……、

「……い……、おい……っ！」

「……?!」

荒野の岩陰に吸い付くように倒れていた少女は、見ず知らずの男の声で飛び起きた。

「良かった、まだ意識はあるんだな。」

それは奇跡的なことだった。普段なら、不用意に近付いた「敵」には反射的に撃退するはずなのに。この時は体が強ばるばかりで「敵」をただただ注視することしかできなかった。

そこに、不審な衣類に身を包んだ男が立っていた。

「水は飲めるか?」

男はヴィーヴル族のような角を生やし、弓矢を装備していた。

だが、それで彼女にトドメを刺す様子はなく、それどころか、バックパックから立派な水筒を取り出し、躊躇うことなく彼女に差し出した。

「……」

ここサルゴンで無償の「取り引き」は存在しない。

彼は何者なのか。彼が何を求めているのか。彼女には何も分からなかった。

全身で警戒を顕あらわにする少女の姿を見て、男はそこが辺境の地であることを思い出した。

「…さすがに言葉は通じるよな？…まあ一応、怪しい者じゃないと言っておくよ。水はここに置いておく。落ち着いたら飲むといい。」

男は水筒を近くの岩の上に置くと、少女から少し離れて考え込んだ。

「…と、つい助けてしまったが、俺の一存で船に乗せていいのか？…ダメだよな、やつぱり。」

身の熟こなしから、かなりの戦闘経験があることは窺うかがえた。しかし、少女にとつて警戒すべき対象ではないように思えた。自分を助けようとしてくれていることも理解できた。

けれども…、そんなことより……、

…見られた……、

仕事は自分を助けない。次の仕事なんかない。そもそも必要とすらされていない。

頭では分かっているはずなのに。唯一彼女を支えてきた生き方が、目の前の心優しい男の未来を決定付けようとしていた。

ところが、彼女が仕事の姿勢を整える前に男は立ち上がり、彼女の下から立ち去ろうとしていた。

「悪いが、やはり身元不明で武装しているキミを連れ帰る訳にはいかない。だけど俺は

もう仕事が終わって帰投するだけだから。残った水や食料はキミにあげることにする。少ないけれど、どうかこれで生き残ってくれ。ここから南に一、二日歩いたところに村がある。だから、頑張ってくれよな。」

男は笑顔で大量の食糧を置いて、去っていった。

…に、逃が、さない……!

少女は男の置いていったものには目もくれず、男を尾行した。

男は気付いていない。残った体力でも男を仕留めるのは容易い。ただ、「何者」なのかを突き止めてからでも遅くない。

少女は自分が今までにない選択をしていることに気付かないでいた。

——— そうだ。私、敵を追って、空飛ぶ車に、乗ったんだ…。あれ、少し、怖かった……、

「キミ、どうしてここに?! いつ乗ったんだ?!」

気付かれた!?

どうして?!

少女は咄嗟に身構え、物陰に隠れて男の射線から逃れた。

…多分、車が飛ぶなんて、思わなかったから。驚いて、少しの間、気絶してたんだ。

…もう、尾行は、できない。…今、殺るしか、ない……、

少女は驚くべき素早さで忍び寄り、自分の身の丈ほどもある毒針を男の首目掛けて走らせた。

しかし、男はその必殺の一撃を躲してしまった。

「何を!」

男は矢をつがえ標的に向けてはみたものの、目の前の少女が今にも倒れてしまいそうなほどに衰弱していることに気付き、躊躇ためらった。

おそらく与えた水の一滴さえ手に付けていけないのだろう。だがなぜ? 毒が入っているとも思ったのか?

いきなり現れてあれだけの食糧を与えられたらサルゴン人は皆、不審に思うんだろうか。まったく、面倒な土地柄だな。

飛行機に不慣れなのか。少女は機体が気流に衝突するたびに驚き、それを繰り返すごとに動きが鈍くなっていった。

…ダメ、体が、重い……、

「どうした、騒がし——!?!うわ、なんだこの女。いつの間にも!」

仲間が、いたの……？

……もう、ダメ……、もう……、私……、

幸運なことに、少女は目的を果たすことなく敵と対峙したまま崩れ落ちた。

——次は、もつと怖かった……、

「待て待て、これはマンティコアじゃないか!?どこで拾ってきた!マンティコアなんて、もう何年も見ておらんぞ!」

狙った掘り出し物を安く買い叩く商人のように、殺気立った叫びが少女を休眠の殻から引きずり出した。

……うるさい……、

……ま、眩しい……、

「……ッ!?!」

「お、おい、コラー!暴れるでない!」

少女は手術台の上で手足、そして尻尾を拘束された状態で目を覚ました。

「安心しろ！ 妾^{わらわ}たちはお主に危害を加えたりはせん！ つておい、誰か鎮静剤を持つてこんか！」

アツ……、

…何か打たれた……、体、動かない……、

…私、死んじゃう、のかな……、

「…ふう。まったく、ここに運んできたのは誰じゃ!? マンティコアにこの程度の拘束具では意味がないこともわからんのか!？」

「す、すみません、ワルファリン先生……、」

…死にたく、ない……、

覗き込まれればその血^{あか}が滴^{したた}り落ちるのではないかというような深紅の瞳が、今まさに狂喜の表情を浮かべながら少女を見下ろしていた。

対して、全ての光彩^{いろ}を喰らい付くして肥え太ったかのように毒々しい、無数の白髪^{しろへび}が、少女から世界を奪^とり上げようと、ゾロリと彼女の視界を覆い隠していく。

…いや、だ……、

少女は女悪魔^{メデューサ}に見守られ、意識を失った。

「じゃが、よくやった。マンティコアは希少種じゃからな。…何か試せるものはなかつ

たかな♪」

「先生、あまり勝手をやるとまたケルシー先生に叱られますよ？」

「バカを言うな。あんな小娘に怯えていては医学の進歩に貢献できるものも叶わんぞ？」

「…私は知りませんよ？」

毅然きげんと語りながらも嬉々とした声色を隠さない悪魔たちの会話を耳にしなかったのは、少女にとってこの上ない幸運といえたのかもしれない。

——そして、私、鉄の部屋で、目を、覚まして……、

少女は驚いた。

生きていたこと。体が軽くなっていること。何より……、

…温かい……、

少女は生まれて初めて清潔なマットレスと毛布に触れ、迫っていたはずの「死」は瞬く間に空気に溶けて消え失せ、「疲労」に押し流されるまま生まれて初めての「二度寝」という体験をした。

「こんにちはー、新人さん。起きてますかー？」

「!？」

すっかり半日眠った彼女は幼い女の子の声で完全に覚醒した。

…私、眠ってた!？」

「ごはん、持ってきたんだけど、お腹空いてないですかー？」

跳ね起きた少女は素早く部屋の隅に身を潜め、声のする扉向こうの様子を静かに窺い、機会を待った。

…武器、取り上げられてる。それに、この服は？

見たことのない素材の服だった。見た目こそ奇妙だけれど、滑らかで丈夫なその服は、今まで使ってきたどの戦闘服よりも機能性に優れていると分かる紛れもない逸品だった。

それに、この帯…、

左太ももには、仄かにエメラルドグリーンに発光する模様の入ったバンドが巻かれていた。

少女は気味の悪いそれを問答無用で剥ぎ取って捨てると、再び外の気配に意識を集中した。

「どうしたの〜？」

…気配もなく、もう一人、現れた?!

…けど…、この臭いは…、知ってる、臭い……？

「新人さんが起きてこないの。ごはんも全然食べてないみたいだし、グム、心配なんだよ。」

「フーン、」

「ウタゲお姉ちゃんも？」

「え？ううん、アタシはただネイルが似合いそうな子だったから話盛り上がるかなうって思った、だ、け。」

……何の、会話？

…何か、試されてる……？

「え、ウタゲお姉ちゃん、新人さんの顔見たの？」

「うん、見たよ。激オコなワルファリン先生から引き離されるところだけけどね。」

…名前で、呼び合ってる……、

…演技、でもなさそう……。だとしたら、私、敵に捕まったの……？

「え？なんでワルファリン先生怒ってたの？まさか、新人さんが悪いことしたの？」

「それは違うんじゃない？ケルシー先生もいたし、またワルファリン先生がヤバいことしようとしてたんじゃないかな？」

「そっか。あー、良かった。悪い人だったらグム、何かの拍子にやつつけちゃうかもだつ

たよ。」

…やっつける……、

「アハハ！さすがグムちゃん、フライパン持ったら人格が変わる人ナンバーワンだもんね。」

「そんなこと言わないでよ。グムだって叩いて良い人と悪い人くらい見分けられるんだよ？」

「そうだよね。じゃあ、アタシは？良い人？悪い人？」

「え？」

意表を突く質問にフライパンの女の子は少しの間、考え込んだ。

「良い人？だと思っただけど…。もしかして、違うの？」

「さあねえ、良い人か悪い人かなんて自分じゃ分からないもんじゃない？」

「…確かに、そうかも。」

「でしょ？だからグムちゃんにそう言ってもらえてアタシは少し安心したよ。ありがとう。」

なんだか気の抜ける会話だった。マンティコアの少女にはその警戒心のなさが不気味にさえ思えた。

「じゃあ、じゃあ！グムは？グムは良い人？悪い人？」

元気で快活。マンティコアの少女はフライパンの女の子の声から、夢の中で見た女の子の姿を想像した。

「そんなの、良い人に決まってるじゃん。グムちゃんは最っ高に良い子だよ。」

「あ、ウタゲお姉ちゃん、今グムのことバカにしたねー？今度、お姉ちゃんのごはんはピーマン入れちゃうよ？」

「あはは、ゴメンゴメン。それよりさ、扉の前で騒いでたら新人さんかわいそうだし。休憩室行かない？」

「そうだね。また後で来ようっと。」

……行つた？

……結局、何が、言いたかつたんだろう……、

……私を、殺そうとは、して、ない、みたい……、

少女は人の気配のなくなった扉に何気なく近寄つた。そして――、

「!?」

……開い、てる……、どうして……？

「……」

……私は、どうすれば……、

少女は逃げ出した。

何に捕まったのかも分からず、どうすればいいのかも分からず。施錠のされていない安全な部屋から、本能のままに逃げ出した。

毒針を隠す少女 その二

「すみません！私のせいで皆さんに迷惑をかけてしまいました！」

どんなベテランも…、いいや。ベテランであるからこそ、ミスを犯してでも護りたいものを見つけてしまう時がある。

彼は、まだそれを「未熟者」だと思い込んでいた。

「騒動自体は小規模ですんだ。ストームアイ、君が悔やむレベルではない。」

謎の組織に保護された少女は、自分の身を護るために未確認の船の中を逃げ回った。だが、本調子でなかった彼女はその道のプロの手により速やかに取り押さえられた。

「それよりもワルフアリンに気を付けた方がいいな。」

肩を露出したワンピースに皮のパンプスを着こなす姿だけを見れば、その猫科族フェリリーの女性を「医者」だとは思わないだろう。

だが、彼女は列記とした「医師」であり、ロドス・アイランド製薬という感染者問題における一流企業のトップに居並ぶ者の一人なのだ。

それらを証明する達観した表情はいついかなる状況に置かれても崩れない。

冷淡な声色はいついかなる時も彼女に問う者に最適な道を指し示す。

彼女の技能、知識は何人にも劣ることなく、果ては歴史の彼方に埋もれたとされる知識さえも備え、武器に変えてしまう。

彼女、ケルシーはそれらを駆使して幾人もの患者、仲間、時には敵さえも救ってきた。彼女のことをよく知らない者にとつて「ケルシー」という生き物は野放しにされた怪物に映るかもしれない。

確かに彼女の「温もり」は理解しづらい。しかし一度でもそれに触れたなら、彼女の全てが揺るがない「希望の象徴」であると理解することができる。

そんな彼女の冷徹な視線が一人の男を刺した。

「Dr. ノア、これは君に言っている。彼女の乗船を独断で許可した責任は取らなければならぬ。よもや言い逃れをするつもりはないな?」

「…ああ、そんなつもりは毛頭ない。」

ケルシーの勧告にぶつきら棒に應えるその男は、この場で最も気味の悪い出で立ちをしていた。

「人を見た目で判断してはならない」多くの人間が体裁を気につけ、そんな聞こえの良い言葉で自分を誤魔化すだろう。

だがもしも、前触れもなく男と遭遇したなら誰もが男を「重度の感染者」、もしくは危険思想を抱く敬虔な邪教徒、それらに連なる犯罪者と見なし、背筋の凍る思いをするこ

とだろう。

ケルシーが「Dr. ノア」と呼ぶその男は、彼女とは違うシンプルなデザインの白衣を着用していた。

それだけなら誰の目にも、ごくごく一般的な「医師」として誰に警戒心を抱かせることもなかっただろう。

ところが男はそこに、意図的としか思えないようなファッションセンスを見せつける。

男は機能性を重視したかのような防水加工の真っ黒なコートを羽織り、さらには黒の不透明なフルフェイスで素顔を完全に隠してしまっていた。

どれだけの理解力を発揮すればそんな男を見て「医師」と呼ぶことができるだろうか。——ところが、この広い世界において常人には理解できないという物事は往々にして存在する。

ここロドス製薬で男は「ドクター」と呼ばれ、ケルシーと同等の権威と威厳を持ち合せていた。

「ドクター、私の直感なのですが、彼女は決して危険な人物ではないと思います。」

あらゆる紛争を経験し、権力者への偏見を感じずにはいられないストームアイまでもがその男を前にすれば「父と子」のような親しみと敬意が内から滲み出てしまう。

「ロドス製薬」という世界において、Dr. ノアは「救世主」のように誰からも愛されていた。

それだけの実績を男は今も積み重ね続けているのだった。

「分かった、参考にさせてもらおうよ。」

ケルシーもまた、男の能力は認めている。

しかし一方では、「そんな男が肯定したなら事件はもはや解決したのだ」と錯覚してしまふ会社員たちの悪い癖を危惧しない訳にはいかなかった。

「問題を軽視すべきではない、Dr. ノア。彼女の所持していた装備は“暗殺”を意味している。仮にその標的が我々でなかったとしても、“それだけの脅威”を今、我々は懐に置いておくといいことだ。命に優劣がないとはいへ、我々がいなければ感染者は誰一人助からない道理を努々^{ゆめゆめ}忘れないでもらいたい。」

男には分かっていた。同じ答えに行き着いているはずの彼女が敵意を込めて反発する理由を。

「現に、ストームアイは帰投中に彼女に襲われている。さらにはロドスに收容されてからも反抗の意思は何度も見られた。これ以上の彼女への支援はオペレーターだけでなく、患者への危険も意味するが。それでも君は彼女をロドスに置いておくつもりか？」

ここロドスにおいて、ケルシーとノアという最高指導者同士が睨み合う光景はお馴染

みのことなのだろう。

明らかに険悪な空気をかもし出しているというのに、スチームアイが殊更ことさらに取り乱すということとはなかった。

「彼女の異常なまでのステルス性がアーツによるものかどうかも未だ確認できていない。であるにも拘わらず、君はその選択が正しいという根拠を提示していない。今のままでは君の選択を容認することはできない。」

「賭けるか?」

「何?」

男の放ったその一言は、彼女の親切心に容赦のない亀裂を打ち込んだ。

「時に、多くの死線を目に焼き付けてきた戦士の勘はどんな邪推よりも真実に迫ることもあるということさ。」

ドクターもまた淡々と、しかしフリーンの彼女とは真逆の挑発的な口調で言い放った。

「私はスチームアイの言葉を信じるよ。彼女の今までの反抗的な行動は事故だとね。であれば、我々と彼女との信頼関係を築く余地はまだ十分にあるだろうな。そもそも彼女が暗殺者か一般人かという問題は重要じゃない。私たちにとって彼女が危険であつても、今の彼女にとって我々は絶対に必要な存在だ。ケルシー医師、どうだろうか。私は

何か間違つたことを言つてゐるか？」

男は律儀に彼女が危惧する「独裁的な救済」を否定した。

しかし、男の物言いは少なからず、彼女の自尊心や彼への想い遣りを傷つけた。たとえそれが、これまで彼に攻撃的な態度を取つてきた彼女自身が原因だったとしても……。

「私にはキサマのその発言が、個人が背負うべき責任を体よく仲間に擦り付けているように聞こえるが？」

「そうかもしれないな。だが、それも仕方がない。私は万能な人間ではないからな。私たちは支い、支えられて生き延びているに過ぎない。」

「キサマの『指導者』の器はその程度なのか？ 仲間の命を『直感』に置き代えてヘラヘラとしている今のキサマはまるで『ペテン師』のようだぞ？」

これこそまさに売り言葉に買い言葉。

火の点いたこの秀才たちを止められる者はそうはいない。少なくとも、ただのベテランごときが口を挟んだところで焼け石に水だということはベテラン自身がよく理解していた。

彼はただ、嵐が過ぎゆくのを見守るしかないのだ。

「史実に残る偉大な将も、名探偵による推理も、何事にも動じない大胆不敵さと類稀な
インスピレーション
オプチミズム
勘 〃 があればこそなせた功績じゃないのか？」

「反面、それらに頼り過ぎた暗君がどれだけいるかキサマは数えたことがあるか？ 良い面ばかりを見て全容を見ない今のお前はともじやないが優れた指揮官とはいえないな。」

「万能の名君こそ暴君と表裏一体だ。言っているだろう？ 時には愚かでなければ仲間など必要ない。むしろ私には“万能”に拘るお前の狭量さこそが医療主任として問題だと思ふよ。よくも今まで誤魔化せてきたものだ。」

……よくもまあ、こんなにも派手な言い合いができるものだ。

見守る部下は、二人の人間関係を心配するあまりゲンナリとせずにはいられなかった。

「…好きにすればいい。だが、次に彼女の姿が消えたなら、その時は真つ先にお前の命がなくなると覚悟しておくんだな。」

「必要ない。私は自分の直感も捨てたものではないと自負しているからな。」

「おめでたい奴だな。本当にそう思っているのか？キサマの首を飛ばすものが“暗殺者”だけだとして言い切れる。だが、そうだな。“暗殺者”であつた方がキサマのチンケなプライドとやらは護られるかもしれないな。優しい彼女が憐れな君を慮おもんばつてくれることを心から願つておいてやろう。」

忍耐強く理知的なケルシー先生が、そんな目で人を見下すのはドクターくらいのもの

だろう。

ストームアイはとても、とても残念な気持ちで上司の片割れを見送った。

「ドクター、毎回思うのですが、やり過ぎではないんですか？」

恒例のこととはいえ、二人の痴話喧嘩は…、痴話喧嘩であるはずなのだが…、互いに容赦なく致命傷を狙い続けるデスマッチを見ているようで気が気でなくなる。

「すまないな、ステイ。なにも彼女を嫌って言った訳じゃないんだ。これくらい釘を刺しておけば、今回のことに彼女がこれ以上首を突っ込むこともないだろう？」

「え、じゃあ、さっきのはケルシー先生を庇ったってことなんですか？」

D r . ノアは、その不審な出で立ちからは想像もつかない朗らかな苦笑を漏らした。

「ステイ、それじゃあまるで私が根っからの善人みたいじゃないか。私はどちらかと言えばマンティコアの子のことを想って言ったのに。」

ストームアイは驚いた。

犬猿の仲とまでは言わなくとも、口喧嘩の絶えない二人が二人とも、お互いのことを想い合っているという真実がそこに隠れているとは知る由もなかった。

あの言葉遣いからそれを予想できるものがあるだろうか？

もしかすると、自分を氣遣ったウソなのかもしれない。そうであつたとしてもドクターの口からそんな言葉が聞けたことに心の底から喜びを覚えずにはいられなかった。

「ケルシーはあれで時々、過激なところがあるからな。トラウマという点ではワルファリンといい勝負だよ。」

「…それだけは先生の前で言っちゃダメですよ?」

「どっちの?」

「両方ですよ!」

部下の肩を優しく叩きながら気を遣った冗談を言うその姿は根っからの善人なのに…。

ストームアイは尊敬する、けれども天邪鬼な二人がいつか肩を並べて笑える日が来ることを心から願った。

幸か不幸か。ノアとケルシーにとって人生最大の受難を胸に抱く厄介な存在が、今この瞬間に、誕生してしまった。

——ロドス艦内、通路

「おや、ドクターじゃないですか。こんにちは。」

マンティコアの少女を見舞いに行く道すがら、フルフェイスの男は兎族^{コータス}の青年に出会った。

「ああ、ドクターも彼女の所に行くんですね。ちょうど良かった。私も伺おうと思つてたところなんですよ。」

白髪で利発な口調の彼は、この不審な男の姿を捉えてやや表情を明るくしたように見えた。

「二人でか？」

「そうですね、あまり大勢で押しかけても良くないでしょう？」

「そうだな。じゃあ私は君の邪魔をしないよう心がけることにするよ。」

不安、というよりも緊張に近いものだどドクターは覚り、軽い冗談を言うと、コータス族の彼は、男性とは思えない愛らしい笑みと、それと同等の魅力をかもし出す長く垂れた耳をフワフワと動かした。

「ドクターも人が悪いですね。邪魔だなんてとんでもありません。むしろ参考までにお聞きしたいのですけれど、」

彼、アンセルはロドス医療部の医師見習いであり、医療部主任であるケルシー女医の直属の部下でもある。

つまり、あれだけの暴言を吐いてやったというのに、それでも彼女はどこかの誰かさんの身を案じて部下を送っていたらしい。

その分からず屋な事実を目の前にして、私は何とも言えないもどかしさ覚えた。

「彼女の緊張をほぐすのに、ドクターであればなんと声をかけますか？」

そのせいなのか。何の罪もない彼にまでアレへの皮肉を漏らしてしまったようだ。

「…そうだな、プライドの高い猫を一匹放り込んでみるとうのはどうだ。ペット療法は手間もかからず効果的だ。…だが、君には少し難易度が高過ぎるか。」

「え、猫ですか？」

アンセルの、愛らしくも理知的な表情はどことなく「あの猫」に似ていた。そう思うと逆に申し訳なさが募った。

「いや、今のは忘れてくれ。…ところで君はなぜ緊張しているんだ？ 普段から患者を相手にしているだろう？」

「…そうですね。少し言いにくいことなんですが。彼女、先日、治療室で怖い目に遭ったらしいじゃないですか。」

ああ、ワルファリンの件か。彼女も悪気があった訳じゃない。ただ、優秀過ぎるが故に知的好奇心に抗えなくなるということとは…、あるものだ。

「どうすればその誤解を解けるのかということが頭から離れなくて。」

まあ、彼女の悪い所といえば、それを「悪い」と感じていないところだろうな。

…選り好みするあの傲慢ちきな耳に「注意」なんて言葉は届かないからな。私の秘蔵の研究成果の一つでもチラつかせて自重させてみるか。

だが今は、彼の力になることの方が何倍も有意義かつ遣り甲斐があるというものだ。

「…そうだな、君自身のことを語ってやったらどうだ？」

「私の、ですか？」

「そうだ。そもそも」謝罪」は友好関係のある相手と、より深い関係を築くために一度リセットしようという前段階の儀式だ。それなのに、何者かも分からない相手から関係をリセットしようと持ち掛けられても混乱させるだけだよ。」

勤勉なアンセルの性格が視線となつて私を見詰める。

その表情はどことなくアーミヤに似ていなくもない。彼の方が若干の幼さを感じさせるが。

「謝罪は関係が深くなつてからでも遅くはないんだよ。」

…それも、程度によるだろうがな。

「それに、未だ彼女は訳も分からずにロドスに運び込まれているような状況だ。おそらく彼女はこの船の人間の為ひととなり人を知りたがっているだろうね。ましてや彼女は何かしらの戦闘員だ。彼女自身もまた、自分の立ち居振る舞いを決める材料を欲しているんだよ。アンセル、”得ようと思うならまず与えよ”だ。」

「まったく、その通りです。勉強になります。」

「ここから、君が畏かしこまってどうする。君自身がリラックスしていることも重要なポイント

トなんだぞ?」

…少しイジワルをしてしまったかもしれない。

彼の性格を思えば、教えを乞うている最中にリラックスできるようなタイプじゃないと分かっているのに。

だが、これは大切なことなんだ。一人でも多く、一つでも多く学ぶことは。

それはいつか必ずアーミヤの助けになる。ロドスを護る盾になる。

だから、皆には頑張ってもらわねば——、

「は…、ハッイッ!」

…彼は何か勘違いしたらしい。その声と仕草はまるで…そう、アイドルだ。

「ぷっ、ハハハハッ!」

「あ、ヒドイです!何が可笑しいんですか!?!」

おそらくソラを真似たのだろう。そう思うと彼が普段、彼女のことをどう思っているのか分かったような気がしておかしかった。

「…それと、さつきから気になっていたんだが。その右手に持っているものもしかして……、」

私は彼が握りしめている紫色のドリンクらしいものを指して言った。

「ああ、これですか?これはハイビスの作った健康ドリンクですよ。彼女も一緒に来る

はずだったんですが、仕事で来れなくなつたので代わりにと渡されました。」

…緊張が彼の判断力を鈍らせたのか。

ただでさえ追い回して不信感を与えている少女に対し、信じ難くも「ロドスの洗礼」を浴びせようとしていた。

「そうか。フム。だが今回は止めておいた方がいいな。衰弱した体に健康食は刺激が強過ぎる。」

「…そうですね、確かに。さすがドクターです。彼女の容体を失念していました。医師見習いだというのに恥ずかしい限りです。」

「そう気に病むな。」

これだけは自信を持つて言える。私は今、確実に一人の人間を救つた。

——砂嵐が、イナゴの群れのように荒野を縦横無尽に飛び回る中、岩陰に少女が蹲っていた

マントで体を覆い、微動だにせず、彼らが通り過ぎるのを待つていた。

砂嵐たちは彼女の鋭い五感と結託して少女を徹底的に痛めつけた。

悪意のない攻撃に晒されながら、少女は健気に自分の状態を顧みる。^{かえり}

その痩せ細った体が、あと何日耐えられるのかを。

ノド、渴いた……、

辺りの音が、聞き取れない……、

…肌、カサカサ……、爪も、割れてる……、

体のヒリヒリ、だんだん、酷くなってきた……、

マントの隙間から、砂、入ってくる……、尻尾、邪魔だな……、

体、休めても、意味、なくなってきた……、

…私……、もう……、

「そうやって身を隠して何日経つ？」

「きやあ!？」

そんな叫び声を出す余力があることに、少女自身、驚いていた。

「酷い姿だな。」

唐突に現れた男は何の化粧もない不気味な白い面マスクをしていた。

どこの部族なのか、少女にはわからない。けれども、真面目な一族ではない。それだけは直ぐに察した。

「私、何も、してない……、」

殺される。男のかもしれない出ただならぬ気配が、彼女に危機感を覚えさせた。

ところが、男は彼女に何もしなかった。

「獲物も取れず、死にかけている。憐れだな。」

「私、誰も、殺してない……、」

「…そうやって無抵抗を主張していればどこかに自分を救う救世主メシアが現れるとも思っているのか？ そんな妄想にすぎる余裕があるのなら町の偽善者どもの前でも同じことをしてみるといい。すぐにでも目を覚まさせてくれるだろう。」

「誰も、殺してない……、武器も、ない……、」

逃げ出す気力もない。それでも、彼女は必死に「危険」から逃げようとしていた。

「笑わせる。生まれ持った大層な武器はただの飾りか？」

「違う…、これ、気を付けてる……、誰も、殺して、ない……、」

「感染も随分進行しているはずだ。その衰弱した体では一週間も持たんだろうな。」

「ど、どうして、それを…!？」

少女の問いには答えず、男は水の入った皮袋を投げ寄越した。

「え……？」

「付いてこい。症状を抑える薬をやろう。その代わりに、我々の下で働け。リーダーならキサマのような惨めな怪物でも利用価値を見出してくれるだろう。」

少女は戸惑った。

砂嵐が頭の中までも埋め尽くしているかのようになり、目に映る死の姿かれにノイズが走り続けた。

落ちている水筒かわぶくろの中身が、毒なのか、水くすりなのか分からないでいた。

「ここで死に絶えたいというのなら好きにすればいい。ここはいかなる死も拒まない。」
そう、彼は「死」ではない。

今、砂嵐の中に佇んでいる、立ち尽くしている自分自身こそが、「死」そのものだった。
「ま、待って、い、行く…、私、まだ、やだ…、」

少女は夢中で水筒にしがみつき、腹を空かせた獣のように罅割れた全身に流し込んだ。

「おい、一気に飲むと逆効果だぞ…。」

男が声を掛ける頃には皮袋の中は空になっていた。代わりに、少女の瞳に光が宿る瞬間を目の当たりにした。

そして、その目を見た男は悟った。

…俺の力ではもはや、この女をどうすることもできない。
殺すことも。餓死させることも。

見たことのない色で輝く瞳に睨まれたその瞬間、男は抗いがたい恐怖を覚えた。

「…来い。飯を食わせてやる。」

でなければ、俺はコイツに喰われる。

少女にその意思是微塵もない。

それでも男の本能は告げるのだ。

俺は、この地に眠る邪神を起こしてしまったのかもしれない。

背中に触れる飢えた肉食の生温かい吐息が、男に絶えず悪寒を与え続けた。

少女は、鋭くも巨大な「死を注ぐ尾」を引き摺り、往く道をどこまでも擦り続けた。

—— ロドス艦内、宿舎区画の一室

少女は夢を見た。

自分の命が認められた瞬間の、罪深い夢を。それが、彼女にとって唯一すぎることを許された居場所だった。

「…あ、れ……う？私……、（こ）……、」

それは、もはや見知った天井になっていた。

馴染み深くはない。けれど、なぜか「安全」を彼女に囁きかけるような穏やかな表情をしているように思えた。

「戻って、る……、」

優しく支えてくれるマットレスとフカフカの毛布が彼女の帰りを歓迎していた。

「どう、して……?」

決死の覚悟で逃げ出したはずの場所に帰ってきていた。

自分は「脱走した」という夢を見たのだろうか?

少女はどちらか区別のつかない記憶を手繰り寄せ、今に至る経緯を理解することに努めた。

脱走は順調だった。誰にも気付かれていない。

頭上に注意を呼びかける機械が喚いていたけれど、それさえ黙らせてしまえば自分を見つけられる者は誰もいないはずだった。

そう思っただけで行動していたのも束の間、何者かの罠に引掛かかってしまったのを憶えている。

複数人で巧みにコミュニケーションを交わし、それと気付いた時にはすでに遅く、自由を失っていた。

奇妙な言葉を操り、見たことのない装備で身を包んだ彼らが近づく。

「A e r y o u O K ?」

呪文のようだった。

奇しくも、それを裏付けるように急激な運動に耐えられなかった彼女は気絶してしまつた。

けれど、誰も殺さずにすんだ。

…よかつた……、

意識を失う中、なぜかそう思つた。

軟禁部屋？から逃げ出したのだから「死」も覚悟した。

それなのに……、

「……」

そこに人の気配こそあるけれど、自分への監視の目は一つもない。

暗殺者^{しぶん}という存在がここにあるのに、こんなにも平穏な空気が維持されていることが彼女には理解できなかつた。

何か裏がある。

自分を騙そうとしているのかもしれない。

少女は気配を殺しながら辺りを調べ始めた。

「え……う？」

それこそ何らかの意図があると勘繰らせるように、またもや扉は施錠されていなかった。

それはまるで「何をしても無駄である」と言われているようにも感じられた。

「……」

感じた途端に無気力になり、少女は肌触りの良い毛布へと逃げ込み、目を瞑ってしまつた。

私、何、してるん、だろ……、

少し肌寒いけど、ここには血を吸う「砂嵐」はいないし、血を撒き散らす「酋長」たちもないみたい。

私を積極的に殺しにくる人は誰もいない。それに、殺さなくてもいい。

……だけど、ここでも私は一人きり。

もう、死んでるのか生きてるのかも分からない。

私、何をすればいいの？何をすれば、認めてもらえるの？

少女は気付いていた。サルゴンで彼女を生かした組織は彼女を見捨てた。利用価値がないと。「死」を突き付けられた。

けれども今、少女は感じていた。

…温かい……、

…私、まだ、生きてる……、

綿100%の温かさを抱きしめ、思い直した。

そうして少しの間、少女は考えることを止めた。

毒針を隠す少女 その三

彼はできるだけ穏やかに、小さな弟や妹を起こすようにソツと、目の前の扉を叩いた。「こんにちは、ロドス製薬医療部のアンセルといいます。起きていらつしやいますか？」

「…!?」

しかし、アンセル青年の気遣いなど心身ともにくたびれた少女の知るところではない。

それがどんなに爽やかなモーニングコールでも、そういう環境で育った彼女の耳には敵陣で無防備を決め込んでいる愚かな自分を撃つ銃声にしか聞こえなかった。

少女は「毛布の虜」から慌てて抜け出し、足音を立てずに扉の真横に張り付いた。すると、

「ドクター、笑うのは止めてくださいって言ったじゃないですか！」

ノックをした青年の意味の分からない抗議と、それに続く何者かの苦笑が聞こえてきた。

「…眠っていたなら申し訳ありません。私はアンセルと言います。」

…どうして、名乗るの……？

これまで少女に紛争地帯以外での他人との交流経験はほとんどなかった。

彼女に近付くものは争いで腹を満たす「武装集団」、もしくは彼女を疫病の元凶と一方的に迫害する「町の人間」ばかりで、彼らは決して彼女に名乗ることはなかった。

名乗らず、少女を思う存分傷つけた。

「悪魔」「怪物」「化け物」……、

少女は振りかざされる暴力に追い立てられるままに逃げ回った。殺虫剤から逃げ感う虫のように。

「……眠っているのでしょうか？」

「どうだろうな。手当てした時にはひどく弱っていたのに数時間後には艦内を元気に駆け回るような子だ。案外、ベッドの中から聞き耳を立てているかもしれないぞ？」

「……もう少し容体が安定してから伺った方がいいんでしょうか……。」

「おいおい、自分の目的を忘れたのかい？ここで何もせずに引き返すのなら彼女にとって君はその程度の人物だと取られてしまうよ？」

「……そうですね。私が臆病になっただけなら理解してもらえるものも理解してもらえませんよね。」

「……意図が分からない。」

扉は開いているし、相手は自分を捻じ伏せる力を持っている。

彼らはなぜ自分と会話しようとするのか？なぜ中に入ってこないのか？

少女の生きてきた“サルゴンの荒野”という限られた経験ではその答えが見つからず、耳を敬そはたても何の解決法も得られなかった。

「すでに何方どなたからか聞き及んでいるのかもしれないが、私たちは“ロドス”という製薬会社に所属している者です。」

…ロドス？…お医者、さま？知らない…。クルビア人の、会社？

「私は医師見習いのアンセル、もう一方はひとかたロドスの様々な作戦の総指揮を務めるDr. ノアです。」

…作戦？ドクター先生？…もしかして、あの、女悪魔メデューサつ!?

マンティコアの少女はあの“悪夢”が再来したのだと知ると、「絶望」が顔に張り付き、腰を抜かしてしまった。

ところが――、

「初めまして、Dr. ノアという。…私たちは、君のことを何と呼べばいいのかな？」

耳に届いたのは、なんとも不思議な耳触りの男の声だった。

「…誰…………？」

どうしてそういう気持ちになったのか説明はできない。そういう気持ちになったこ

ともない。けれどもそれは、一度耳にすれば生涯忘れない声色だった。だからこそ、断言できた。

……怖い人じゃないのかもしれない。

「……」

たちまち、少女は扉一枚隔てた相手の姿を確認したい好奇心で一杯になった。

けれども「経験」が邪魔をして扉を開けることができなかつた。

サルゴンの荒野が、姿を晒さない「安全性」を彼女に説いてきた。だからこそ、今まで辛うじて生きてこられた。

彼女にとってそれは小さい頃から叩き込まれてきた唯一の、親からの教えのようなものだった。

「……私たちはアナタの^{オリバシー}鉤石病の治療の手助けができればと思っています。」

……え？……私の、病気を……？

「もちろん無理強いは致しません。アナタの希望が第一です。それと、今の私たちの技術では症状を和らげることしかできません。それを踏まえてアナタの意思を伺えればと思つて訪ねてきたしだいです。」

……治、せるの……？

砂嵐と紛争に抱かれて生きてきた少女に難しい言葉は理解できない。ただ、青年の言

葉に今まで生きてきて一度も見たことのないオアシスのようなものを見た気がした。

あの不毛の砂漠だいちのどこかに「黄金都市」が眠っているのだと譚言うわごとのように語る、廃墟で死を待つばかりの老人たちのように。

虚ろで、愚かな…、けれどもそれだけで胸を満たす「希望」という名の蜃気楼がそこにあるような気がした。

返事どころか、在室している気配さえ感じさせない少女の部屋はどことなく、二人の訪問を拒絶しているように感じられた。

それでも、ドクターに見守られるコータスの青年は少女が少しでも心開くことを期待して呼びかけ続けた。

「私はまだロドスに来て間もないのですが、ここにいるドクターを含め、ロドスの方々はとても優秀な方々です。誰もが諦め、背を向けるような局面でも新しい見地や不屈の精神で挑み続ける姿は私の憧れでもあります。」

…何を、言っているの……？

「…ロドスに入る前の私は、悲惨な運命を辿らざるをえない感染者たちを目にして何もできずにいました。兄弟や両親に災いが降りかからないよう努力するしかありませんでした。」

……、
……、

「つまらない話です。アナタにはなんの役にも立たない話かもしれませぬ。…ですが、私はもう見て見ぬ振りをしたくはないんです。あの頃の私なら、何をしてもアナタの力にはなれなかつた。ですが今は、違うんです。そのために私はロドスにやって来たんです。」

………私は…、逃げて、きたよ……、

…この力は、誰の、役にも、立たない、から……、

…皆を、不幸にする、から……、

「私はあまり頭の出来が良くなって、ロドスに入社するまでの採用試験は散々でした。ですが、今ではそれで良かったんだと心から思います。」

…皆が、私を、避けた……、

…皆が、私を、棄^すてた……、

「ロドスの皆さんは他では得難い心から尊敬できる人たちだったからです。」

…アナタは、恵まれてるよ……、

…だって、私は、そんな声で、話せない……、話す、勇気が、ない……、

青年はなおも呼び掛けた。

それこそ青年がここへやって来た理由なのだから。

隣で彼が見守っているのだから。

「不快に思わないでいただきたいのですが、ドクターはアナタの力を必要としています。」

……え……？

「もちろん、主な現場は戦場になってしまいうでしよう。ですが決して、ドクターは私たちをただの戦闘員として扱うことはありません。ドクターは私たちを“戦友”と呼んでくれます。」

……、

「時々、ドクターは私たちを気遣うあまり、自分を顧みない時があつて困ることもあります。ドクターが指し示す道があまりに眩しくて怖気づいてしまうこともあります。ですが、ドクターは優しく、強い方です。自分たちの力を信じさせてくれる人なんです。」

……、

……、

「私だけではありません。ロドスにいる多くの人々がドクターに命を救われています。それに、ロドスでは感染者だから、健常者だからといって差別されることはありません。」

……、

……、
……、

「ドクターやケルシー先生の理想が、私たちの未来を支えてくれているからなんです。私は、ロドスに携たずまわることができて、本当に幸せです。」

……、
……、

……いて……、

「ロドスはこれからも成長します。この世界のあらゆる“病”を治せる日がくるのも夢ではないと私は思っています。」

……、

……願……、

……気付い……、

「……もちろん、治療を受けるだけでも構いません。ですが、もしよろしければ考えてみてください。ロドスの一人として私たちと同じ夢を見ることも。」

……い、や……、

……待……、

……わた……、ここ……ッ！

「それでは、また日を改めてきますので。今は十分に体を休めてくださいね。」
……………お、願ひ……………、

置いていかないで……………。

「……………」

「どうしたんですか、ドクター？」

踵きびすを返し立ち去ろうとするアンセルは、敬愛する上司が機能停止したロボットのように彼女の部屋の前で固まり、ジッと扉を見遣っていることに気付いた。

そして、思いもよらない一言を口にする。

「…声が、聞こえなかったか？」

……!?

「え、私には何も。ドクターの聞き間違いでは？」

カップ麺やコーヒーの暴飲暴食。睡眠不足に運動不足。

少なくとも、不健康がマスクを被って歩いているような人間よりは聴覚に自信のある
コータスはハッキリと答えた。

…ドクター、私、頑張るからっ!!

「……」

この体が不健康の塊だということは十分すぎるほどに承知している。幻覚、幻聴が自
分に囁きかけているとしても何の不思議もない。

それでも、私は見詰め続けた。意固地に。

……この感覚は私にとって、忘れてはならないもののはずだ。

…そうだ、間違いない。そこに、「助けを求める誰か」がいる。

…お願い……、私も、一緒にいさせて……、

「……ドクター？」

フルフェイスの男は何も言わず、扉の隙間から何かを差し込んだ。そして、岩戸に向かつてたった一言、なんの変哲もない呪文を唱えた。

「中に、入っても構わないかな？」

特別な力など必要ない。人は、自分の力で道を選べる生き物なのだから。

扉には初めから鍵など掛かっていないのだから。

「……え？！ドクター、これは……、」

隙間から返ってきたメモにはただ一言、「うん」とだけ書かれていた。

……どうして、そうしなかったんだろう。

少女はゆっくりと光を招き入れる扉を見詰めながら思った。

恐かったから？ 自信がなかったから？

自分には力があつた。それは自覚している。むしろ、それしか自分には取り柄がないのだという確信があつた。

だからこそ雲の上の人の暗殺を頼まれ、やり遂げることができた。

それでも、一度として「自分の存在」を認めてもらえたことがない。

どんなに自分を犠牲にしても、いつの間にか彼女の居場所は失くなっていた。いつか

は棄てられた。

荒野に打ち捨てられた獣の残骸のように。

無造作に。無慈悲に。

…でも、いいの……、

…私は、「怪物」、だから…、

…いつか、現れる、英雄に、殺されるための、「悪者」、だから……、

彼女と同じ世界に住むあらゆる存在が、彼女を忌み嫌うべき「怪物」に育て上げ、彼女を執拗に世界から追いやった。

だから、想像することができなかった。

この扉の向こうに「私を護ってくれる誰か」がいることを。

自分の人生にも「希望」というものが存在するのだということ。

だからこそ、これは彼女の人生における「最大の幸運」と呼ぶべき出来事なのだ。

「希望」が自ら扉を開け、彼女を迎え入れようというのだから。

だがその「幸運」も、何もかもが彼女の理想に込えられる訳ではなかった。

「…!?!」

少女は「幸運」を見て本能的な恐怖を覚えた。

それは決して、礼を欠いているとか、人を見た目で判断しているとか。受け手側の未熟さのせいではない。

「幸運」が、人間社会においてあまりにも分かりやすい「悪」の形をしているのが悪いのだ。

むしろ、初対面で「幸運」の容姿を見て何も感じない人間は、おそらく「人間として」何かが欠落している。

もしも彼女が、正体を隠し、暗殺を生業にする白いマスクの集団の中で生活した経験がなければ、今この瞬間に「幸運」は首を刎ねられていたに違いない。

そういう意味では、少女の負ってきた不遇な人生は「幸運」にとって人生を左右する幸運だったと言わざるを得ない。

メモとペンを投げつけそうになる手をどうにか思いとどまることができたことに関しては「奇跡」と呼んでしかるべきだろう。

心許しかけていたところだっただけに、少女の動揺は大きかった。

しかし悪いのは見た目だけで、フルフェイスの「幸運」には少女の期待以上の魅力が詰め込まれていた。

「…すまないが、どこにいるのかこちらには分からないんだ。良ければ、そのテーブルに着いて話さないか？」

一挙一動が、少女の目を魅了した。

何が違うかは分からない。けれども間違はなく他の人間とは何かが違う。

男がテーブルを指さすその水草だけでも、多くの人間を観察し殺してきた少女の瞳には天球に指を添え、夜空に輝き舞う星々を動かす魔法使いのように異様で、美しい姿に映っていた。

それは、彼女の暗殺者としての「警戒心」が初めて見る人種の情報をつぶさに観察したからこそ生じた「誇張」なのかもしれない。

だからこそ、一方では彼に得体の知れない近寄り難さも感じていた。

『アナタが、ドクター？』

少女は刺激しないようにソツとテーブルにそのメモを置くと、姿は見えていないと分かっているように、逃げるように彼らから離れた。

「そうだ。私がDr. ノアだ。こんな姿で驚かせてしまったかな？」

男はまるでその様子を目に捉えていたかのように答えた。

「ああ、なるほど。そうですね。私たちは見慣れているから何とも思いませんが、初対面の方は少し面食らってしまうかもしれませんね。」

そう、なんだ。ずっと、その格好、なんだ……。暑く、ないのかな……。

ソレが本物の「人間」だと分かると、少女のドクターへの関心はさらに枝分かれし始

めた。

「すまないね。私にも色々事情があるんだ。どうしても人前でこのマスクを脱ぐわけにはいかないんだよ。」

『わかった』

「ありがとう。」

そうして少女は「恐くない、恐くない」と自分に言い聞かせることでようやく、おっかなびっくり彼らの向かいに着くことができた。

そこからは少女にとって、見たことのない世界への「扉」を開けるような衝撃的な感覚の連続だった。

「新鮮な食べ物」や「襲撃のない寢床」が暗殺以外の手段で得られる報酬であること。

死に神と揶揄される「感染者への治療」が人の目を気にせずに受けられること。

果ては、少女の世界の代名詞でもあった「“砂嵐”や“太陽”の渇き」から逃げ回る必要がないのだということ。

これら全てが「ロドス」という会社に入職するだけで叶えられる。

それは少女にとって、そこが世界でなくなる、世界の終焉と創生を同時に目の当たりにするような異次元の感覚に満ち満ちていた。

少女は押し寄せてくる希望と過度な恵みへの不安のせめぎ合いに、先程までとは別の

困惑に囚われ、返事の一つひとつにたくさんの時間を費やした。

それでも、一步一步が痛いくらいに新鮮で、鳥肌の立つような期待が絶えず少女に感じたことのない「生の実感」を与え続けた。

この人は、私を「怪物」と呼ばない。皆と同じように「マンティコア^{コードネーム}」で呼んでくれる。

感染者なのに。殺し屋なのに。少しも怯えない。

見えない私を、真剣に見詰めてくれる。

マスクが邪魔をして私もこの人の瞳は見えない。だけど、なぜだか分かる。この人は「一生懸命な人」だ。

自分が生きることにも、私を生かすことにも……。

何度も頬を掴^{つか}った。それでもこの人は私の前から消えない。

怪物^{わたし}を狩りに来たサルゴンの英雄じゃないのに。
皇帝^{バーティシヤ}に取り入るサルゴンの酋長たちや、その配下でもないのに。

…ううん。だからこそ、

——この人は絶対に私を裏切らない

今度こそ、ちゃんと確信できた。

…湧き上がってくるの。

言い知れない気持ち。初めての気持ち。

『わたし、がんばります』

あの砂嵐の中にいた頃は考えもしなかった。

自分の「気持ち」を文字ことばにする日が来るなんて……。

それを、誰かに聞いてもらえる日が来るなんて…、夢にも思わなかった。

——ロドス艦内、通路

「すみません、ドクター。」

コータスの青年は今日もまた「未熟な自分」だったことを反省していた。

「せっかくドクターからアドバイスを頂いたのに、結局はいつものようにドクターの力に頼ってしまいました…。」

良い所を見せたい。

他人の目をあまり気にしないアンセルにとって、それは特別な感情だった。

初めは、純粹に不遇な少女を心配して訪問したはずなのに。尊敬する人が隣にいます。ただで、いつの間にか手に汗を握っていた。

けれどもこの人は、無様な僕を笑わない。

「よく頑張ったね」と褒めてくれる。

「私だつて彼女の声に気付いたのは偶然なんだよ。年を取るとね、聞こえないものが聞こえるようになるものなのさ。」

そう言つて優しく頭を撫でてくれる人だからこそ、アンセルは彼という大人の存在に涙が出そうになる。

苦笑いで誤魔化さないと、さらに格好悪い姿を見せてしまひそうになる。

「…それは彼女に失礼なんじゃないですか？まるで亡霊か何かじゃないですか。」

「おっと、そうだな。せつかく、こんなにも話してくれたんだ。あの子の気持ちはしっかりと届けないとな。」

「…そうですね。」

持つてきたメモでは足りず、部屋にあつた紙という紙を使って交わした「彼女との会話」をアンセルは握りしめていた。

それら全ては、彼の隣で冗談をいう男が引き出した「人の想い」。

共に命をかけて戦つた戦友にさえ素顔を見せない不義理な人だけけれど、それでもこの人と言葉を交わせば見えてくる顔がある。見せてくれる優しさがある。

この人は、私たちには見えないものを見る目で、沢山の命を救える人なんだと。

「それと、君は自分には力が足りないと言うけれど、掛けた言葉がどんなものであれ、そ

れが本心であるなら、言葉は必ず相手の心を響かせているものだよ。」

「…そういうものでしょうか。」

「ああ、熱心に語る君の横顔は実に格好良かったよ。」

「…ドクター、からか揶揄わないでください。」

「ハハハ。」

頭を撫でられるのはそんなに好きではないけれど、僕にとってドクターはそれが許せる、とても特別な人だった。

毒針を隠す少女 その四

「すまないが、これでは君たちの申請は受理できない。」

私とアンセルはマンティコア——サルゴンの荒野から密航した少女はロドスでの呼称も種族名である「マンティコア」を希望した——との対談を記録した紙をもって、ケルシーとドーベルマンに社員オペレーターの適正を診断させた。

そして、二人は一通りの書類に目を通して5分と経たずに返答した。

一方は医療部において全ての患者の医療記録カルテを記憶し、それらに適した医師、看護師を割り当てる敏腕の女医。

一方はポリバル軍で大佐を務めていた元軍人であり、ロドス加入後は「戦闘員」としての能力を求められるオペレーター全員を管理するロドスの最高位軍事顧問。

人を見る目に関して二人はこのロドスにおいて右に出る者のいない適任者だ。

「なぜですか、ケルシー先生？」

そうだと知っていても、アンセルは食い下がった。

合理主義の彼だが、必要な時にその後ろ盾になる「信念」も持ち合わせているということだ。

「そんな愛すべき教え子の懸命な願いにも、ケルシーは適切な判断でもって拒絶の意思を明示した。」

「確かに、これらのメモを見る限り彼女は誠実な人間なのだろう。だが、我々は未だに彼女とのコミュニケーションを確立できていない。このような、なんとも言い逃れのできる記録だけで為人^{ひととなり}を精査するには彼女の経歴は危険すぎる。」

「…教官も同様の意見で彼女を疑うんですか？」

「アンセル、これは疑う疑わないの話ではない。我々ロドスは“感染者の問題”を解決するという企業方針を掲げているが、一方でこれらの権利を維持するために政治への不干渉を貫かねばならない。それは君も承知しているな？」

「…はい。」

「よろしい。」

「敢えて分かりきった答えを相手に口にさせることで共感性を高め、「自白」を誘導するのは尋問の基本中の基本だ。」

アンセルは今、プロの軍人を相手に経験のない戦いを挑んでいる。

ドーベルマンはテンプレートに擦^{なぞ}って勇敢なコータスの少年を何人目かの「ウソツキ」に仕立て上げようとしていた。

「では、改めてケルシー先生の言葉の意味を汲み取ってほしい。冷静沈着、理路整然を

信条モットーにしている君なら我々の懸念が理解できるはずだ。」

「……」

ワルファリンいわく、マンティコアに付きまとう「認識阻害」は潜在的な能力アーによるものらしく、彼女に意識がある限り否応なく周囲に働きかけるのだという。

その能力を買われ、彼女はサルゴンの権力を裏で操ろうとする組織の一人として暗躍していた。

彼女自身にその自覚があらうとなかろうと、その事実は変わらない。

「ロドスは『感染者』というだけで誰も彼もを受け入れられる訳ではない。そして我々は彼女以外にも助けを必要とする多くの患者を抱えている。この際、彼女が誠実であるか否かも議論の対象ではないんだ。……教えてくれ、アンセル。私はどこまで君を追い詰めればいい?」

理性と人情に葛藤するアンセルの様子に溜め息を吐き、彼女は木槌ガベルを振り上げるように付け足した。

「これ以上、君に反論がないのならこの件はここまでだ。我々は彼女を受け入れることはできない。だが、彼女が暗殺を生業とする組織の一人であるように、ロドスが感染者へ救済の手を差し伸べる組織であることに変わりはない。下船するまでの間、できる限りの治療を約束しよう。……それで構わないか、ケルシー先生?」

「ああ、そのつもりだ。」

ケルシーは余計な口出しはせず、言葉少なに答えた。

「いいな、アンセル？」

ドーベルマンが、子どもに言い聞かせるように念を押すと、コータスの青年は覚悟を決めた表情で一つの単語を口にした。

「……スウェーパーSWEEP、」

「…ッ?!?ドクター?!?」

彼の口にした言葉に過度な反応を示したドーベルマンはテーブルに拳を立て、容赦なく私を睨み付けた。

「アナタと言う人はいったい何を考えているんだ!」

「…ドーベルマン、少し落ち着け。」

興奮する相棒を宥めるなだフェリーンは「やはりこうなったか」とでも言うように溜め息を吐き、できるだけ穏やかな声で青年に尋ねた。

「アンセル、君はその言葉の意味をどこまで理解している？」

対して、彼女の優秀な助手のコータスは上司の圧力に押し負けまいと眉間に目一杯力を入れて答えた。

「…何も。ただドクターからこの言葉が彼女を助ける糸口になると言われただけです。」

「そうか……、」

「そう思い詰める必要はない。いくら私でもこんな形で君をロドスの指導者の立場から追いやろうなどとは考えていないよ。」

彼女と共にロドスを支え合う立場であるはずの黒いコートの男が言うと、ケルシーはその特徴的な目尻をキツク吊り上げた。

「どうやら今回はこれまでのようだが、キサマならこんな手を使わずとも場をまとめることができたんじゃないのか？ それとも、マンティコアの加入は手段に過ぎず、これがキサマの目的だったのか？」

「両方だよ。」

「……どういう意味だ。」

「言葉にする程のことでもないさ。お前がプライベートで何をしていようと私の知ったことではないが、彼女が手を貸してくれるのなら、お前のしたいことに大きく貢献してくれることは間違いないだろう？」

「……」

アンセルはもちろんのこと、ドーベルマンにとっても二人が交わしている遣り取りの全てを理解している訳ではない。

ともすれば、記憶を失くしたドクター自身、自分の言葉に100%の確信はないのか

もしれない。

それでも全てを見通してしまう彼の異常なまでの慧眼けいがんをもってすれば、女医の「隠し事」も見透かしてしまうのかもしれない。

「何度も言うようだが、私はお前のしていることに興味はない。だが少なくとも、お前にはロドスを導く義務がある。私たちの手の届かない所で命を落としてもらうては困るんだよ。…ケルシー、”隠し事”は君の命を生かしても殺しもする。そういうことだよ。」

「……」

この男に限って、そんな氣遣いをされることに虫唾むしずが走った。

「もしかすると、私も以前はそれに関わっていたのかもかもしれない。だが、お前は頑なにそれを私に明かしたくないらしい。ならばせめてこれくらいのチョツカイは許してくれてもいいんじゃないか?」

「…キサマはどこまでも他人に恩を売るのが得意な人種らしいな。」

「争いはないに越したことはない。この点に限って言えば私とお前は同じ考えだと思っていたんだが、私の思い違いだったか?」

「……」

アンセルは二人の上司を信じていた。信奉していると言い換えても差し支えつかない。

「意味深な言葉」にも、そうしなければならぬ訳があるのだと言及するつもりなどな

かった。

しかし、敬愛するドクターがさらに意味深な物言いをしたなら彼の心は簡単に揺らいでしまうのだった。

「…失望したか？ 所詮、私も清廉潔白な人間ではないということだ。」

大事な教え子の心境を察したケルシーだが、同情を求めるつもりなど微塵もなかった。

彼女のプライベートにおいて同情や理解は、不要な痛手をこうむるだけなのだと身に染みっていたからだ。

しかし、彼女の忠実な教え子がそう易々と彼女のくだらない本音を受け入れるはずもなかった。

「そんなことはありません、先生は立派な人です。私は知っています。アナタの傍で、見てきましたから。ですが…、ただ…、先生の役に立てない自分が悔しい、だけなんです。」
教え子はすでに踏み込み過ぎていた。

たとえば彼女が止めたとしても…、いいや、賢い彼なら彼女の言葉に従ってくれるかもしれない。

ならばこそ、彼の身の安全を第一に考えてやる必要があった。師として。同じ船に乗る友人として。

「ありがとう。君の気持ちは嬉しい。そして、君に誓おう。私は決してロドスを貶めるような真似はしていないと。」

「私は、先生を信じています。」

「……ありがとう。」

「図らずも、同じ医学を歩む師弟の絆は「隠し事」を通じて深まった。」

……計らずも？ 果たして本当にそうなのだろうか。

あの賢い黒コートの男がそこにいて「偶然」がこんなにも堂々と我々の前を横切るだろうか？

「それで、審査は続けてもらえるのかな？」

男は、議論が尻込みするような感動の台本を彼らに渡した上で、白々しく言った。

「え？！」

アンセルとドーベルマンは疑問に思った。

件の一言で決着のついた問答をなぜ続ける必要があるのかと。全ての仕掛け人であるはずの彼の口からそんな言葉が出たことが信じられなかった。

しかし、彼の良き理解者は驚かなかった。

「いいだろう。彼女が『暗殺者』であつたという経歴は、今は不問にしよう。ドーベルマン、そのように続けてくれ。」

「…了解した。」

幾多の局面で機転を利かせ勝利を手にしてきたドーベルマンだが、この二人の得体の知れない小癩こしゃくな知略には一方的に翻弄ほんろうされることの方が多かった。

ドーベルマンは彼らの狙いを理解しないまま、せめて自分の納得いくようにマンティコアの適性をアンセルと再審し始めた。

「彼女の経歴には目を瞑ろう。だが最低限、現時点において彼女が件の暗殺組織と関わりを断っていることを証明して欲しい。」

先日、マンティコアの宿舎を訪ねた時、彼女は予想以上に多くのことを語ってくれた。生まれながらの感染者だということ。そのせいでサルゴンの町を転々とせざるを得なかったこと。自分に暗殺の才があると気付かされたこと。

自分のこと。他人のこと。経験と知識を、事細かに。

それでも組織の内情に触れると彼女は決まって口を閉ざした。

必要なことだと説明しても「ごめんなさい」という文字だけが繰り返し現れた。

「もう一つ、これは適性診断というよりも彼女自身を想って忠告することだが、君たちは彼女の“アーツ”への対処法を事前に見出ししておくべきではないか？」

ドーベルマンは戦場で生死を分ける戦闘力ではなく、他愛のない日常を語り合うコミュニケーション能力を危惧していた。

集団の中で望まない孤独に晒される痛みは不治の病に等しい。

ドーベルマンの指摘の通り、日常的に意思疎通ができれば彼女は鉍石病の治療さえ拒み、自ら船を降りるだろう。

やはり、「孤独」と「後悔」だけが自分の友人なのだという消えない傷を負って。

しかし、その指摘こそアンセルの待ち望んでいた展開だった。

「では、それらの問題を解決すれば、教官とケルシー先生は彼女のロドスへの加入を認めてくださいますか？」

その不敵な口調は何者かを彷彿とさせた。

そして、その感覚は間違っていない。嗅覚の鋭い彼女は突如として変貌した「強敵」に身構えた。

「……考慮には値する。現状、これらの問題さえ解決すれば彼女のロドスでの生活は保証できるだろう。」

「同意見だ。」

そして、相棒であるはずのケルシー女医がいつの間にか「傍観者」に回っていることも、みみごと耳聴くさごと覚った。

「……ケルシー先生、アナタは今、どちらの味方なのだ？」

「どちらでもないさ。『S W E E P』の名が出た時点で私は反論すべき立場から突き落

とされたからな。だが、アナタには別の意味で彼と向き合う理由があるはずだ。」

その言葉を聞いて初めて、彼女は二人の小癪な企みの中身が見えた気がした。

しかし、気付いてみればなるほどそれはロドスにとって必要なことだと彼女も納得せざるを得なくなってしまうた。

しかし…、どうにも納得いかない気持ちで彼女の溜め息を誘った。

「アンセル、どうやら我々は上司二人の見世物にされているようだぞ。」

「…構いません。私は私のすべきことをするだけです。」

「……」

そう答えられると、彼女にはガツクリとうな垂れることでしか今の気持ちを表現する方法はないように思えた。

「…アンセル、そこは私に合わせるところだぞ。」

「……え…？あつ！す、すみません！」

真面目で年若い彼にはまだ「上司のご機嫌を取る」だとか「上司を転がす」というような大人のコミュニケーションは早かった。

「…まあ、いい。気にせず続けてくれ。」

今夜は久方ぶりにアイツに付き合ってもらおうとするか。

彼女は密かに愛しの蒸留酒の香りを夢想して自分を慰めていた。

気持ちを切り替え、ドーベルマンが促すとアンセルは携帯用モニターを取り出した。画面には艦内の図面が表示され、さらには明滅する点が一つあった。

「…これは、発信機か？」

「はい、活性源石測定装置を改良したものです。マンティコアさんに了承を得て着けてもらいました。」

「そうか。だが無論、それだけではないんだろう？」

「はい。クロージャさんをお願いして、無許可での攻撃的な行動を抑制する機能を追加してもらっています。」

彼が言うには、特定の人物による特定の操作がされない状態で体内の源石活性率が一定値を超えると、電流が流れ、装着者の自由と体力を奪った上で麻酔が投与される仕組みになっているらしい。

「つまり、彼女が作戦以外で攻撃性のある行動を取ると、その装置が作動するということだな？」

「はい。同様に、許可なくこの装置を外そうとする場合にもこの装置は作動します。」

ロドスの方針にすぐわかない処置ではあるが、命を左右する問題であるならこのような非人道的な手段もいたしかたないと受け入れるべきなのかもしれない。

特に、彼女の「ステルス能力」は強力で、そもそもこちらから働きかけることが至難の業なのだ。

ならば「彼女自身」で問題を完結させる必要がある。

「装置が作動した場合、こちらはそれを感知できるのか？」

「はい、装置とこのモニターからアラームが鳴ります。もちろん、他の端末と同期させることもできます。」

だが、アンセルはまだ「方法」を提示したに過ぎず、問題を解決した訳ではない。

「これが彼女を鎮圧させられるという根拠はあるのか？ ワルフアリン先生に聞いたところ、マンティコアという種族はかなりの物理強度と薬物への耐性があるというが？」

ドーベルマンが問うとアンセルは間髪入れずに答えた。

「幸か不幸か。先日の脱走事件がその役に立ちました。」

逃走したマンティコアを捕縛したオペレーターが現場で観測できた範囲でのデータを提示してくれた。

麻酔の使用量、彼女の存在を感知するにあたった経緯の諸々を。

「その時、彼女が衰弱していたことを考慮して、データよりも高めに設定してあります。」

「これ以上となると、命の危機にも繋がるんじゃないか？」

「彼女も了承済みです。それに、彼女は装置を作動させません。絶対に。」

アンセルは数時間の間に築いた彼女との信頼関係を疑わなかった。

直に文字を聞いた者にだけ感じる確信が彼にはあったのだ。

——彼女は絶対に裏切らない、と。

実証例が一度しかない安全装置への信憑性は低い。だからといって、ワルファリンのような真似をする訳にもいかない。

今はそのデータを信じて経過観察する他ないのだ。

経験上、その数値が示す効力を知っているドーベルマンもそれ以上を求めることはしなかった。

「では、もう一方の問題への考えを聞こうか。」

ドーベルマンが促すとアンセルはモニターの映像を切り替え、二人に衝撃的なものを見せつけた。

「……これは……、」

そこに、年頃の少女らしく小さく丸まりながらも、大きな尻尾がベッドからはみ出し難儀しているマンティコアの姿が映っていた。

「現在、宿舎で休んでもらっている彼女の映像です。」

「カメラには映るのか。」

「はい。どうやら彼女のステルス能力は生体にのみ効果があるようで。カメラを使えばこのように画面に映りますし、レーザーを当てれば光は彼女を障害物として認識し、遮断されます。無線での会話も問題ありませんでした。」

「なるほど……。」

「なので、これは彼女のステルス能力の弱点でもありません。」

「この事実は、自らも指揮を執る場面の少なくないドーベルマンの関心を惹きつけた。

「プライベートでは難しいかもしれませんが、作戦時において、隊員に専用の小型カメラと無線機を支給できるようになれば、指揮系統の問題は解決され……、あ……。」

途端に、青年の顔が青褪めた。

「どうした?」

「い、いえ……、その、彼女の部屋に私の忘れ物が映っていたので……。」

よほどマズイ物なのか。冷静になろうと努めるアンセルだが、表情筋の引き攣る彼の心情は誰の目にも明らかだった。

「物は何だ? 私が取りに行つてこようか?」

「い、いえ、ドクターの手を煩わせるようなものでもないです。……多分、大丈夫です。後で自分で取りに伺います。」

煮え切らないが、彼の私物なのだし。私が手を出して余計な問題を起こすよりはまし

なのかもしれない。

私たちは気を取り直し、本題に戻った。∴というよりも、話しの腰こそ折れたが、議論はすでに終わっているようなものだった。

心なしか、ドーベルマンの表情も穏やかなものになっていた。

「アンセル、よくもこの短期間でここまで成果を上げられたものだ。もはや認めざるを得まい。だが…、」

その逆接詞に僅かな沈黙を添えた彼女はまた、「鬼教官」と呼ばれるに相応しい厳しい顔付きに戻っていた。

しかし…、

「どうもそこに何者かの介入があつたように思えて腑に落ちない。私は君の言葉でこの件に方を付けたいと思つている。」

その表情は彼に向けられていながらその実、私に向けられたものなのだということが分かつていた。

そんなこととは関係なく、彼女の教師としての顔は向き合う者を容赦なく委縮させる。

それでも彼女の厳しい訓練を乗り越えてきたアンセルはキリリと顔を引き締め、鬼教官の期待に応えようとしていた。

「教官は彼女が今もサルゴンの暗殺組織と繋がっていて、私たちを良くない事態へと追いやるのではないかと案じているんですよね？」

「…そうだな。彼女に限らず、犯罪組織に身を置く者というのは往々にして常人には理解しがたい人格を形成するものだ。巧みに、誠実さを訴えていながらその実、腹では満たされることのない欲求に素直で、関係のない者を巻き込むことに微塵の躊躇ちゆうちゆうもない。それが“犯罪者”というものだ。そんな、いつ暴発するとも知れない銃を大事な仲間に持たせることなど、私にはできない。」

ドーベルマンの熱弁は私の脳裏に、高笑いをキメながら大好物の爆竹をバラ撒くダブリューの姿を過よらせた。

…確かに、想像するだけでも目を背けたくなる光景だ。

だが少なくとも、マンティコアに彼女のような狂人の気質はない。私とアンセルにはその確信がある。

「教官は彼女のカルテを見ましたか？」

「…いや、」

ワルファリングがマンティコアの健康状態をチェックする際、アンセルは彼女の補佐をしていた。

「この数値を見てください。」

彼はカルテの中の「体内における源石含有率」の項目を指差した。

カルテには数値と、これを説明する備考が添えられていた。

——中度の感染。現状、心身の衰弱により、より感染による影響は大きいと思われる

「彼女は対談の最中も、私たちが尋ねるまで痛みを我慢していました。当時の衰弱した体に対しこの数値であれば、全身にオリヅムシの顎を強く押し当てられてるような痛みを伴っていたでしょう。命の危険とまでは言えなくとも、とても悠長に会話をしている余裕はないはずです。であるにも拘わらず、彼女は自分の不調を訴えるよりも先に、私たちの力になりたいと言ったのです。」

アンセルは画面の向こうの彼女を代弁するように「アナタたちの役に立ちたい」と書かれたメモを紙の山から引つ張り出した。

教養のない彼女の字はとても拙く、読みにくい。けれども、しっかりとした筆圧と一片の欠けもない意思もじがそこに記しるされていた。

「……」

「これから口にする証言は私個人の感情的な意見です。教官には失望されるかもしれませんが、私は彼女と言葉を交わした“親愛なる友人”として、こう言わずにはいられません。」

血の飛び交う戦場ですら取り乱さない彼が狭い額をテーブルに押し付け、感情的に、断頭台に首を添えた罪人が命を乞うように、声を捻り出した。

「どうか、彼女を信じてください。」

「……」

「親愛なる友人」、たかだか数時間言葉を交わしただけの相手をそう呼ぶ人間は軽薄だと思われて然るべきだ。ドーベルマンのような厳格な人間から信用を勝ち取ることなどできるはずもない。

それでも、彼はその言葉を選んだ。

それは、ロドスへの密航、同僚の暗殺未遂、治療への抵抗、果てはロドスからの脱走を計った彼女の、手の平を返すような献身的な態度が彼の目に「憐れ」と映ったからなのかもしれない。

事実、「憐み」が「友人」をつくることもある。それもまた、愛の形なのだ。

……本当に、そうなのだろうか？

彼がドーベルマンに見せた「命乞い」は果たして彼女への「憐み」か？

……いいや…、なんということだ！

私はとんでもない勘違いをしている！私が彼の気持ちを見誤ってどうする?!

懸命な彼を、私が侮辱してどうするっ!?

彼は本意で自らの命に救いを求めたのだ。「孤独」や「後悔」がもたらす死から逃れたい一心で。

彼はこの場の誰にもできない『代弁』をやつてのけたんじやないか!

彼は言葉を選んだのではない。選べなかつたのだ!

…本当に久方ぶりに、私は自分の小賢こさかしさを呪い、蔑さげすみたい気分になった。

そんな赤面する私を余所に、ドーベルマンは彼を睨み続けた。彼が頭を上げるのが先か、自分が声を掛けるのが先か。根競べでもするように。

そして…

「…アンセル、これだけは憶えておいて欲しい。情で組織を動かせばどこかに歪ひずみが生じる。間違いに気付いた後で歪を直そうとしても、それは体の奥深くにまで入り込み、手が付けられなくなることもある。」

それは、彼女の経験を物語っていた。

軍を辞めた理由。それでも軍人の気質を崩さない自分であることの必要性。それらが垣間見えたようだった。

アンセルは彼女の言葉に促され、ゆっくり顔を上げた。少し、怯えているようでもある。
折檻せつかんも覚悟の上の、思い詰めた表情の子どもを優しく、宥めるように、教師はほんの少し頬を緩めた。

「そんな顔をするな。君の命乞いのような願いは聞き届けられないが、君が提示した数値から推察できる彼女の心境は納得のいくものだったぞ。」

「それは、つまり……、」

「認めよう、彼女はロドスへの加入に適した人材だ。」

「……ありがとうございます!!」

その晴れやかな顔はまるで、出産直後の妻と子の元気な姿に感極まる夫のようだった。

そんな有頂天の彼を戒めるように、ドーベルマンは待ったをかけた。

「我々にもチャンスをくれないか。」

「……チャンス、ですか?」

「ああ。」

ドーベルマンは私とケルシーを交互に見遣り、決定権の所在を再度、確かめた。

「私は君の判断に任せるよ。」

「異論はない。」

「…了解した。」

何から何まで私に丸投げとはいいい度胸だな。そんな言葉が聞こえてくるような、重みのある了承だった。

「アンセル、君が提示した証拠は目下解決すべき問題の回避に値すると認めよう。素晴らしい調査と弁論だった。加えて、過去を頑なに語らない彼女の姿は裏を返せば、味方に付けたなら決して我々を敵に売ることはないという忠誠心と捉えることもできる。」

彼女の特徴的な短く整えられた眉が彼女の性格を象徴するように凛々しく吊り上った。

「だが、それが彼女の“本性か否か”。これだけはこの目で直接見ないことには判断できない。」

アンセルもそれに気付いたのかもしれない。

反り返るのではないかというほどに背筋を正し、彼女の一言一句を全身で聞くように「緊張」が見て取れた。

「そこで彼女には、これから私が用意する軍事演習に単身で挑んでももらいたい。そこで取る彼女の行動で、私は彼女を見極めよう。」

おそらく、「勝利」は合否を決める要素にはならない。注意すべきは「単身」という点

だ。

ろくに名前も知らない人間と組ませれば、現状、彼女の足手まといになる可能性が高い。

つまり、単身であれば彼女は「思うままに動ける」ということだ。

彼女の「本性」を知るといふ課題にはなるほど適した条件だ。

だがどうにも、私にはそれだけではないように思えた。

「繰り返しだが、彼女にはただの『軍事演習』とだけ伝えて欲しい。騙すような真似をするのは君たちの誠意に反するが、私もまた本当の彼女の姿を知りたい一心なのだ。理解してほしい。」

「…はい。」

ドーベルマンは早くも演習の日時を決定し、彼女に言伝ことづてるようにとアンセルを解放した。

「アンセル。」

興奮した面持ちで立ち去ろうとする彼を、彼女は今一度呼び止めた。

「君は、今回の交渉を自ら志願したのか？」

すると彼はすぐに言葉の意図を察したようで、彼女に負けじと精悍せいかんな顔で返した。

「教官、私たちはいつまでも予備隊でいる訳にはいかないんです。」

そうやって退室する可愛い教え子の背中を見送ると、彼女は仄かに憂いを帯びた声で呟いた。

「まったく、教え子を奪られたような気分だな。」

すると、彼女たちを見守っていたケルシーがその小さな肩に手を添え、いつもの取っ付きにくい声色で慰めた。

「彼は間違いなく君の背中也視野に入れている。そして、ロドスは皆で支え合っていくべきだ。」

「…本当に、こんなにも人に恵まれた職場を私は見たことがない。」

その微笑みには「信頼」と「期待」で溢れていた。

そんな彼女たちのいる場所だからこそ、私は荒野に打ち捨てられた彼女にも手を差し伸べられると思ったんだ。

毒針を隠す少女 その五

「お、おはようございます、ドクター。」

「…ああ、おはよう。」

そこに、メランサを筆頭に、スチユワード、カーデイ、アドナキエル、アンセルの行動予備隊A4の面々が勢揃いしていた。

そして、ドーベルマンが少し遅れて入室してきた。

「おはよう、ドクター。調子はどうだ？」

ロドスの問題児たちによる悪巧みを看破した時に彼女がみせる「人を見下す」顔が、現状の全てを物語っていた。

「…バレたのか？」

私は先日の若き戦友に耳打ちした。

「はい…、それとなく聞いてみましたが、それは私への侮辱か？」と言われてしまいました。」

アンセルとドーベルマンらの話し合いによってマンティコアの処遇が決められた数日後、約束の日時にロドスの行動予備隊A4は集められていた。

その理由は一つしかない。

「あの時、君たちがどうしてあの短期間にマンティコアの弱点を見破ったのか自分なりに考えてみたんだ。だが渡された映像記録が編集されていることに気付いた時、もしやと思ったよ。」

そう。私たちは偶然、彼女のステルス性を看破した訳ではなかった。

「モニター室に確認しに行つたところ、バツチリ映つていたよ。彼女と彼女に撃退される君たちの姿がね。」

そう。今、目の前にいる5人はすでに一度目の演習を終えた者たちだった。

「ドクターに唆されたのかまでは私の知るべきところではないが。アンセル、君は同僚の失態を隠すためにわざとあんなプレゼンをしたな？」

「…は、はい、すみませんでした。」

『ご、ごめんな、さい……、』

スピーカーから蚊の鳴くような声が聞こえてきた。

「マンティコア、君が脱走した理由についてはこちらも納得している。だからこそ、この場を設けたんだ。君が気に病む必要はない。」

彼女の姿は別途用意したモニターに映っている。

私たちは今、普通にコミュニケーションを取っている。それだけでも素晴らしいこと

だった。

「そうだ、そういうことにしようじゃないか。」

「お通夜のような面持ちで俯く予備隊に私は心の中で謝罪を送り、目を背けた。」

「とはいえ、メランサ、カメラで確認した限り君たちはよく対処していた。だから君たちをこの場に召集したのはなにも罰を与えるためではない。そうだな、単純な追試だとも思つてほしい。」

「は、はい……。」

「そうだよ、メランサ。僕たちは全く気を抜いていたのに。君の注意喚起がなかったら、もつと情けない姿を晒すところだったんだから。」

予備隊A4は他の隊に漏れず、固い絆で結ばれている。

爽やかな声でフオローするスチュワードに合わせて他の面々がメランサを鼓舞し、落ち込みやすい彼女を支えていた。

『……』

カメラを盗み見ると、マンティコアが所在なさげに俯いていた。

やはり、羨ましいのだろう。

仕事上の仲間はいても失敗すれば簡単に見捨てられるような環境で生きていた彼女にとって、「友人」という存在は夢でさえ見ることの叶わないものだったに違いない。

そんな落ち込む彼女の背中をビクリと震わせるような、ことさら明るい声が唐突に響いた。

「そうだよ、アタシだってカメラを見なきやここに女の子がいるだなんて信じられないもん！」

『ちよ、ちよつと……、』

そう言つてエリートオペレーターターのフェリオンが目の前にいるらしい彼女を手当たり次第に撫で回し、彼女はそれにただただ縮こまつて耐えていた。

ブレイズに悪気がないのは分かっているが、こういうものは理解者が仲介してやらな
いと関係は悪くなつていく一方なのだ。

「…ブレイズ、今の時代、同性でもセクハラが適応されるのを知っているか？」

すると彼女はいつもの、裏表のない直情的な——愛嬌フルスロツトル全開の——リアクションで応えた。

「え、そうなの!? っていうか、アタシ何も悪い事してないよね!」

「犯罪者は決まつてそう言うのを、君が知らない訳ないだろ？」

「うっ…、ご、ごめん。気に障さわった？」

『だ、大丈夫、少し、ビックリ、した、だけ……、』

内向的な性格をこじらせた人間の、典型的な反応だ。

…まあ、視界に入りにくい分、プライベートでは標的にされにくいだろうし、その辺りは取り敢えず様子を見てみるしかないだろう。

ブレイズに解放されてもまだ、彼女はこの慣れない環境にビクビクしているようだ。「それで、アタシはどうすれば良いの？」

ブレイズは説明を受ける前から意気揚々と訓練用の得物を振り回し、早くも準備運動をし始めていた。

この場で一番関係のない彼女が、この場の誰よりもこの演習へのやる気を見せつけていた。

もつと違う反応を望んでいたドーベルマンは「どうしたものか」と首を振りながら元氣一杯のフェリーオンに今回の趣旨を説明した。

「追試とは言ってみたものの、現状把握しているマンティコアのステルス能力は彼女たちが受けるべき訓練のレベルを遥かに超えている。だからといってこのままにするのは逆に、このような特定の任務に苦手意識を持ってしまうかもしれない。そこでだ。君にはせめてものハンデとして予備隊A4に加勢して欲しい。無論、メランサの指示に従うという形でだ。」

「え!?!私が、ブレイズさんを…!?!」

「そうだ、メランサ。アンセルはこう言っていたぞ。自分たちはいつまでも予備隊でい

る訳にはいかないと。ならばお前はどうか？お前たちはどうか？肩を並べるのが気心の知れた友人ばかりでいいのか？」

「……」

だからと言って、急にエリートオペレーターをチームに入れるのはショック療法めいていて、気の毒に思う所もある。

エリートオペレーターは彼ら予備隊が七転八倒してようやく達成する任務を単独で熟してしまうような「超」のつくベテラン勢なのだ。

だが、同じフェリオンであるブレイズに自分の姿に重ねたのか。メランサは彼女の挑戦的な視線を受けて闘志を燃やしたようだ。

「…分かりました、私、やります！」

「そうだね。こういうことがないとブレイズさんと関わることってないし、いい経験になるかもしれないよね！」

どこかブレイズを一回り若くしたようなカーデイがメランサに合わせて元気一杯に答えた。

そんな健気な彼女たちの姿に胸を打たれたのか。ブレイズはメランサの体を壊さんばかりに抱きしめた。

「か、かわいいっ！」

「ブレイズ、ドクターに言われたばかりだろう。そういう過度なコミュニケーションは時に相手を傷つけると。それともお前は隊長を再起不能にして演習を台無しにしたいのか？」

「だって、アタシこの後、別任務があるんだよ？もつといっぱいお話したいのに！それなのに、こんなにカワイイ後輩ちゃんたちが…、こんなの、生殺しだよ！」

「……ドクター、なんとかしてくれ。」

「ここ最近、ドーベルマンが眉間を押さえて苦悶の表情を浮かべる姿をよく目にする。

近頃は一癖も二癖もあるオペレーターばかりが加入しているせいもあってか。心労が溜まっているのかもしれない。医療部からの警告もあった。

…近々、まとまった休暇をプレゼントすることにしよう。

「ブレイズ、アーミヤを呼んできた方がいいか？」

私は、一人の愛らしいコータスの名前を出した。すると、豪気で名を売るフェリーンの利かん坊は途端に固まり、冷や汗をかき、顔を青くした。

「…じ、実は、昨日も怒られたんだよね。毎回、血だらけで帰還するからフォリニックが頭を抱えてるんだって。」

アーミヤは誰にでも優しい。どんな人間にでも手を差し伸べる。心を閉ざした感染者でさえ、彼女と触れ合えば希望を見出してしまうほどに魅力的な人物なのだ。

…だが一方で、彼女ほどロドスの最高権力者としての影響力を自分のものにして
者は他にいない。

「今ある仕事が片付いたら一度様子を見に来ると言っていたな。」

「え、ホント!？」

彼女が冷めた目で一瞥したなら、それがたとえ戦地で敵を蹂躪するエリートオペレー
ターであろうと自分の行動を見直すのだ。

「よ、よし、ブリーフィングをしようか…。」

これでこの演習の間は大人しくしているだろう。

「それならマンティコアは私が指導しよう。」

『…え…?』

「え、ドクターが指揮するんですか?」

やる気を見せたはずのメランサが、途端に不安げな表情でこちらを見た。

「マンティコアも経験のない訓練に付き合わされるんだ。簡単な戦術だけでも教えな
きゃフェアじゃないだろ?」

「オモシロイじゃない!ドクターとの真剣勝負って訳だね!」

…どうあってもブレイズはこのイベントを楽しみ尽くすのを止められないらしい。
さつきまで凍り付いていた顔がもう澆刺^{はつらつ}としている。

「……」

「そんなに心配しないの！これは演習なんだからさ！」

どっちなんだ。

『……』

「ほら、君も縮こまっている暇はないぞ。相手はやる気満々だ。それに、今回の成績次第では君のお給料が底上げされる可能性だつてあることを忘れないようにね。」

『……お、お給料……？』

やはり肩身狭く感じているのか——画像越しで判別しにくい——、見上げる彼女の目は薄っすらと潤んでいた。

「そうだ。これまで君は金銭での報酬を貰ったことがないだろう？ここでは仕事の対価の大部分が貨幣で支払われる。使い方は君次第だ。服を買ってもよし。休暇を取ってリゾート地で疲れを取るもよし。」

『……』

どれも経験がないからか。いまいちピンとこない、ボンヤリとした顔で私を見詰めている。

「自由だ。君はここでそれを学んでいくんだよ。」

『……自由……』

「興味ないか？」

『う、ううん……私……、がんばる……、』

ようやく、こつちもエンジンが掛かってきたらしい。

ここに来て初めて、彼女の瞳こゑに「活力」というものを見た気がする。

——そうして双方の準備が整い、演習は滞りなく開始された。そして……、

いくらかマンティコアに不利な状況であったにも拘わらず、演習はマンティコアに軍配が上がった。

「いやあ、凄いね！あの時、あと一步反応が遅れてたらアタシも一撃で仕留められてたかもしれないよ！」

マンティコアが実戦経験豊富だったこともあり、演習中に緊張するという様子はまったくなかった。

自分の能力を最大限に發揮し、厄介な射撃手から順々に仕留め、アツという間にメラオンサとブレイズを孤立させた。

おそらくは磨き上げられた直感で二人が周囲の変化を把握する感覚に優れていることも見抜いたのだろう。

この二人に関してはジツクリと、慎重に間合いを詰めている様子が窺えた。

メランサに死角はなかった。警戒も怠っていないなかった。それでも空気と一体化したマンティコアの襲撃を感知するには今一步、経験が足りなかった。

マンティコアのナイフは先にブレイズを襲った。これに関しては、襲撃の瞬間にできる隙を、ブレイズなら捉えてくると私が予め忠告しておいたことだ。

彼女は指揮官の指示を的確に判断することができるとも確認できた。

しかし、ブレイズもエリートの意地を見せつけた。

直前でマンティコアの接近を感知し、ナイフを躲しながら彼女を投げ飛ばした。不意を突かれたマンティコアだが、それでも反射的に体が反撃に転じていた。

彼女の身体的最大の特徴である巨大なサソリの尻尾がブレイズを横薙ぎに吹き飛ばした。

その間、メランサはブレイズの奮闘で発見するに至ったマンティコアを襲撃。彼女の腕はエリートオペレーターにも引けを取らない。

しかし、ここでもマンティコアのステルスが発動したのか。あろうことか無防備な彼女に剣をいなす隙を与えてしまっていた。

この瞬間にできた隙をマンティコアは見逃さなかった。

彼女のゴムナイフがメランサの腹を裂いた。

そうして彼女は演習の攻略条件を満たした。

「……」

「先程も言ったが、マンティコアのステルス能力は実戦においても稀なケースといつて良いレベルだ。レインボー小隊でさえ、彼女が弱っていないければ追跡できなかったレベルなのだ。むしろ、君の奮闘は誇れるものだと忘れないでくれ。」

そして、カーデイの言う通り、間違いなく良い経験になったはずだ。

遠距離支援が主体のスチュワードとアドナキエルにとっては前に立つ二人に頼らず「自分は常に危険に晒されている」という意識がこれまで以上に高まっただろうし、カーデイに関しては自分の、たった一枚の盾がチームの「砦」であることを自覚しただろう。もしも彼女がメランサほどに感覚が鋭ければ、状況判断に優れたアンセルがそれを補えたなら、その盾で後衛を延命させることができただろう。

そして、メランサ、ブレイズとの連コミュニケーション携が事前に整えられていれば間違いなくマンティコアを沈められた。

こういうシミュレーションの積み重ねが彼女たちを唯一無二の「戦友」へと育てていく。

絆を育む手段が「戦闘」というのは人間としてひどく胸の痛い世の中だが、生き残るということとは必然的に育むチャンスを得る。

……そう、私たちは生き残るべきなんだ。いかなる手段をもつても。

「そして、マンティコア、」

私が何か頭の片隅にある古い何かに触れそうな感覚に襲われている一方で、ドーベルマンはマンティコアへの評価を下し始めていた。

「今回は君の勝利だが、その戦闘方法にはやはり注意すべき点がある。」

『え……?』

「君のそれはどこまでも、暗殺」に特化しているということだ。」

心臓を刺し、首を落として生き残ってきた彼女にとって、それ以上に身の安全を保障する術が分からなかった。

そもそも同じ「命の奪り合い」に複数の言葉が存在することすら理解できていなかった。

ドーベルマンは、彼女のその「教養の無さ」を解決することが一番の課題だと伝えなければならなかった。

「ロドスの作戦の中には、生け捕り」や「無力化」という内容も少なくない。見たところ、君はナイフがヒットした相手への注意力が極端に欠けているようだ。また、例えば戦において、致命傷を与えたとしても、敵の脅威が直ちに消えないこともままある。君もそれは経験済みのことだろう。」

ドーベルマンにも暗殺者^{かのじよ}たちに狙われる経験があり、返り討ちにした実績がある。

「であるにも拘わらず、注意力が欠けてしまうのはやはりそのアーツに絶対の信頼を置いていたからと言わざるを得ない。」

暗殺者の思考する傾向はよくよく心得ていた。

「とはいえ……、」

その意味深な接続詞が、雲行きの怪しい彼女の評価に一筋の光を見せた。

「おおいに評価すべき点もあった。」

彼女の仕事には「成功」か「失敗」しかない。「安全な寢床」か「サルゴンの荒野」しか与えられない。そんな彼女にとって、「褒められる」という報酬は未知の体験なのだろう。聞き慣れない言葉にキョトンとしている。

「君はアンセルを狙わなかった。それはなぜだ？」

『え…、あ……、』

「問い詰めている訳じゃない。君の考えが知りたいだけだ。落ち着いて答えてくれ。」

マンティコアは両手の指先を合わせながら、明らかに「幹部」の空気を持つドーベルマンを度々上目遣いに覗きながら躊躇^{ためら}いがちに答えた。

『アンセルは、私を、攻撃、しなかった、から……、これは、仕事じゃ、ない…、から……、』
本当はもっと言いたいことがあるのだろう。彼女は何度もそれを口にしようとして

は言い淀み、口を嚙つぐんでいた。

言葉を選んでいいのか。それとも、ただ弱気な性格がそうさせているのか。

どちらであつたとしても、ドーベルマンは彼女の言動を好意的に捉えているらしかつた。彼女の発言が終わつたことをシツカリと確認すると、進展のある問いを付け足した。

「君は自分を仲間想いな人間だと思うか？」

多くの人間はその問いに言葉を失うだろう。言われるままに解答すれば「信じてもらえない」そういうブレーキが掛かってしまうものだ。

そこに「その人間の性格」が現れる。ドーベルマンはそれを期待していた。

マンティコアもまた例に漏れず、黙り込んでいた。

だが、彼女が言葉に詰まっているのはなにも、あれこれと聞こえの良い言葉を探しているからではない。

それがよく窺い知れる答えが、静まり返つた部屋にポツリ、ポツリと涙の滴る音を聞いているかのようにさめざめと響いた。

『……私、本当は、誰も、殺したくない……、』

それは一見、ドーベルマンの求める答えとして適切ではないように思える。ロドスへの加入を拒んでいるようにも聞こえる。

だが、先日のアンセルがそうであったように、それは彼女の決心の現われだった。

多くの命と引き換えにすることでしか得られなかった「安全な寢床」。彼女はそれを口ドスわたしたちの前で、否定した。

“アナタたちの役に立ちたい”

それは鉋石病の苦痛を押し込めてでも伝えたかった彼女の「希望」。小さな勇気を語った「親愛なる友人」に見せた、「マンティコア」というサルゴンの荒野を彷徨う少女の心の叫びだった。

彼女の言葉は拙く、聞き手に依存している。決して褒められるような答えとは言えなかった。

だがそれは言い換えるなら、聞き手を信頼しているからこそ口にできる言葉でもあった。

それらを理解した上で、加味した上で、ドーベルマンは少女の愚直な答えに満足できる未来を見ることができたらしかった。

彼女は一同が胆を抜かすほどに柔和な笑みを浮かべ、少女の頭を優しく撫でた。

「君の考えはよく分かった。私はそれに、君の信頼を裏切らない評価をしようと思う。」

『……』

撫でられることもまた、経験のないことだと分かる顔で、マンティコアは彼女を見上げた。

「加えて、演習時に見せた君の挙動から環境把握能力に優れていることも確認できた。今後、その力を伸ばすことができたなら、エリートオペレーターと遜色ない活躍も期待できるだろう。」

『え……?』

「それはつまり、彼女は……」

言われたことへの理解が追い付かず、言葉に詰まっている彼女の代わりに声を返したのはアンセルだった。

「…フツ、」

あの遣り取りが「嘘」でなかったと証明されたことに彼女は安心し、グズる少女にソツと手を差し伸べた。

「ようこそ、ロドスへ。我々は君を歓迎しよう。」

『…え、えつと…、よ、よろしく…お願い、します……、』

おずおずと握る彼女の姿にはまだまだ「希望」と「不安」の間で右往左往している様子が窺えたが、それでもドールマンはロドスでやっていけると判断してくれたことに私はホツと胸を撫で下ろした。

毒針を隠す少女 その六

無事、マンティコアにロドスオペレーターとしての認可が降りた。

所属部隊や任務の種別などは検討中だが、その間に彼女が少しでも他のオペレーターたちとの関係を築いてくれることを祈るばかりだ。

ちなみに、あの演習で得られたものはマンティコアとの信頼関係だけではなかった。

「え？私、ブレイズさんと…？」

メランサはブレイズに余裕がある時に限り、彼女との特別訓練が組まれることになった。

フェリオン同士、感覚が似ているからなのか。あの演習でブレイズと組んだメランサの動きには何か変革をもたらすような兆しが感じられたとドーベルマンは言っていた。

戸惑いながらも、メランサはその突発的な提案に喜んでいた。さらには、

「それ以外でも暇があったら一緒に遊ぼうね！」

ブレイズも可愛い後輩たちを気に入ったらしい。連絡先を交換し、さっそくお茶会の日取りについて談笑していた。

『え…、いいの……？』

ドーベルマンはマンティコアに取り付けた発信器や麻酔諸々の拘束具も、任意の期間中に一度も作動することがなければ解除するという約束を交わした。

「ロドスに奴隷を買う習慣はない。君がそういう目的で内部に潜入したのではないと判断できれば対等な関係であるのは君にとって当然の権利であり、ロドスにとっては絶対の信条だからな。」

『…わかった…、私、がんばる……』

「ああ、今後、君と訓練に励めることを楽しみにしている。」

マンティコアの十分な「誠実さ」がドーベルマンにも伝わり、二人の間にもロドスの未来に大きく貢献する関係が築けたようだった。

——サルゴンのとある地区、荒野

「ドクター、どうした？なんかブーツとしてねえか？疲れたならおぶるぜ？…いいや、抱えてやろうか、お姫様？」

「…いいや、大丈夫だ。少し気になる子がいてな。その子について考えてただけだ。」

マンティコアがオペレーターとして加入してから数日、私はノイルホーン含む行動隊A4と数人のオペレーターを連れて新規の契約を結び、今は帰り道についていた。

…ちなみに、私が雪山で女性オペレーターにお姫様だつこされたという噂は——実際は小脇に抱えた荷物のような扱いだったのだが——、一部オペレーターの間で鉄板のネタになっていた。

そして、悪意のある冗談を無視した私の発言は、新たなゴシップを生み出そうとしているらしかった。

「…おいおい、そりゃ本気で言ってるのか？他の女が黙ってねえぞ!」

最近カードで負け越しているというノイルホーンは、「貸し」を返せるネタが入ったと嬉々として騒ぎ始めた。

しかし、コイツは大事なことを忘れている。

「言いたいことはそれだけか？私がお前の勤務態度の悪さを捏造できることを忘れるなよ。」

「だったら皆、一蓮托生だな。ホラ、お前らもドクターに言いたいことあるだろ?」

今日の仮面マスクがよほど気分にもマッチしているのか。鬼のオペレーターはめげずに、同僚を巻き込んでまで上司わたしに喰ってかかってきた。

「ちよつと待った…」

だがしかし、巻き込まれたノイルのカード仲間たちは一瞬たりとも彼の側につくことなく、自然と口論の焦点は「厄介な先輩」へと移っていった。

「だいたい兄貴はいつもそうだ。何かつていうと都合が悪くなったら俺たちを巻き込んで誤魔化そうとするんだ。」

「確かに、この間のカードでも負けたのは俺たちの配り方が悪いからだつて言つてたな。」

「おいおい、そりやあ三日も前の話だろ?…ああ、ああ、俺が悪かつたよ! だけど今はドクターの女癖の悪さを直してやろうつて話だろ?」

「そりやあ、ドクターが兄貴の何百倍も魅力的だからだろ? しょうがねえよ。」

「あ、さてはお前ら、ドクターにビビつてんだろ! クソ、味方に付ける奴を間違えちまつた!」

そうして延々と続くかと思われた誰も幸せにしない不毛な遣り取りは、同行する女性オペレーターの手で一刃両断にされた。

「お前たち、まだ任務は終わつてないんだぞ? 集中しろ。だいたいノイルホーン、お前はドクターをなんだと思つているんだ。」

やはり、日頃の行いというものはバカにできない。私は一言も返すことなく勝ち星を手に入れようとしていた。

そうして自爆していく憐れな友人を見守っていると――、
「止まってください。」

賑やかな遠足の帰り道を、一行の先頭をいくトカゲ族の一言がいつもの殺伐とした戦場へと一変させた。

そのまま彼はしなやかな動きで物陰へと移動すると双眼鏡を取り出し、リスクの正体を見極め始めた。

「どうした、12F。ウォツカの湧き出すオアシスでも見つけたか？」

同僚の忠告もなんのその。今日の「定時」はとづくに迎えたとしても言うようにノイルは軽口を叩き続けた。

一方の12Fは、そんなどうしようもない冗談にも律儀に応える完璧な紳士であり、なおかつ優れた斥候であり続ける社会人の鑑だった。

「ハハッ、そんな珍百景を見つけたのならぜひとも泉に私の名前を付けて頂きたいですね。それはさておき……ドクター、野盗です。物陰が多く、数は特定できませんが少なくとも十人はいるようですね。」

私が隣に並ぶと、12Fは手短かに答えた。

「うへえ、こんな荒野でまでよくやるな。」

「それにしてもお主、目が良くないのに毎度、よく気が付くのう。」

同じサヴラの弓兵が同類の術師の感覚の鋭さに感心していた。統計的に、術師よりも弓兵の方が五感に頼るところが多く、それ故に弓兵の方が感覚的に優れていることが多

い。

育ちの違いか？二人の詳細な出生は未登録だが、12Fの立ち居振る舞いを見ていると幼少の頃から「危険」と身近な関係であったような印象を覚える。

「ただ臆病なだけですよ。…サルカズのようにですね。近接が9、弓が5、術師が1。見える限りではそれで全員のようです。まだ、こちらには気付いていないようですね。」

彼もそうだが、サヴラは滅多に自分の身の上を大つぴらにしない。取り上げられれば「大したことない」と自嘲気味な謙遜をしてやり過ぐす。

私はそんな彼らがロドスを「居心地の良い場所」と感じてくれているのか。時々、不安に思う。

「ドクター、どうする?..」

契約を交わした町とも近い。それに、奴らは一つの隊商を襲ったばかりらしく、^{くつろ}寛ぐ傍らには野晒しにされたままの遺体がいくつも横たわっている。

あのままでは野生の獣たちが集まり、この一帯の交通、物流が滞る可能性も生まれる。だが、

「…感染者は確認できるか?..」

私たちはあくまで外部企業だ。サルゴン国に籍がある訳ではない。大つぴらに「自己主張」をする訳にはいかない。

特にこの一帯での酋長や皇^{パレディンジャー}帝間での抗争は激化している。ちよつとしたシヨックが大惨事を招く可能性は十分にあり得る。

一応、余所者にも「防衛権」は適応されるが、ロドスは「利用される立場」になつてはならない。

やるのなら「正当な理由」を持ち、短期間で、立つ烏濁さず。これが最低条件だ。

理想を言えば、その手柄をスマートな形で彼らに譲渡できれば今後も良好な関係を保つ助けになるのだが。

「おそらく、全員が感染者かと。」

「そうか…。皆、集まってくれ。臨時作戦を伝える。」

荒野の直中、赤土色の大地をホワイトボードに全員の配置と役割を簡単に書き上げた。

「おい、起きろ。ドウリン、作戦だぞ。」

「…ええ？お仕事終わったんじゃないの〜？」

デイランに負ぶさる小人を含め、こちらは8人。数で劣ることはいつものことだ。

それに、戦^{したしより}闘でやることは大して変わらない。大事なのは事後^{あけ}処理だ。

「では、行つてきます。」

「相手方を急がせる必要はない。あくまで優^{スマート}雅に頼むよ。」

「ハハッ、俺の生まれはロンディニウムですよ？ボロなんかでませんから。」

打ち合わせを済ませ、バディとデイランを契約を済ませたばかりの取り引き先まで走らせた。

「……」

「ドクター？」

突然、明後日の方をジツと見詰める私を、隊長のヤトウが気遣うように声を掛けてきた。

「ああ、すまない。では諸君、仕事に取り掛かろう。」

……ただの気のせいなのかかもしれない。だが、取り敢えず今のところは大人しくしていいようだ。

「警告は？」

穏健派の12Fは私に一応の確認を取った。

「必要ない。彼らを庇つたと誤解されるような行動は一切なしだ。徹底的にやっつけろ。」

ブリーフィングはすでに終わっている。一部の人間は彼のそれが作戦を理解していないからなのではないかと疑うかもしれない。

だが、誰もしない「暗黙の了解」を指摘するからこそ、私は彼に全幅の信頼を置いて

いるのだ。

そうすることでより、全体に作戦の意図を周知させることができる。実際に見事なサポートだ。

恵まれた人材に満足していると、浮かれる私を一喝するかのように、終始騒いでいた部隊の特攻隊長が声色を変えて聞き返してきた。

「…ドクター、もしもの時はヤッチまっつていいんだろ?」

明らかに普段と様子が違う。今にも先走って事態をややこしくしてしまいそうな空気を漂わせている。

「どうしたノイルホーン重装オペレーター。今の自分が何者かも忘れたか? なんだつたら戦闘が終わるまでお前だけでカードを切つていてもいいんだぞ?」

「……チツ。冗談だよ、ドクター。俺は“ロドス・アイランド”の人間だ。殺しはしねえ。」

「そうだ、それでいい。」

…周期的なものだろうか?

ベテランとまでは言わなくとも彼はロドスに就いて十分に長い。そんな彼が今さらこんな態度を見せるのは、そういう「生理的衝動」に襲われているからではないかと考えられた。

：いや、であれば同じ種族のヤトウが平常なのはおかしい。それとも、男女で差があるものなのか？

それに、今まで散々彼のいる作戦に同行してきたが、こんなことは初めてだ。もしかすると、趣味のマスクがそれを増長しているのかもしれない。

今後はその辺りも考慮して彼に与える任務を選択するべきだろう。

ロドスの社員オスレターには、求める人材の特殊性から不都合な情報を秘匿する権利がある。彼が教えたくないというのなら我々が現場で汲み取るしかない。

それが、我々と彼らの間で揺るがない信頼関係を築くための唯一の手段なのだ。

私は戦場へと出立する彼らを見送りながら、その一つ一つの背中にしがみ付いているであろう「過去」を想い、常に「絶対の勝利」を約束することしかできないのだ。

——野盗たちは仕事を終え、疲労した体を休めながらも周囲への注意を怠つては
いなかった

「…何かいるぞ。」

敵の一人がこちらの気配に気付いた。さすがに自分の縄張りでの身の守り方は心得ているようだ。

こちらにハンデを与えてはくれそうにない。

私は双眼鏡片手に無線機を口元に運んだ。

「敵がこちらに気付いた。プランC、状況開始だ。」

『了解』

開戦の狼煙は地味に、そして確実に上げられた。

さすがと言うべきか、敵も遅れずに対応してきた。

「敵だ、展開しろ！」

数こそ減らせなかったが、弓矢とアーツで先制のダメージは与えられた。

「さすがはサルカズ、上手く躲しおる。」

「臨戦態勢に入るのも早かったですもんね。」

さらに言えば、野盗の割に連携と機動力に優れている。おそらく、どこかの組織に属していた、もしくは属しているか…。

下手に素性を調べない方がお互いのためだろう。

「では、ワシはここを離れるが、くれぐれも無茶はするなよ。」

そう言い残すと、斑まだらな黒鱗を纏まとうサヴラは岩陰から飛び出し、持ち前の脚力でポイントを変えながら野盗たちをチクチクと打ち続けた。

「うおおおりやあぁあ!!」

…ノイルは普段通りの、頑強な「盾」としての役割を十分に熟していた。

もしかすると先程の遣り取りは、暴走するかもしれない自分を律するために敢えて私に釘を打たせたのかもしれない。

彼らのことは彼らが一番理解している、ということか。

戻ったら酒の一杯でも奢ってやろう。仕事には紳士的な友人に、私は細やかな敬意を捧げた。

「気を取られるな、おそらくコイツは罠だ！ 周りへの警戒を怠るな！ ファードル、付与しろ！」

…あの大剣の男が司令塔か。そして「ファードル」、お前が第一ターゲットだ。

「ドウリン、あの男に集中できるか？」

『まっかせて〜。』

小人の術師を前線へ向かわせ、駆け回る弓兵のサヴラに援護の指示を出す。

「ファードル!?! チツ、なら俺が!?!…ボルト!?!」

大剣の男は特定の仲間が次々と倒れていく状況に取り乱し始めた。そして、お前は名乗り出てしまった。最後の「奥の手」は自分自身。違うか？

「…クソツ、テメエら、散らばるな!?!…何!?!」

「アードが狙われてやがる!?! 何なんだ、コイツら!?!…ウワッ!?!」

サルカズは自他ともに認める戦闘種族だ。その最たる『力』が彼らの潜在能力を大

幅に底上げする「巫術」だ。

元となる「古代の巫術」は今では失われて等しい。現在——確認される实例こそ少ないが——出回っているものはその劣化版だろうと思われる。

劣化版とはいえ、これを受けたサルカズはどんな人間でも一人ひとりが「戦車」に変身してしまう。とてもじゃないが一對一で処理できるような相手じゃない。

だから私は常に術師おまへたちに目を光らせていたんだ。

——数分前のブリーフィング

「それはつまり、あの中に偽装している術師がいるということか、ドクター？」

仮面をつけた女性剣士は私の作戦の意図にいち早く気付いた。

「そうだ。遠目ではハッキリと確認できないが、敵に負傷者は一人もいないように見える。隊商にはそれなりの護衛が付いているはずなのに、だ。」

サルカズはそもそも戦闘に長けている。だからといって、サルゴンの護衛が無能な訳がない。

彼らが「無傷」というなら、まず間違いなく例の「巫術」を体得している者が存在する。

そして、彼らが驕り高ぶったただの野盗でない限り、「切り札」を使うからには「奥の手」を隠し持つ戦術の定石を心得ているはずだ。

「巫術師」が一人ということはない。

さらに言えば、「サルカズ」という種族の性格を考慮に入れるならば、彼らはこと「闘」に関して容赦がなく、こちらに戦局を譲らないように徹底的に立ち回るだろう。

例えば、私たちが「切り札」を使つて彼らの「切り札」が二枚討ち取られたとしても、彼らはもう一枚を切ればいいだけの話だ。

とはいえ、「巫術」の習得が容易であるならこの世のサルカズ全員が心得ているはずだ。

これまでの「巫術師」との遭遇率からみて、あの規模なら3人が限度だろう。

「だったら、どうしてその二人が怪しいと思うんだ？」

「確かに。『戦車』を作り出せるほどの切り札なら、剣や盾の後ろに置いておきたいというのが心情だと思うが？」

「そこは厳密には2パターンに分かれる。」

レンジャーが言うように、「切り札」はそうそう簡単に討ち取られるような場所に配置したくないというのは当然の心理だ。

だが、相手の中に敵の考えの裏を搔くような「指揮官」がいるのなら話は別だ。

状況を把握した敵は当然「巫術師」を集中攻撃する。

もしも、残りの「巫術師」が隣接するように配置されていたとしたら、敵はその流れ

で順々に討ち取ればいい。

だかもしも点々と現れたなら、敵はその度に矛先が翻弄され混乱状態に陥るだろう。前、中、後ろの一人ずつが「巫術師」という想定をするのが妥当だ。

そして、お前たちの周囲への警戒レベルで私はプランC——後ろ、前、中の順に当たりを付ける作戦——を選んだ。

——現在、戦闘中

偶然にもチャードが仕留めたボウガンの男が「巫術師」だったのは大きい。

そして、リーダー自らが「巫術師」というのも少し驚かされた。

だが、もう詰みだ。サルカズ。

一度、統制を欠いてしまった集団はもはや、一人ひとりを相手にしているのと変わらないほどに脆い。

全員を無力化するのにそう時間は掛からなかった。

「さすがはドクター殿、見事な作戦でしたね。」

「私はこれしか能がないからね。」

「ご謙遜を。戦闘にしか興味のない人間がこんなにも見事なプランで、しかも死傷者を出さずに鎮圧できるわけがありません。アナタは間違いなくロドスで、いいえ世界でも有数の指揮官と言えますよ。」

もしかすると、この紳士的なサヴラは今の仕事よりもそっちの方に適正があるんじゃないか？

そう思われるほどに自然な賛辞だった。

「いい気分なところ悪いんだけどよ、ドクター。」

作戦は成功、さらに負傷者なし。文句の付けどころのない大活躍をしたはずのオペレーターが一人が声色を曇らせて寄ってきた。

「誰だか分からねえが、俺たちを援護した奴がいる。ヤトウやレンジャーのおっさんも確認してる。連中が不自然に倒れる姿を見たんだ。」

「…そうか。」

作戦を開始したと同時に、私の傍から「何か欠ける」ような空気を感じ取ったから、何かしらしているだろうとは思っていた。

「もしかして、ドクターは何か分かってんのか？」

「見当は付いているという程度だ。」

どうしたものかと悩んでいるところにレンジャーが駆け寄ってきた。

「ノイル、どうやらワシらの見間違いはなかったようだ。正体不明の足跡があったぞい。」

「男か女かわかるか？」

「小さかったな。断定はできんが女だろう。加えて言うなら、シューズじゃ。とても荒野を歩くような履物ではなかったぞい。」

「…行方は掴めそうか？」

「残念じゃが、それは難しい。戦闘した形跡以外は何も残っておらん。」

それなら取り敢えずサルゴンの兵が彼女を捕まえることもないだろう。

…だがさて、どうしたものか。拘束具の記録は後でクロージャにでも頼んで改竄かいざんするとして、そもそもその拘束具が役目を果たしていないという事実は厄介だな。

何かの拍子に二人に気付かれでもすれば、彼女の雇用を不利にしかねない。

「どうする、ドクター。追うか？」

彼女といくらか言葉を交わして、僅かでも信頼を得られた感触はあった。だが、ここで彼女の「若気の至り」を追い詰めればどうという反応を示すか、あまり想像したくはない。

「がんばる」という言葉にウソはなかったと思う。ただ、我々の常識的な分別が彼女に備わっていないかただけのことだ。

だがここで、ノイルホーンたちに発見されれば嫌でも報告書に書かなくてはならない。

それは実質、解雇通知になる。

「…いや、いい。恥ずかしがり屋を追い回して嫌われたくはないだろう?」

…また、二人で話せる場があればいいのだが。

「ハッ、相変わらずだな。だからドクターはロドスの女連中に好かれるんだよ。」

「…この程度で男の株が上がるのなら、お前もそうすればいいだろう。」

私が不自然な指示を出している以上、下手にノイルを責めることができないことだけが悔やまれる。

「ハハッ！冗談だよ、ドクター。その代り、今日はドクターの奢りで飲みに行こうぜ。なあ、お前ら。」

「え、いいんですか?!」

「いやいや、兄貴、そりや恐いものなしにも程がありますって!」

コイツ、私の記憶力が人一倍いいことを未だに侮あなどっているな。…だが、だからこそ付き合ひやすいというものもあるか。

それに、そもそもそのつもりでもあったしな。コブ付きというのは想定外だったが。

「ノイル、あまりドクターを困らせるんじゃない。」

「ヤトウ、これは男同士の友情ってやつなんだぜ?」

「…そう、なのか、ドクター?」

「なんだったらヤトウも一緒に飲むか?」

私が答えるよりも早く、この機会を逃すまいと同族のノイルカレが前のめりに尋ねた。

「わ、私は酒を飲まない!…それに、男の友情とやらに私を混ぜるといふことは、お前は私をそういう目で見ているということか?」

ヤトウも——彼女は純粋に「陽の光」が苦手な体質なのだが——ノイルと同じく仮面を付けている。

仮面に隠れているが、彼女が今、本当に怒っているというのはピンと張った声色が十二分に物語っていた。

「兄貴、そういうところですよ。」

「うるせえな。これが俺の持ち味とも言えるだろ?それにな、ヤトウ。男の友情どうのつてのは冗談にしても、たまには腹を割って話せる場があつてもいいと思わねえか?」

「…そうだな。ドクターがそう言うのであれば、考えておこう。」

「いや、言ってるのは俺だろ!」

「ハツハツハツハ。諦めい、ノイル。お前さんがドクターに敵う訳がなからう。」

「そうですね。ドクターへの敬愛は老若男女を選びませんからね。」

「戦闘が終わった直後だからか。全員がそういう空気を求め、思い思いの言葉を携たずえて集つってきた。」

「過大評価、甚だしいな。私を嫌う者は確かにいるよ。ロドスでそれらに会わないというのはただ、皆が寛容というだけさ。」

現に、最も身近なフェリーンは私を見つければ常に眉間に皺を寄せるのだから。

「…ねえねえ、もうアタシ、眠っていい？」

常に睡眠不足の小人族^{ドゥリン}だけがマイペースに、我々を残して安住の地へと旅立っていった。

ロドスは、おおよそこういう少しネジの外れた連中の溜まり場だ。

被害に遭った隊商への黙祷を捧げたばかりだというのに身を寄せ笑い合い、今の時代を生き延びている。

私はそんな姿を限られた記憶に焼き付ける度に「ドクター」でいられる幸せを嘯み締める。

お前はそんな私を見て「甘い」と言うだろう。

その通りだ。

本物の戦場は似て非なるものだ。簡単に人を殺す。私は「ソレ」を誰にするか選択しなければならぬ。

より多くの命を未来に繋ぐために、「作業」をしなければならぬ。

それでも、例え私が「戦争人間」に身をやつしたとしても、「私たち」は乗り越えなくてはならない。この時代を生き残らなければならぬ。

「今」という時から逃れられない命を、天から授かったからには。

「私たちが」不治の病」を治すしかないんだ。

分かっているさ。

……だから、今はくらは甘えていたい。

こんな世界を創った神だって、私にこれ以上の罰を与えたりはしないはずさ。

そうだろ？

——数時間後、バティたちに頼んだサルゴンの担架が野盗たちを連れ帰ってくれた。

「まさかアイツらも目が覚めたら病院だったなんて思いもしないだろうな。」

「取引先も、今回、提供した新薬の実験台まで用意してもらえとは思っておらんかったじやろう。」

「ハハツ、まさにハッピーセットだな。皆お得で万々歳だ。」

この惨状を見た彼らが私たちを問い詰めることはなかった。そして、野盗たちの素性を私に尋ねることもなかった。

もともと指名手配されていた連中なのか。それとも、身内だったのか。何にせよ、次の取り引きには十分注意を払うように伝えておいた方が良さそうだな。

「全員、船に戻るまでが遠足だ。これ以上遅れが出てアーミヤから小言を言われるのは私なんだからな。」

すると、鬼の重装オペレーターは性懲りもなく北叟しよそう笑み、私に囁いた。

「知ってるか、ドクター？ そんなアンタらの様子を見てて和むオペレーターも結構いるんだぜ？」

…ロドスは、奥が深い。……もとい、闇が深い。

毒針を隠す少女 その七

「それでサルゴンまでドクターに付いて行っちゃったわけ？」

「……うん……、」

マンティコアの告白に、ショートカットの金髪にフェリーンの耳を持つ少女は頬杖をつき、ことさらに気怠げな表情で見詰めてみせた。

「だ、だめ……、だった……？」

「ダメってか……、ダメでしょ。」

仲良くなつたばかりの友人のために何か気の利いた言葉が見つからないかよくよく考えみたものの、そうして浮かんできた言葉はさらに酷かった。

結局はそのままが一番ソフトなんだと断念した少女の頬が、意思表示するように柔らかくなつて杖に沈み、椅子からハミ出した爬虫類フイディアの尻尾もだらしなく床に放り出した。

「ってか、なんで追いつかけちゃった訳？」

返ってくる答えに若干の不安を覚えるものの、彼女には彼女なりのマンティコアへの想いがあり、それを考えると一応聞いておくべきなのだろう、というのが彼女の本音

だった。

すると、待っていましたと言わんばかりに彼女の不安を煽り放題の無邪気な答えが返ってきた。

「ドクターの、役に立ちたい、から……、」

「……あー、だよな? そうなるよね?」

まあ、マナの場合それ以外の答えは逆に想像できないっていうか……。

別にアタシは恋バナに花咲くようなキャラでもないし、それが「恋敵」になるなら尚更じゃない?

マナのことは大事にしたいし、一緒に楽しいこともしたいと思ってるけど……、いきなりこれはハードだわ……。

「……ウタゲ?」

「あ、いや、何でもない。ただ、なんて答えたらいいか考えてただけ。」

なんか疑わしい目で見てるし……。ホント、なんて言っつて切り抜けようか——、

「……ウタゲは、ドクターの、こと——、」
え?! いやいやいや、マナっ?! だからなんでそんなにハードパンチャーなワケ?! 待ったナシ?!

「カッコいいって、思う?」

「……」

絶妙にからかってくるじゃんよ。

…まあ、そういう天然なところがマナのポイント高い所なんだけどね。

「…まあ、ドクターは気遣いと仕事の鬼だから？ 端から見てる分にはカツコよく見える、かもね？」

うーん、ゴマカし方が微妙に気持ち悪いなー。…でも、

「そう。ドクターね、誰も、見捨てないの……、」

「……」

マナの耳にはアタシの濁した気持ちなんかコレっぽっちも届いてなかった。話し方も少し熱っぽい…。マナ、周りが見えなくなるくらいあの人のこと、好きになっちゃったんだ。

「ドクターね、みんな助けるの…、すごく、カッコいい……、」

「……」

アタシだってあの人のことはイイと思ってる。だけど、アタシとマナじゃ、あの人に向ける目の色が違う。

そこに付け込む訳じゃないけれど…。

アタシにはあの人と同じくらい、マナが……。

ロドスに所属する一癖も二癖もある少女たちは、素顔も知れない上司に少女らしい初心な恋心を抱いていた。

そして、その「恋」もまた十人十色。

一人は、どの種にも属さない特異な体への疎外感コソプレックスを隠す方法ばかりに卓越していくもう一人の自分に嫌気が差していた。そんな「憐れな怪物」の、ありのままを受け入れてくれる「包容力」を求めて。

一人は、その存在に気付かれればいつだって居場所を奪われてきた。そうしてありもしない罪に怯えるようになり、満足に言葉にすることもできなくなった「臆病な怪物」を、絶対に裏切らない「誠実さ」を求めて。

各々が浸かってきた幼い記憶かこが、疑心暗鬼な思い出が、一人の男の肩に重く押し掛かっていった。

視野の広い者ならそれは「恋愛」に付きものだと捉え、あとは自分と相手の相性次第だとドツシリと構えるかもしれない。

それが情熱的な者だったなら、ハッキリさせず、狙われやすい「獲物」フレイのままでもいい続ける男が悪いと罵倒し、プレートを掲げて執務室に大挙して押し寄せるかもしれない。

しかし、彼は誰の懐にも飛び込まない。誰も選ばない。

なぜなら彼の人生において「恋物語」などという小さな幸せは、眼中にないから。よ

り大きな使命によつて掻き消されてしまつてゐるから。

彼の視野に自分の幸せは映つていない。自分以外の幸せを模索し続け、今日も執務室でカフェインと即席麺と医療オペレーターの叱責を並べ、この世界の課題に奮闘してゐる。

——さて、多くの仲間にあされながらその愛を昇華させようとしめない罰当たりな男の話はさて置き、この世に殆ど「仲間」の残つていない彼女たちが出会つたのは、マントイコアのオペレーター適正演習が行われた翌日のことだった。

「ああ、ウタゲか。どうした？」

「……」

少女が野暮用で執務室を訪ねると、申し訳程度の白衣の上に真っ黒なフード付きコートを羽織り、真っ黒なシールドで素顔の隠れる鉄兜マスケットを装着した上司が、一人きりの部屋で楽しそうに喋つていた。

……けれどもウタゲは既すんでのところであつた。最近、とてつもなく気配の薄い新人がここロドスに密航してきたのだということ。

「あゝ、もしかしてドクター、例の新人ちゃんと話してたりするの？」

「よく分かったな。」

ヨカツター、知つてて。そうじやなかつたら今すぐに医務室に駆けこんで「ドクターを殺したくなかつたら今すぐドクターに友だちを用意しろ！」って叫んでたよ。

「今も、そこにいるぞ。」

『……え……？』

そう言つてドクターと呼ばれる上司が指さしたのは部屋の隅に置かれた観葉植物だった。

「うわ、ドクター、めっちゃ避けられてるじゃん。」

「いや、それはお前が来たからだ。それまでは今お前が立つてるところにいたんだぞ。」

「……ふん。」

なんか、釈然としない気分になった。

……でも、こんな形でも彼女に会えたこと自体はラッキーなのかもしれない。

「こんにちは〜、」

……あれ、返事がない。覚さられないように誤魔化したつもりだったけど……、

もしかしてアタシ、もう嫌われちゃった？

「ウタゲ、彼女の声が聞こえないならこれを付けろ。」

そう言つてドクターが差し出したのは小型の無線機インカムだった。

「……でもドクターは、それなしで喋れるんでしょ？」

「いいや、私もそれができたらと思うんだけどね。なかなか難しいものらしい。」
「……それは直前までコレ、ドクターが使ってたんだ……。」

「……ふうん、あー、もしもしー、聞こえる〜？」

『……、こんにちは……』

コレ、思ったよりくすぐったいなあ。それに、やっぱり思った通りの声してる。

「話の腰を折って悪いけど、ウタゲ、私に何か用があつたんじやないのか？」

「ああ、いや、休暇申請を出しにきただけなんだけど……。」

ドクターのデスクの脇にはいつもの通り、目を背けたくなるような書類の山が龍門のビル群みたくひしめいてる。

……もしかしてこの子、ドクターの手伝いに来たのかな？

フェリーマン耳の少女は迷った。

今、この場で自分の我がままを口にするかどうか。

別にアタシは、今すぐにドクターとどうなりたいとか考えてないし。今すぐ彼女に言いたいことがある訳でもないし……。

……ううん、多分、それもウソだ。

「ねえ、ドクター。この子、しばらく借りてもいい？」

『…え……?』

アタシが観葉植物さんを指して言うと、ドクターは少しだけ真剣にアタシたちを見比べた。

「…私よりも彼女に直接聞いてくれ。君が彼女にパワハラを働かないと言うなら私に止める理由はないよ。」

「何それ、アタシってドクターにはそんなキャラに見えるの?」

言いながら部屋の隅に向かってチョロチョロと手を伸ばしてみた。

「もう少し右だ。マンティコア、彼女の手を握ってやってくれないか?」

「…お、これ?!」

いまいち触れてる実感はないけれど…、指はそんなに長くない。太くもないけれど、少しゴツゴツしてる。

「マジでいるんだ。てつきりドクターのイマジナリーフレンドかと思ったよ。」

「それが本当だったら毎日、執務室は賑やかで仕方がないだろうな。そして誰も寄りつかなくなるだろうさ。」

「ご、ゴメンって。ジョークだから、怒らないですよ。」

割と本気でイジけてる。ドクターって、そんなカワイイポイントもあったんだ。

『…ここにち、こん、にちは……』

「あ、ゴメンゴメン！こんにちは。それで、マンティコアちゃん？少しアタシとお茶しない？」

『…………』

…………あれ？やっぱりアタシ嫌われてる？

「大丈夫だ、彼女は優しい人だよ。」

「え、何それ？もしかしてアタシ、恐がられてんの？」

「気にするな。少し人見知りなだけさ。君が本当に私利私欲で彼女に近寄っているんじゃないければ自然と心を許してくれるよ。」

「うわ、ドクターそれ、アタシの印象悪くしてるの分かって言ってるよね？」

「ハハ、マイナスからスタートした方がウタゲの個性的な魅力に気付きやすいだろうと思ってるね。それを知ってる私なりのお節介さ。」

「…ちよつとき、ドクターはたまに意味わかんないこと言うよね。」

そういう所が、ちよつと迷惑だつてのに…………。

——ロドス艦内、カフェテリア

ドクターの勧めで簡易モニターとカメラも借りてきた。

これでバツチリ顔も見えるし、会話も弾むはず…………とはならなかった。

マンティコアは思ったよりも本気でアタシに怯えてた。まるで、そうしていないといけないみたいだに……。

「あのさ、名前、なんて呼べばいいかな。」

『え…、マ、マンティ、コア……、』

「あゝ、違う違う。コードネームじゃなくて、友だちとしてなんて呼べばいいかってこと。」

『…と…、友、だち……?』

「そ。アタシね、アナタと友だちになりたいんだ。」

彼女の事情は軽くしか知らないけど、それでも本名があるのかどうか怪しいし。そもそも今のアタシたちの関係で、そんな深い所に土足で入る訳にもいかないから。

むしろ、アタシはそのため、彼女に会いたかったんだし。

「うゝん、そうだな。マナ、もしくはマナティなんてどうかな? カワイイと思うんだけど。」

思いつきにしては「マナティ」がアタシの胸に結構深く刺さった。

…でも、かなり警戒されてるみたいだし、あんまりアタシの趣味を丸出しにしない方がいいのかな。定着したらカワイイソウかもだし。

『……』

「アタシのこと、苦手?」

モニター越しの彼女が余所々々しげに頷いた。

——私は、それが許せなかった。

…と、言い方が悪いか。訂正、アタシはそれがすごく悲しかった。悲しかったし、受け入れたくなかった。

「そつかり、でもアタシはさ、アナタとは仲良くできる気がするんだよね。」

『…ど、どう、して……?』

彼女にだって選ぶ権利くらいある。そんなこと分かっている。

でも、アタシはアナタのことが知りたい。

…だって、悲しくない?こんな広い世界で、アタシたちが同じ船に乗っているのって相当奇跡的なことでしょ?それなのに、友だちになれないなんて……。

アタシはイヤなの、そんなの。だから……、

「ん、なんて言うかな……。フイーリングってやつ?そんなの感じたりしない?」

仲良くなるうよっ!

『…わか、らない……。でも…、なぜか、ウタゲの匂い、少し、懐かしい感じ、する……。』

でしょ?でしょ?!わかってんじゃない!つか、しれつと名前呼んでんじゃない!

なによ、知らない間にデレてんじゃない!……つと、落ち着け…、落ち着け……、

「嫌じゃない？」

『…うん……』

「マナって呼んでもいいかな？」

『…うん……』

やった、ヤッタ!!なんだ、アタシってばやれば結構できる子じゃん!

俯く顔にはまだ余所々々しきは残ってるけど、それでも一歩近づいたことに変わりはないよね!

柄にもなく有頂天になってたら知らない間に、しやなりしやなり、お上品な形なりの狐ヴアルボの姉さんがトレーを持って、さっきの執務室前のアタシと同じ目付きでアタシを見ていた。

「…ウタゲ、大丈夫? 疲れてるの?」

「い、いや、ラナ姉、違うよ? イマジナリーじゃないよ、リアルフレンドだから!」

「い、いまじなりー? よく分からないけれど、要するに独り言じゃないのよね?」

アタシは慌てず落ち着いて、マナが周囲に気付かれにくい体質であることと、先日、口ドス艦内に響き渡った警報器の原因であるお騒がせな女の子であることを織り交ぜて紹介した。

ラナ姉は理解力のある人だし、普段からあまり動じない性格もあって、すんなりとマ

ナのことを受け入れてくれた。

「へえ、ここに人がいるのね。全然分からないわ。」

『……、こん、にちは……、』

「はい、こんにちは。それにしても珍しいわね、ウタゲがあんなに積極的に話し掛けるなんて。」

「へ？」

ラナ姉のやんわりとした言葉は時折、狙い違わず的中心をズバツと射抜いてくる。それも細っこい弓矢なんかじゃなく、ゴリゴリのコンバットナイフで。

「そ、そう？アタシっていつもこんな感じじゃない？」

「……そうね、私の勘違いだったみたい。ごめんなさい。」

それに彼女はアロマセラピーのプロだから、「表面」の部分よりもむしろ「隠してる」方が見えやすいのかもしれない。

だから気付きこそすれ、ズカズカと立ち入ってくることもない。

「まあ、なんていうかき、マナと気が合う気がしたのは本当だけどね。」

「へえ、マナっていうのは本名なの？」

『……、ううん、ウタゲが、付けて、くれた…、ニツク、ネーム……、』

「あら♪」

…なぜだろう。いつもなら他の子とは違う、シツクな感じのオシヤレを語り合う良い友だちのはずなのに。

今はとてつもなく、ウザい。

例えるなら、久しぶりに会った親戚のばあちゃんみたいな……。

マナに気付かれない程度に彼女を睨むと彼女はすぐにアタシの視線の意味を理解したらしく、アタシと同じ話し方で誤魔化してきた。

「ふふ、ごめんなさい。なんだかウタゲがいつもと様子が違うから、ちよつと揶揄ってみただけよ。だからそんなに恐い顔しないで。」

「まあ、いいけど。」

『…ウタゲ、この人は……?』

「ああ、ごめん。紹介してなかったね。」

アタシはマナにラナ姉の紹介と、付き合う上での「注意点」を説明した。

ラナは本名だということ。コードネームは「パフューマー」で、ロドスでの彼女の役割は精神面での医療をサポートすること。

そんな彼女の最大の特徴は、とにかく鼻が利くということ。

数日間洗わなかったオペレーターたちの靴下の臭いすら嗅ぎ分けた時は皆が妙に感動して、拍手喝采が巻き起こった。それと同時にラナ姉の不興も買ってしまい、アタシ

「私たちは洗わなかった日数と同じだけラナ姉の辛辣な言葉の餌食になったこともあった。

「料理が得意だからって大量のゴキブリやゴカイを調理させられてるようなものよ? どれだけあの汚物をアナタたちの口に突っ込んであげようと思ったことか?。むしろあの程度で済んだことに感謝して欲しいくらいだわ。」

こんな感じで、ラナ姉は静かに怒るタイプの人だった。

アタシたちはぎこちないながらも談笑し、マナにロドスでの普段の過ごし方を簡単にレクチャーした。

「それじゃあ、アタシはまだすることがあるから温室に戻るわね。」

『…お、温室……?』

「そう、ドクターに造ってもらった艦内の庭園よ。いろんな種類の花を育てているし、必要な人には植木鉢で提供することもあるわ。興味あるかしら?」

『…花、好き……』

「あら、そうなの? 多分、私かポデンコっていう女の子がいると思うから時間があれば訪ねてきてちょうだい。…ああ、ポデンコは気の小さい子だからあまり驚かさないであげてね。」

『…わかった……』

不思議な感覚だった。

出会ったばかりの人と、暗殺しじとじゃない話を何時間もしてる。殺すでもなく、追い回されるでもなく。一つの椅子に腰かけ、美味しいものを食べて……、

…なんだろう、これ……、

『…お、おはよう……、』

翌朝、ウタゲは渡したいものがあるからとマンティコアを呼び出した。

「あー、おはよう、マナ〜。」

『……』

不思議な気持ちだった。

声を掛ける前、ウタゲは他の人と楽しそうに話していて、私は近付くのを躊躇ためらっていた。

…躊躇ためらっていた。

嫌なら、帰ればいいのに……、

…私は、ウタゲに、会いたかったの……？

『…なに、してるの……？』

ウタゲは、唐突に用途のわからない棒状のものを数本取り出したかと思えば、私の手を取り、それで——画面越しに——爪を擦り始めた。

「ん？ファイルかけてるんだよー。マナ、手入れしてないでしょ？うわ、ここ割れてんじゃない。ダメだよー、女の子なんだからオシヤレには気を配らなきゃ。」

『…よく、わからない……、』

「ま、アタシに任せときなつて。」

薄いシートに高価そうな複数のジエル。手慣れた様子で荒野の少女の爪の割れや凹凸がみるみる間に補修されていく。

「じゃあ、仕上げいくね。」

彼女は持参したスカイブルーのマニキュアで黙々と、丁寧に塗り上げていく。

『……』

「…ん？どうした？…ああ、なんかリクエストがあれば言つてね。部屋に戻れば他にもいろいろな色があるから。」

彼女の言う「オシヤレ」はよくわからない。だけど、今のウタゲの顔は今までになく真剣で、どこか……、

『……』

「…オシヤレは嫌い？」

『…わからない…、でも、これ…、いい色……、』

「でしょー。マナのこと見た瞬間、ビビツときたんだー。きつと似合うつてねー。」

『……』

「いよし、できた！どうよ、似合ってるんじゃない？」

ウタゲは少し引いてモデルの全身を眺めると、フェリー耳をピクピクと陽気に動かしながら満足そうに笑った。

「うんうんイイじゃん、イイじゃん。思った通り、マナは澄んだ青が似合うと思ってたんだ〜♪」

……わからない。何がそんなに楽しいの……？

体と頭の疲れを癒す食べ物も、砂嵐を避ける家もある。それだけで十分じゃないの？

……でも……、

自分の指先を眺めてみた。生まれて初めて、まじまじと……。

見れば見るほど不思議な感じになった。

そこには今、今までに数えるほどしか見たことのない見惚れるような青空があった。

……信じられない。それはオアシスも羨むような青で。砂嵐もビツクリして逃げていくような綺麗な青なの。

「えーつと、あんま気に入らなかつた？まあ、他にもいろいろデザイン変えたりデコったりするのも楽しいよ？」

『……う、ううん……、私、これ、好き……、』

本当に、不思議な気持ちで渾々と湧き上がってくるの。自分が沢山の人を殺した「感染者」やくびょうがみだってことも忘れてしまいうくらいに……。

——使ひ方の分からない言葉があった。

ただ、なんとなく、何度か仕事仲間に使ったことがあった。だけど、彼らにはなんの反応もなく、意味なんてないんだと思っていた。

だけど今は、自然と、「ここなんじゃないか」と思えた。

『……ウ、ウタゲ……、』

「んっ？」

彼女は本当に満足そうに私を見詰める。

それが、怖がる私を勇気づけてくれているような気がした。だから……、

『……あ、あり……、ありが……、とう……、』

「……へへ、いいよー。」

不意に、喉の渇き一つ潤せないような小さなオアシスに、荒野を呑み込むような大きな波紋が立った気がした。

彼女の笑顔が、私の中の不思議な気持ち、私の墓ねどだった赤土たちを見たこともない

色に染め上げていく。そんな「蜃気楼」でも見ている気分になった。

この「言葉」はそのためにあったのかもしれない。

だけど、いつでもいい訳じゃない。ウタゲのような、あんな顔で笑ってくれる誰かと同じ気持ちになるために口にする言葉なのかもしれない。

だから……、

『……ありがとう……、』

初めての気持ちにのぼせた少女はもう一度だけ、おそろおそろ呟いた。

それからは自分からウタゲに会いに行くことが多くなった。

温室にも行った。メランサの部屋や、私の入職を手伝ってくれたアンセルにも花を贈った。

他にも、私のことを知ってくれた人のところにはなるべく、忘れられないように通うことにした。

それが大事なんだって、ウタゲに教わった気がしたから。

…本当に、ウタゲには大切なことを教えてもらった。私がいた場所では必要のなかったことを。

「…マナ、いい機会だから覚えておきな。『殺し屋』を止めたからって、アンタのやることなすこと全部がキレイになつてる訳じゃないんだよ。約束を破れば信頼を失くすし、ウソを吐けば誰もアンタを頼らなくなる。そして、その『約束の中身』や『ウソ』を決めるのは周りの皆なんだ。もしもマナがロドスの皆と一緒に生きたいなら、これからはそういう努力も必要になつてくるんだよ。」

「…わからない…、けど、行つてくる…、」

私は、「悪いこと」をしたんだ。

「……」

どうしてだか、ウタゲの顔が泣いているように見えた。

「……ウタゲ…、」

「ん？」

「…ありがとう。」

「え？」

「私も、いつか、ウタゲに、そう言ってもらえるように、頑張る。だから、傍にいて、欲しい…の…。」

「…うん、いいよ。」

あの時よりも控えめだけど、私でもウタゲを笑顔にさせられた。不思議な言葉だっ

た。

「いってらっしゃい、マナ……、」

私はロドスに入って大切な人ができた。

とても、大切な人。

それは、ロドスに入る前に偶然出会ったこの三人の荒野^{ドッ}に放置^ッされた死体^グみたいに、私^シのことをずっと見ていてくれる人たち。

一生懸命、私を見つけてくれる不思議な人たち。

「ありがとう」

何度も言いたい。何度も、笑ってみたい。

大切な人たちと一緒に——、

毒針を隠す少女 おまけ（終）

●おまけ その一 「それでも私、価値、ある……？」

……そこは、最高裁の目さえ逃れる現代社会が産み落とした至高の処刑台。それに魅入られし者の目には、人間の脳をパズルのピースのごとくバラバラにしては敷き詰める悪魔たちのまな板に映るかもしれない。

まな板は執拗なまでに私を吸い寄せる。薄っぺらな白い長方形の解体包丁が今か今かと私を待ち受けている。

逃げ場などない。私はここに縛られし憐れな奴隷なのだ。

常しえに、週末を憂える家畜なのだ。

せめて苦痛を抱かず逝かせて欲しい。そんな愚者に許されし漆黒の液体を聖杯に満たし、私は罪の深淵に飛び込んだ——

——それから8時間後、

その部屋の前に立った少女は、心なしか室内がいつもよりも淀んで感じられた。

「ドクター、調子はどうですか？」

「……」

「……ドクター？」

「……!? ああ、ああ、アーミヤ総督でありますか。すみません。……かの銀槍を頂く国の掲げた試練が私の中に眠りし睡魔セイレイマを呼び起こしてしまつたらしいのです。」

「……え？」

少女は怪しい研究に没頭する奇術の国、リターニアへも訪れたことがある。

彼女には、彼らが紙片に走らせるミミズの這い回るような難解かつ不吉な呪文を今、憧れの恩師が唱えたように聞こえた。

人類が未だ遭遇したことのない未知の生物が、彼方からの訪問者が口を開いたかのよううに感じられた。

それは、振動する空気を粘液に変えたかのように不快で、体内に侵入されたなら悪寒で体温が3度は下がってしまうのではないかと思えてしまう程だった。

……まあ、端的に言くと、彼女はヒいていた。

「……ド、ドクター、少し休みますか？」

これまで、何人にも成しえない輝かしい功績を我が物としてきた彼女の素晴らしき恩師は、彼女を見上げると乞食のように震える手を差し出した。

「…私を許してもらえますのですか？こんな醜く惨めな、私を……。ああ、兎ウエの女神ネトさまっ
！」

「ドクターっ！医務室へ行きましょうっ！今すぐにつー！」

それはもう、少女を蒼白とさせるのに十分な奇行だった。

「どうとうやっってしまった！」少女はそう思い、自分の失態を心から呪った。

——医務室

「アーミヤさん、安心してください。単に、中度の過労からくる判断力の低下です。ただでさえドクターは働きすぎなんですから。その上にこんなにカフェインを摂って……。」

…それは果たして安心していい診断結果なのか？

栄養剤を打たれ、いくらかハッキリした頭で私は主治医の言葉を疑った。

それを言葉にしないのは、彼女の性格をよく知っているからだ。

「それはそうとドクター、今日という今日は言わせて頂きますけれど……。」

いや、口にするまでもなく彼女のそれは発動してしまった。反省を知らない私を、日

頃の鬱憤も織り交ぜて執拗なまでに批難するつもりなのだ。

そういう口煩くちうるさいところは彼女の師によく似て……、いや、彼女の場合、非があるのは常に私なのだ。

それでも、診断結果からすべき医師の勧告はもつと簡潔であるべきだと思ってしまうのは私の我がままなのだろうか。

「ドクター、少しは落ち着きましたか？」

丸々、一時間に及ぶフォリニック医師による説教を受けた後、私はアーミヤに見守られながらカフェテリアで健康的な軽食を取っていた。

「すまないね、心配をかけて。もう大丈夫だ。本当に、少し疲れが溜まっていただけなんだ。」

夜ももう遅い時間帯だからか。カフェテリアには珍しく人氣がほとんどなく、彼女の愛らしい声がよく響いた。

「ところで、あの映画のセリフみたいな文言は何だったんですか？」

今思い返してみると、自分でも理解し難い言葉だ。酔っ払ったナルシストよりもたちが悪い。

「……いや、今朝、シエーシャの源石武器の改良報告に1時間ほど付き合っただけなんだが

……、」

そう感じた後で打ち明けるのは若干の引け目を覚えるが、それが真実であることに変わりはない。

「アハハ、なるほど……。あの人の言葉は不思議と耳に残りますもんね。」

シエーシャはロドスのエンジニアオペレーターで、アーツユニットの扱いが不得手なオペレーターにも使いやすいようにと優れた知恵を貸してくれる掛け替えのない社員の人だ。

ただ、“奴”の独特な口調は朦朧とする脳には刺激が強過ぎたらしい。こちらの良識的な思考がごとごとく蝕まれてしまうのだ。

僅かに残った理性でどうにか仕事自体には支障をきたしていないようだが、あのまま会議にでも赴こうものなら件の「口煩いもう一人のフェリオン」にまた……。いいや、アイツの場合“量よりも質”で間接的に私の時間を奪ってくるだろう。

そういう手練手管ホキヤブラリの豊富さにおいては、さすが数々の歴史的事件を経験してきた人物だと認めてやらんこともない。

……だいたい、会社の記念日に携帯用の非常食を贈るなんて、何を考えているんだ、アイツは。

……それはさておき今回の件については、面接の段階でシエーシャヤに感じていた「厄介

さ」を見逃してやった甘さが完全に裏目に出てしまったな。

今後、奴に会う時はイヤホンをつけてコメディ番組を大音量で聞きかつ、栄養剤を最低10本は打ってから臨むことにしよう。

アイマスクもあればなお完璧だ。

「ドクター、今日はもう休んでください。代わりに明日は私もお手伝いしますから。」

「……そうだな。」

確かに、今の状態でペンを走らせ続けていれば、いずれは大事な誓約書に誤字脱字を生むことになるだろう。

それでロドスを不利な状況に追い込むのであれば、ドクターわたくしという立場はあつてないようなものだ。

……それに、彼女の声色は平常であるものの、どこか「奴のようにはならないで欲しい」という切実な願いにも聞こえ、無下にできない気持ちにさせた。

「今、手を付けている書類が終わったら休むことにするよ。君を心配させてまですべき仕事は私の業務の中に一つとしてないからな。」

「……えへへ。」

「……」

アーミヤは、実の娘のように可愛く思う。

こうして自然に彼女の頭を撫られるのも、同じ屋根の下で誰よりも苦難を分かち合ってきたこの子だからこそ許せる行為だ。

彼女もまた、それが自分にだけ許された特権だと知っているからこそ、立場を忘れて喜んでくれる。

そして、その笑顔がさらに疲れた私を癒してくれる。

……本当に、気付かないところでこの子に助けられているのだと実感する。

「それじゃあ、また明日。お休みなさい、ドクター。」

「ああ、お休み、アーミヤ。」

CEOとしての風格を持ちながらも兎のような軽やかさで宿舎へと帰る彼女の姿を見て、私も体が軽くなった気がする。

さて、もう少しだけ頑張るとしようか。いぎ、行かん深淵の魔城へ。

「……」

魔城に戻ってみると、まな板の上に身に覚えのないものが置いてあった。

「……私は、まだアイツに洗脳されているのか？……ああ、いや……、」

どうやら女神様の白魔法はきちんと作用していたらしい。

私の残り少ないMPで、ソレの正体をズバツと見抜くことができた。

「マンティコア、そこにいるのかい？」

私はデスクの上の無線機インカムを装着し、虚空に向かって呼びかけた。

『ドクター…、こんばんは…、』

おお、本当にいた。…まあ、インカム越しではそこにいるという証拠にはならないが、それでも声を聞けばそこに彼女がいるような気がしないでもない。

これは彼女の「認識阻害」に抗おうとしているからなのだろうか。

「どうした？ 眠れないのか？」

『…うん…、』

「じゃあ、社会見学か？」

『…うん…、』

彼女に出会ってから、私はその言葉を一番多く耳にしている。

言葉の意味は「否定」だが、不思議と聞いていて不快な気分にはならない。

「…そういえば、太ももをケガしていたな。まだ痛むか？」

『…だ、大丈夫…、』

『…、』

『…、』

彼女はロドスに入職した。入職したと言っても、彼女に医療知識はないのですぐに仕

事が与えられる訳ではない。たまにケルシーに彼女の尻尾から採取できる毒を提供するために医療部に顔を出すくらいで。

彼女は一人で大丈夫だと言っていたが……、やはり、暇なのだ。

「少し時間はあるか？仕事続きで精神的に参っていたところなんだ。良ければ少し私の話に付き合ってくれると嬉しいんだが。」

『……うん……』

もともと彼女の話し方は尻すぼみで歯切れが悪い。今回も肯定なのか否定なのか聞きづらかったが、立ち去る様子もなかったので前者として受け取れた。

「飲み物は何かいるか？」

『……いい、それより、ドクターの話、聞きたい……』

「そうか、」

特別凝った話をする必要なんかない。

ここで私が経験した、他愛もない出来事を伝えればいいんだ。彼女はそれに飢えてい
るのだから。

面白かった話から頭を抱えさせられる話まで。たまに、彼女に感想を求めながら——
—感想といつても例のごとく「うん」と「ううん」で答えられる程度の感想だが——
小一時間ほど言葉を交わした。

その間、私はそこにいない彼女の姿を、履歴書の証明写真で補填し続けた。

こう言ってしまうと「自惚れ」か「勘違い」に聞こえるが、写真越しでもあの瞳には「人恋しき」が宿っているのだと私はすぐに気付いた。

どんな形でもいい。彼女はロドスに「心安らぐ場所」を求めているのだ。

『……』

基本的に私が一方的に話している。だから彼女が黙って聞いていることに何の不思議もないのだが…。

「どうした？」

表情すら読み取ることができないというのに。どうしてだか、その沈黙は違って聞こえた。

そして、どうやらそれは的中していたらしい。

彼女は、おそらくはそれこそが私を訪ねてきた理由なのだろうという一言を呟いた。

『…ドクターは、どうして私を、棄てないの……？』

…私が話した日常の中に、自分が入り込めないと感じたのかもしれない。たとえば、ここでオペレーターとして働くことができたとしても、自分にはそんな「心に残るような存在」にはなれないと。

不安…、も少なからずあるだろうが、今の彼女の言葉は純粹な疑問に近いように思う。

だが、それを「今」、「私」が答えても意味がない。

「じゃあ、私が君を捨てる理由を教えてくださいませんか？」

『…え……？』

私たちが彼女に優しく接することは簡単だ。普段通りにしていればいいだけの話なのだから。だが――、

「私には分からない。だから、教えて欲しいんだ。どうして君は私がそんなことをしなければならなくなると思うのか。」

トラウマや偏見、染みついた悪習慣は自分の意思を彼女自身^そが知らないことには何をしても治らない。

『…私、戦うことしか、できない。誰も、笑わせ、られない…。だから……、』

「…そうか。じゃあ、もしも本当に君がつまらない人間だとして、私はどうしてこうして君とお喋りをしているんだろうな。」

『…それは…、まだ、私のこと、知らないから……、』

忘れることさえ一時^{しの}凌ぎでしかない。

鏡に映るたびにあの瞳が彼女自身に訴えかけるだろう。今感じている全てが本物なのか。彼らは本当に自分の味方なのか、と。

「確かに、君のことはまだ知らない。だがもしも、それで私がまだ君をつまらない人間だ

と見抜けていないなら、少なくとも、君は全くつまらない人間ではないんじゃないのか？」

だが、自分の手で見つ出した「答え」は簡単には枯れない。

一度、根を張れば生涯、彼女を支える大きな木になる。日照りにも砂嵐にも負けない大木に。

『……』

「マンティコア、苦手なことは育てればいいんだ。どんなに時間が掛かっても。少なくとも、私たちはそうしようとする君を支えていられる。」

人は、そういう木の下に集まるものだ。

『……ドクター……、』

「なんだい？」

『……私、がんばるから……、』

その時、私は写真の女の子の姿が見えたような気がした。

……：そういうえば、あれから一枚も書類に手を付けていない。

……：けれど、この船にはこんな私を支えてくれる女の子もいる。何も、心配いらぬ。

君も、私も。助け合える日がきつと来る。それが、ロドスだ。

●おまけ その二 「…みんな、ありがとう……、」

——ある日の執務室にて（A M 6 : 3 0）

「ドクターっ！」

オールバックのヴィーヴルがノックもなしに私の仕事部屋に駆け込んできた。

もしもこれがオペレーターを連れ立つての仕事の最中であれば、私はすぐさま「敵の有無」や「対処法」に頭を切り替えただろう。

だが今の私は、休む間もなく鞭打たれる利き手を励ますことに死力を尽くしていた。

「……どうした、ステイ。パーベキューか？それともエリジウムか？」

私はアリの行列のように少しでも気を散らせば、どこを見ていたか分からなくなるような細かな文字列を睨み付けたまま、手頃な日常茶飯事レムを上げてみた。

「…え？ああ、いや、すみません。ちよつと大袈裟レムだったかもしれません。」

普段、マスクの下に隠れているオールバックのイケメンは自分の取り乱しつぷりに付き、胸に手を当てて深呼吸をし始めた。

「…？結局、何がどうしたんだ？」

ベテランオペレーター、ストームアイは容姿もさることながら、その仕事つぷりから一見シツカリとしているようだが実は間が抜けている一面も持ち合わせている。

それが一部女性陣からの人気を博ほくしている。

「ああ、すみませんドクター。お忙しい時に。」

「それは気にしなくていい。それで、どうしたんだ？」

「……」

「どうした、急に黙り込んで。もしかして、記憶が飛んだとか言うつもりじゃあるまいな。もしもそうだとしたら君も立派なワーカーホリックの仲間入りだな。ハハハッ……、」

彼に皮肉を言ったつもりが、同時に自分を傷つけていることに気付いてしまった。：少し、休憩したいな。

「いえ、ドクター、もしかしてマンティコアに何か言いました？ ついさつき、畏まってお礼を言われたんですが……」

「……ああ、言ったな。君は衰弱した彼女を介抱しようとしたんだろ？ そういう行為には感謝をすべきだと彼女に言ったんだ。：何かマズかったか？」

確かに、彼女にステイのことを覚えているかどうかを尋ねた時、「標的の顔、忘れない」などと不穏な言葉を口走っていた。もしかしたら何かあったのかもしれない。

私はペンを走らせながら頭の中では謝罪の言葉を列挙しなければならなくなつた。

だが、彼はすぐにそれを否定した。

「い、いえ、お礼は嬉しかったです。ですが……、」

「なんなんだ君らしくない。ハッキリと言ってくれ。気になって利き手が言うこと聞かなくなるじゃないか。」

…もう手遅れだった。私が彼に視線を移した隙に親愛なる相棒は、これは好機と完全に休眠モードに入ってしまった。こうなってしまうてはどこかの赤毛のコータスのように気のすむまで眠り続けるのだ。

「いえ、その時、なぜか彼女はやたらとドクターの話題を上げてくるんです。」

「…それで？」

先程から彼はご機嫌取りの商人のように私の顔色を窺い続けている。それが逆に癩に障る。

「…いえ、その…、怒りませんか？」

「なんだ、君は私に減給申請書まで書かせるつもりか？勘弁してくれ。」

完全に集中力を失くした私がペンを投げ捨てると、ステイは委縮し、言葉を詰まらせてしまった。

「…悪かった。少し疲れているんだ、許してくれ。それと、怒らないから続きを言ってくれ。」

すると彼は一大決心をした冒険家のように偉大な一步を踏み出した…、そんな演出を求められた俳優の顔をしていた。

「彼女、ドクターに気があるんじゃないかと……、」

「……ステイ、」

「……はい、ドクター、」

「……頼む、帰ってくれ。」

その後、社長が耳元で不穏な言葉を囁くまで私は爆睡を余儀なくされた。まったく、なんて会社だ。

——行動予備隊A4、アンセルの宿舎（AM7：45）

コータス族のアンセルは種族の生態上、夜型の生活の方が性に合っていると公言していた。

だが、従業員の権利は平等に与えられなければならない。そのため——極力、考慮されてはいるものの——、当然、彼にも日勤は与えられる。

それは社員としての義務であり、彼にとつての苦行でもあった。

「……眠い……、メガネは……、」

数歩あるいて立ち止まる。

「あ、僕、メガネしてなかった……、」

こんな調子ではあるが、彼がベッドから這い出て夢遊病から立ち直るのにそう時間がかからない。これも、人の命を預かる医者としての責任感と、生来の彼の生真面目さが良い意味で働いていた。

「……よし。」

体温計を咥え、鏡に映った自分を見て健康状態を確認する。自分で用意した健康食をよく噛んで食べ、歯を磨き、清潔な衣類を身に付ける。

ルームメイトを起こさぬよう静かに、とにかく真面目に、彼の身支度は進められていく。

「……」

使命感や正義感を大事にする彼にとって意義のある毎日ではあるものの、決して面白い毎日ではない。

特に、「鉋石病」は未だ治療法の見つかっていない病だ。遅かれ早かれ、皆死ぬ。それを念頭に入れて彼らと付き合わなければならぬ。

重篤者の安否を想いながら食事をする時は、バルブで固く閉ざされているのではないかと思うほど喉が物を受け付けない。延々と、味のしない葉っぱを咀嚼し続けている。助けられなかった翌日は後悔や無力感で袖を濡らしてしまうこともある。

それでも彼の「身支度」が滞ることはない。

絶対の“希望”を掲げる人が彼の前を歩いていくからだ。

その人は時に恐ろしい戦争人であり、時に迅速に損得勘定をはじき出す商人でもあり、皆を驚愕させる変人でもある。

それでも、彼はその人を尊敬している。

「足のない者の足を生やすことはできない。だが、足のない生活を豊かにすることはできる。それが私たちだ。」

涙の止まらない彼の頭をソツと撫でてくれたその人は「人生の放棄」を決して許さない人だった。

強引に、積極的に、恐れを知らず、「不幸」を捻じ伏せて進む人だった。

男の子である彼にはその人がどこか「勇者」のように映っていた。

少しでも遠くへ、あの人と歩めるのなら。

少しでも近くで、あの人と可能性を見詰められるのなら。

少しでも、あの人の助けになれるのなら。

彼はこの会社において、優秀な部類の人間には入らない。それでも、彼の真面目さは“希望”から目を逸らさない。積極的に、時に恐れを抱きながらも、新しい一步を忘れない。

一日でも早く「助けられる人間」「護れる人間」になるため、彼はそれを怠らない。

「……ん、これは？」

全ての準備が整い、いざ扉を開けてみると、足元にピンクの花を植えた小さな鉢がポツンと置かれていた。

根本に添えられたメッセージカードには、彼女らしい簡素な感謝の言葉が書かれていた。

「アナタのおかげでロドスに入れました、ありがとうございます——マンティコア——」

「……」

彼は、自分の頑張れる場所が医務室だけではないことに気付くと、ほんの少し、頬を緩ませた。

—— 訓練場、使用中、行動予備隊A1（PM1:00）

「さあ、フェンちゃん！一気に！」

「…本当にこれ、飲んで大丈夫なものなの？」

「もちろんです！さあ、さあ、遠慮せず！ぐぐいつといつちやつてくださいー！」

「あのね、お酒じゃないんだから…。はあ……。いくわよ……、」

生睡を飲み、対峙する強敵を睨み付け、青髪の馬族はぐぐいつと、いった。

「どうですかあ？今回はかなり自信があるんですよ！」

「……ハイビス、果物が、入ってるのよね？」

「はい！桃やバナナ、今回は特別にイチジクなんてレアものも入ってますよ！」

桃は高級品だし、バナナは私も好きだ。確かに今回は気合いが入っているのかもしれない。けれど…、

騎士の国、カジミエーシュ生まれの克蘭タの瞳が、剣を折られ地に膝を着かざるをえない苦渋の表情に満ちていた。

「だったらどうして…、どうして一切、いっさい甘みが感じられないの?!」

胃酸が昇ってくる感覚に、フェンは必死で耐えた。どんなに未熟者であっても、分隊長としての威厳が彼女に死への恐怖にさえ屈しない忍耐力を与えた。

…ああ、でも、たくさん星が見えるわ……、

「でも、体には良いんだから！」

「…それが保証されれば私は犬のフンでも食べなきゃいけないの？」

「ああ、フェンちゃんひどい!!体調が良くないって悩んでたからフェンちゃんのために一生懸命作ったのに…、犬のフンだなんて…！」

医師見習いの悪魔族は予想外の感想を叩きつけられ、わなわなと目を潤ませ、大仰に顔を覆った。

「…ああ、ごめんなさい、ハイビス…。私も、言い方が悪かったわ。ただ…、アナタはまず普通の料理から覚えた方がいいと思うの。」

その物言いもハイビスカスには少し納得がいかなかった。それはやはり遠回しに「犬のフン」だと言われている気がしてならなかったからだ。

彼女は確かに同僚の体調を考慮した「健康食」を作ったはずだった。

新鮮な野菜を使い、高価な果物も惜しみなく使った。市販の野菜ジュースなんかよりは遥かに多くの食物繊維もビタミンも接種できる。

便秘気味で疲れが溜まりやすいと悩んでいた彼女に効果がないはずがない。

…そう、「効果」の面では申し分なかった。

唯一の問題は、彼女が料理において「健康」以外の項目で確かな「悪魔」の性質を發揮してしまうという点だ。

「味」というものを知らないのか。ただの「味オンチ」なのか誰にも分からない。一部ではわざとそうしている彼女の「娯楽」なのだと噂する者もいるくらいだ。

だが、そう言われても仕方がない。

食べ合わせ最悪、上等。旨み成分皆無、だからなんだ。「前衛的芸術作品」が理解されないのは世の常じゃないか。

…とまでは考えていなくとも、少なくとも彼女に料理の才能がないことは間違いない

かった。

だが、驚くなかれ。「この世には瓜二つの人間が三人存在する」、その迷言をロドスは見事に証明してみせた。

彼女同様、「健康」にしか興味のない者。「とにかく夏までに痩せたい」と鏡の前で泣き喚く者がこのロドスの中に二人も存在したのだ。

彼女たちは自分の目標、野望のためなら「犬のフン」ですら望んで食べてしまう。

それが彼女の、独自の「健康食」への熱意を悪い方へ、悪い方へと伸ばしていくのであった。

そしてここにも、悪の芽を肥やしてしまう無知な少女が、二人の遣り取りを見守っていた。

「……おいしかったのに……、」

あろうことか。少女はその認めてはならない「味」さえ認めてしまっていた。信じられない。

そして、少女は感謝もしていた。自分がこんなにも早く回復できたのは、入職試験で本調子になったのは、アンセルが用意してくれたあの「健康食」のお陰なのだと。

「……でも……、」

ハイビスカス、南国の活気をそのまま形にしたかのような生命力に溢れた存在とコ

コミュニケーションを取るには、少女にはまだ勇気が足りなかった。

——ありがとう、飲み物、おいしかったです——

少女は空になった容器の脇にソツとメッセージカードを置いて立ち去った。

ところが、二人の遣り取りに気後れしてしまったのか。少女は自分の名前を書き忘れてしまった。

それが、槍使いの騎士を襲う、次なる魔王を召喚する儀式となったのは言うまでもない。

——医療部、研究室（PM2：15）

かの魔女はあの日とは一変して黙々と業務に励んでいた。

「しかし、あのマンティコアはおしかったな。」

やって来て早々、よりによって彼女に名前を挙げられたことで、少女は取り乱してしまった。

しかし、腐つても元暗殺者。咄嗟に口を塞ぎ、尻尾を踏みつけることで、なんとか気配を隠し通すことに成功していた。

「…またそんなこと言って…。そんなことだから他のオペレーターにも誤解されてしまうんですよ?」

「フン、木を見ずして森を見た気になってる愚か者のことをなぜ気にかけてやらねばならん。」

「先生は前線にも出られるでしょ？ドクターも言っていましたよ？先生にもつと笑顔があれば休憩中に他のオペレーターが緊張しなくてすむのになって。」

「なに？ 妾わらわに、笑えと？…今度あの唐変木に会ったら伝えておけ。妾の笑い声が聞きたくば、ロドスにモルモットのビュツフェコーナーを用意しろとな！」

「…先生、それ、矛盾してますよ。」

…

南国の花どころではない。

この魔女には二度と関わるまい。少女は固く誓った。

——カフェテリア、厨房（PM5:00）

「イベリア風海鮮オムレツ、あがったよーっ♪」

「おう、これだよこれ！待ってたよ！…ああ、まったく良い匂いしやがる！また腕を上げたんじゃないか？」

活気のある調理場に腹を空かせた狼たちの歓喜の声が飛び交う。

「へへ、そうかな？」

「ああ、グムの飯があれば世界平和だつて夢じゃあねえよ！」

「俺なんか、嫁に欲しいくらいだよ！」

殺伐とした仕事を終えた狼たちは愛らしい小熊をチャホヤすることで日々の疲れを、心身を隅々まで癒していた。

それは、彼女が担当する時にだけ選べる、オペレーターたち一押しの特製メニューだった。

「えへへー、そう？もう、おじさんたちはお世辞が上手いなー♪仕方ないから今回だけオマケしてあげるよ♪」

「うお、マジかよ！サンキュー！」

「今度、トランプしような！」

これ以上なく満足して去っていく狼たちに、小熊は元気いっぱい手を振って見送った。

「明日も頑張つてね〜〜！」

そんな彼女も立派な戦闘員であり、危険な任務に就けられることも少なくない。

彼女を愛する同僚たちは思う。彼女には幸せになつて欲しいと。心から。

「……あれ？これ、おじさんたちからかな？」

——今度は、ちゃんと、食べに来ます——

厨房の無邪気な熱に当てられて、またしても名前を書き忘れてしまうマンティコアであつた。

——執務室（PM7：00）

「……」

…ドクター、まだ、働いてる……、

素顔の見えない不審な出で立ちの男は、机に憑り付いた怨霊のようにただただ黙々と紙を睨み、ペンを走らせていた。

ハラリ、ハラリと紙を捲る妖怪のように同じ動きを繰り返している。

けれども、彼は「仕事」をしている。

あの何でもない紙切れ一枚一枚が、枚数よりもたくさんの人の命を救う力に変わる。

その中に、自分が含まれている。

それだけでも、彼女にとっては信じがたいことで、惹きつけられるには十分すぎる魅力でもあつた。

そしてこの男はまた、信じられない奇跡を彼女に魅せつけるのだった。

「……誰か、いるのか？」

え!?

「マンティコアは思わず辺りを確認してみるが、この部屋には自分と妖怪以外に誰もいない。」

ド、ドクター…、わ、私のこと…、

「…マンティコアか？」

信じられなかった。

気配を探る術はおろか、戦闘の心得すら碌ろくにないようなこの不健康な男がどうすれば自分を見つけられるのか。

しかし、これは紛れもない現実だった。

「…う、うん……、」

彼女は恐る恐る答える。……しかし、

「…気のせいか？」

……あれ？

「それとも、まだ私は信用されていないのかな。」

…ち、違う…、ただ、聞こえてない、だけ……、

今日はインカムも持ち歩いていない。「声」は伝えられない。けれども、

『私、ここにいます』

慌ててドクターの手からペンを取り上げ、紙の端に殴り書いた。

「…そうか。だがな、これは競合不干渉の契約書なんだ。できればこっちに書いてもらえるか？」

ああっ！

『ごめんなさい』

緊張と動揺で震えながら書いたそれは、契約書の細かい文字にも勝るとも劣らない難読な文字に仕上がっていた。

それでも流石は執務室の怨霊。それを難なく読み解いてみせた。

「ハハハ、落ち着いて。紙はまた用意すればいい。」

『私、棄てられない？』

「おいおい、まだそんなことを言っているのか？」

私は、バカだ！ドクターは、そんな人じゃないって、分かっているのに……、

「まあ、不安は一朝一夕には拭えないもんさ。マンティコア、ユックリでいいんだ。」

……ありがとう、ドクター……、

ドクターはまた、ちよつとした世間話で少女の心を癒した。

…ありがとう……、

少女はこの言葉を積極的に形にしたい。そう思ってペンを動かした。

『私、ドクターと一緒に、がんばるよ』

しかし、その想いとは裏腹に、彼女は唐突に人生の分岐点に立たされることになる。「そのことなんだが、おそらく君はケルシー直属の兵になる可能性が高い。」

……え……？

「君のステルス能力はアレがしている独自の調査に大きく貢献できると判断されたんだ。」

ケルシー、今日は姿を見なかつたけれど、入職試験でドクターと一緒にいた、ドクターと同じくらい偉いフェリーソンの医者のことだ。

正直を言えば、マンティコアはまだ彼女のことを信用できないでいた。

それは単に、言葉を交わした回数が少ないからなのかもしれない。だが、彼女の言動がかもし出す物静かな「万能感」もまた、少なからず他人に「引け目」を覚えさせる要因になっていることも間違いなかった。

「けれど、私たちは社員に無理強いはいしない。もしも君が望まないなら他の部署に就けることもできる。戦闘自体が嫌だというなら後方支援、諜報員でも構わない。」

……、

マンティコアは思った。この人は誰よりも自分のことを見てくれる。この人の傍にいればなんの問題もない。……だけど……、

『ううん、みんな、がんばってる 私だけ、我がまま言えない』

「…ロドスには、馴染めそうかい？」

……、

彼女は今日一日をかけて、ロドスという船の中を歩いて回った。

そこで彼女は知った。

『みんな、いい人』

不平不満は誰もが持っている。

それでも皆、ここにいたいと思つて働いている。この船に住むの人たち、そうでない人たちのために、働いている。

その中には……、

『ドクター、私は働けるよ』

——私も、誰かのために、働きたい

●おまけ その三 「ウタゲと私」

……最近になって、どうしてウタゲが私の友だちになってくれたのか分かった気がした。

ウタゲは「友だち」が欲しくて私に近付いたんじゃない。「仲間」が欲しかったんだ。ウタゲが私と話す時と、他の人と話してる時の声色が違う。

それに気付いてから、なんとなく私もそれを意識するようになった。意識する程にウタゲのことがより近い人のように思えるの。

私とは似ても似つかない性格の人だけど、時々、「姉妹」のようにさえ感じることもある。

そんな時、私は本当にロドスに来て良かったと思う。

あの荒野をあと何年、ううん、一生歩き続けたって「ウタゲ」には会えなかった。

だから私は皆のために一生懸命、働くの。

そうしたらいつかまた、私たちの「姉妹」に出会えるかもしれないから……。

ロドスで生活するようになって随分経った。

たまに私に気付いてお喋りをしてくれる人がいる。その時にウタゲの名前を出すと、彼女のことを良くも言うし悪くも言う。それでも皆の口調から、彼女のことを好きなんだとわかる。

でも、ウタゲの本当の苦しみを分かっている人は多分、ほとんどいない。

「ウタゲに悩み？ ないんじゃないかな。友だちは多いし、趣味も充実してるみたいだよ。この間なんか、海にも行ったら楽しいじゃないか。青春だね。羨ましいくらいだよ。」

そうじゃない。

そんなことじゃ私たちは癒されない。

皆にはいるのに、私たちにはいない。それはもう、どうしようもない。だからウタゲも皆に気付かれないように振る舞ってる。

ウタゲも、皆のことが好きだから。

彼女は今日も、あの気怠げな顔で笑ってる。皆のことが、好きだから。

●おまけ その四 【奇行と真実、そして魔王】

今日もドクターは元気です。

仕事の合間々々にやって来る女の子と楽しくお喋りをしている姿を見ると、まだ大丈夫なんだと私も安心します。

私だってドクターのことが好きです。ドクターにはいつまでも元気に働いてもらいたいです。

だから、私は女の子とお話をしているドクターの様子を見てドクターに割り当てる仕事の量を調節しています。

これにはかなりシビアな技術が要求されます。

何度かフォリニツクさんに怒られてしまいました。ですが、そういう数々の事件を経て、今ではその見極めも随分と達者になったと思います。

ですが最近、ドクターがオカシな行動を取っていることに気付きました。以前の「シェーシヤさん」の時とはまた違った様子です。

心配になってケルシー先生に相談に行くと、先生は冷めた表情で「ああも人が変わると、この感情をどう処理すべきかと悩んでしまうな」と言つて去っていきました。

結局、原因が何なのかは分かりませんが、あの様子を見るにどうやら心配することでもないようです。

注意して経過観察したいと思います。

数日後、私はようやくその意味が分かりました。

つい先日加入してくださったマンティコアさん。彼女が最近ドクターの部屋を出入りしている様子がカメラに映っていたのです。

……なるほど、ドクター。今日も一生懸命がんばりましょうね！

魅惑の海　　く包丁とナイフ編く　　その一

人は経験を得て成長する。

人は、人を殺して壊れていく。

ならば、戦争や殺人など引き金一つで命を奪い合う争いは大麻を吸うよりも危険な行為ではないだろうか。

どんなに訓練された戦士であろうと、彼が「人」であろうとすればするほどに誰かを殺した罪悪感^{けいけん}は彼の血を染め、血が彼の目に映る世界に水をやる。

いつしか、彼は気に留めなくなるだろう。……いいや、それと気付きもしないかもしれない。

自分の手に他人の血がついていることなど、あまりに見慣れすぎて。あまりに心地好^{こわれ}すぎて。

自分が、笑って人を殺す「猟奇殺人鬼^{サイコキラー}」になっっていることなど――、

……要するに、サラリーマンにも穏やかな休息は欠かせないということだ。

——色鮮やかな花がアナタの目を楽しませます。笑顔の艶やかな人々がアナタの心を和ませます。

私たちは世界の書籍、音楽を余すことなく取り揃えて、アナタの来訪を心からお待ちしております。

ここは、この世に残された数少ない楽園“シエスタ”。波の音がアナタの鼓動と重なる時、アナタは「安らぎ」の本当の意味を知るでしょう。

そんな宣伝文句にそそのかされて彼らはやって来た。

——シエスタ海岸線、ロドス設営海の家 “海が好き”

「皆さん、楽しんでやすねえ。」

「それだけ日々の業務にも真剣に向かい合っているということでしょう。」

強面の男二人は支給されたお揃いのエプロンを着け、簡易の調理場から海辺で戯れる同僚たちを温かく見守っていた。

夏、ロドス社員には交代で数日間のリゾート地でのバカンスが提供されることになった。

シエスタには「リゾート地」の名に恥じない様々な娯楽施設がある。

エメラルドグリーンとミルキーホワイトの海岸線。オシャレなブティックに、小粋なマスターの勤めるカフェ、さらには派手なビートで魂を揺さぶるライブ会場。

安息と興奮がふんだんに詰め込まれたおもちゃ箱、それがシエスタという観光都市だった。

「マッターホルンの兄さんは何かこの後の予定を決めてるんですかい？」

熊族の青年は燦々ウルサスと輝く太陽を見つめ、眉間に皺を寄せながら、相方の牛族フォルテに尋ねた。

「そうですね。海も悪くないですが、明日はテラいちの豊富さを誇るといふ本屋に行くうと思っっています。」

「へえ、兄さんはインドア派なんすね。」

「いいえ、私自身はどちらかといえばアウトドア派ですよ。ただ、知人へのお土産を買おうと思っつて。そういうアナタは？」

「俺ですかい？…そうだなあ、」

ジェイと呼ばれるウルサスの青年はあまり遊ぶことに関心を持つたことがなかった。

実際に遊んで楽しかった思い出はいくつもある。けれど、今の彼は養父から引き継いだ小さな店に立ち、あの町と苦楽を共にすることが一番の関心事になっていた。

「そーいや、こっつて新鮮な魚を卸してるところがあるんですよね？ちよつと覗いてみるの

も悪くないかもしれやせんね。」

「ハハツ、アナタは何処にいても探究心を忘れないんですね。感心します。」

「やめてくださいえ、俺あただ、それが自分の性に合つてると思つただけで。そんな殊勝なものじゃないつすよ。」

実際、覗いてはみるものの、本当に観光程度の気持ちでしかない。

たとえそこで良い商売相手を見つけたとしても、店のある龍門ロンドンとシエスタの間には「新鮮さ」に老化を与えるのに十分すぎる距離がある。

優秀なトランスポーターを雇つたとしても、彼の店の規模では赤字になるのが必至。

彼は商売で成功しようとも考えていない。ただ、あの街が住みやすい場所であればそれで良いと思つていた。

だからこそ「地産地消」それでいいじゃないか、というのが彼の考え方だった。

屋根こそあるものの、夏を謳うに相応しい炎天下で決して広くない調理場に並び立ちながら彼らは不満を覚えることはなかった。

時折やつて来る同僚や一般客をさばきながら、彼らは仕事の疲れを感じさせない世間話に花を咲かせていた。

するとそこへ、あからさまな仏頂面を引つさげた美女が現れた。

「辛気臭いわねえ、アナタたち。ここはシエスタなのよ？夏の海なのよ？カワイイ子の

一人や二人引つ掛けてこようとか思わないの？」

陽の光で飴色に染まる茶髪。高身長でどこか男心をくすぐるような絶妙な肉付き。わずかに垂れた目尻は線の細い眉と相まって、おっとりとしているながらもどこか挑発的な性格を垣間見せる。

数m歩けば頭に花の咲いた男たちが群がるような妖麗の狐族ヴァルホは、店にやつてくるなり冷めた目で二人を非難し始めた。

もちろん彼らは顔馴染みで、そういう不平不満も彼女にとつては挨拶のようなものだということも十分に心得ていた。

さらに、どうやら彼女はすでに少し酔っているようだった。

「そうは言いますけどねフランカの姐さん、アツシらは今日、給仕担当なんです。それに、姐さんも何か注文に来たんでやしよう？」

贅沢な休暇にスムーズなサービスは欠かせない。彼女は、店員のスマートな対応に満足そうに微笑んだ。

「カクテルと…、何か甘いもんでいいですかい？」

「そうね、コルコバードは作れる？」

「ええ、問題ありませんよ。」

白髪の強面と大柄な強面は分担し、あつという間に注文の品を用意してみせた。

その間にも美女の、美女ゆえの不満が二人にぶつけられた。

「それにしたつてよ？二人とも勿体もったいないと思わないの？海に来て、目の前には美女や美少女がよりどりみどりのよ？なのにこんなムサ苦しい調理場で、男同士で肩を並べてバカンスを過ごすなんてさ。マッターホルンなんて、そんなイケイケに仕上げてるのに相手にするのはブロック肉とフライパンだなんて。あゝ、勿体ない！」

美女フランカは性格がルーズな訳ではない。時折みせるお節介がひどく遠回しなだけなのだ。

彼女とある程度付き合いのある者であればそれは、彼女が純情な自分を誤魔化しているからなのだと気付けるだろう。

そしてそんな彼女を愛おしいと思う「隠れファン」も少なくない。

しかし、目の前のウルサスとフォルテに関しては何となくとも「ファン」ではなかった。「姐さん、姐さん、料理人てえのは特殊な人種なんすよ。アツシらはここで飯を作つてウマそうに食べてもらえる皆の顔が見られるだけで結構幸せだったりするんです。」
「そうですね。アナタの笑顔も私たちの幸せの一つですよ。」

「……女の子とお喋りするより？」

「客に男も女もありやせんよ。」

「そこ！そこがズレてるんだつて！」

夏の陽射しがそうさせているのか。どうやらこの困った客はどうあっても「恋愛の先達」になりたくないらしい。

こんな酔いどれの天使にあてがわれる「愛」が、果たして偽装表記でないと保証する会社があるかどうかははなはだ疑問ではあるが。

仕事中の二人は、求めてもない「商品」を押し売りするこの「酔っ払い」をどうしたものかと顔を見合わせた。

しかし、そういう面倒な人間には必ず一人や二人の保護者が存在するのが世の理だったりする。

「フランカ、アナタはどうしてそう人を困らせるんですか。アナタがそんな風だからアーミヤさんにも注意を受けるんですよ?」

黄金色の瞳が印象的な竜族が補導員のように慣れた調子で赤毛の天使の腕を乱暴に掴んだ。

それを振り払う天使の仕草もどこか、再放送のドラマ——いや、漫才かもしれない——を見ているかのように見慣れた光景に見えた。

「なによ、アーミヤちゃんだって色んな男引っ掛けてるじゃん。夏なのよ、リスカム? アタシだって良い思いの一つや二つ作ったってバチは当たらないでしょ?」

「フランカ…、アナタは十分、交友関係に恵まれてる方でしょう?そして、どこまで恐い

もの知らずなんですか。」

「別に、それだけアーミヤちゃんが魅力的だつて褒めてるだけじゃない。」

さすがは「パートナー」と言うべきなのか。

ヴィーヴルは相棒の注意を自分へと逸すと、スムーズに彼女を連行していった。

強面の二人はその後ろ姿を黙って見送った。

「…楽しんでやすねえ。」

「…そうですね。」

そうして海辺を見遣り、注文をさばき、無駄話を楽しみ、二人の時間は有意義に過ぎていった。

そんな、傍から見たなら強面の悪魔どもが談笑しながら鍋を混ぜ、包丁を振り回す厨房に、真正正銘の天使が舞い降りた。

「ジェイお兄さん、交代だよ。」

「お、もうそんな時間ですかい？」

現れた小柄で愛らしいウルサスの女の子は息を弾ませながらやって来た。

「随分と楽しんできたみたいですけど、大丈夫ですかい？」

「へーきへーき、グム、体力ならお兄さんたちにも負けないんだから！」

……その遣り取りに、彼は以前から疑問を感じていた。

「兄さん、どうしたんですかい？そんな怖い顔をして。」

「あ、いや、なんでもありません。少し考え事をしていただけです。」

「大丈夫？マッターホルンおじさん、今日はラストまでだよね？あとはグムがやっておこうか？」

…少女は優しい。しかし、いつだってその一言は彼をチクリと傷付けた。

治りかけたカサブタを、まるでスクラッチかなにかのように少女は容赦なく引つ剥がす。笑顔で。無邪気に。

「…大丈夫ですよ、グムお嬢さん。最後まで一緒に頑張りましょう。」

けれども自分ももういい大人だ。そんなことで一喜一憂するのは情けない。

彼の良心と常識が、稀少な天使を傷つけるまいと母親のような抱擁力のある笑顔で彼女を許すのが常なのだった。

「うん、頑張ろうね！」

……この笑顔を守ることが私たち大人に課せられた使命なのだ。

彼の要らぬ正義感が折れるのが先か。天使が羽を失くすのが先か。

その日がやって来るまで、この愛らしい天使は未来永劫、彼のカサブタを剥がし続けるのだった。

…お達者で。

友人の心境をなんとなく察した強面の片割れは、閉店まで続くであろう抗うことの許されぬ闘いに健闘を祈り、静かにその場を去った。

しばしの休息を頂戴したジエイ青年は、特に当てもなく砂浜をブラブラと散歩していた。

昼も日中、魚市には明日の朝に行くとして、今日は適当な場所で腰を落ち着けて、本を読んで過ごすつもりでいた。

「……あれは……、」

ところが彼はそこに——今のところは特に大した事のない、けれども——、彼の予定を変更させるのに十分なものを見付けた。

「……釣れますか?」

——彼女は、昨日もそこにいた。

防波堤の先端に、海鳥カモメのようにちよこんと腰掛ける狼族ウルフがいた。

クーラーボックスは小さく小さなバケツに水を張り、身の丈の倍以上ある磯竿をゆつたりと構えている。

「……」

ジエイ青年の呼び掛けにはピクリとも応じず、彼女はただ静かに釣り竿を握り、穏やかな波間を見詰めていた。

バケツの中には、底を映す濁りのない塩水が入っている。目の前の大海原と同じように、風に撫でられて揺れるバケツは小さな波を立てている。

そこには雑魚一匹入ってない。

そして、それはただの飾りだとも言うように彼女の視線はあてどなく波間に浮いている。

どう見ても魚釣りをしに来たようには見えない。リフレッシュもしくは考え事をするために竿を握っているように思えた。

でなければこんなにも、彼女と海をつなぐ釣り糸とウキに無関心なことないだろう。

「…まあ、そういう楽しみ方も釣りの醍醐味ってやつですよね。」

競泳目的のようなスタイリッシュな水着に、サンバイザーの付いた赤いコートを目深に被っている。

コートとぎんばらな髪、そこから覗く表情こそ無害に思えた。だが、青年はそこに嗅ぎ慣れた不穏な臭いがあるのを見逃さなかった。

「隣、いいですかい？」

応えが返つてこないこともなんとなくわかつていた青年は、相手の様子を伺いながら静かに腰を下ろした。

釣り竿を握る彼女の横には、真新しい竿とは打って変わって使い込まれた銚もりがある。「海、好きなんですかい？」

返事はない。青年はかまわず話しかけた。

「俺あ、好きですよ。そこに鱗りんしゅう獣たちだけの町並みがあると想像するとなんだか親近感を覚えるんすよ。」

そうすることに何の意味があるのか彼自身、よくわかっていない。

「初めて潜った時、そこは別世界なんじゃねえかって感動したのを今でも覚えてやすね。」

だが、あの物騒な町で培ってきた彼の社交性が言っている気がしたのだ。

「俺の住む町の近くにや深い川もねえから感動も一入ひとしおでした。」

そうすることで、このループスが口を開かずとも「寡黙な声」を聞くことができるかもしれない。

「だから、釣りつてのは釣れても釣れなくても楽しいもんなんだと俺は思うんすよ。……まあ、俺が潜った海もこの海も本物の海とは違うらしいですけどね。」

「……」

ループスは応えない。まるで防波堤を形造る岩の一つだと言わんばかりに。時折、横目で覗き見る限りでは彼女の表情に変化はなかった。

「それどころか——彼が一定の距離を保っているからか——、身じろぎ一つする様子もない。」

それは銚を使わないという約束の表れでもある。

ループスは手入れのしていない尻尾を岩の上に投げ出し、ただ彼と潮騒の言葉に耳を傾けていた。

「……」

ジェイ青年は話しかけるのを止めた。

当初の目的通り読書を始め、彼女に倣って潮騒に耳を傾けることにした。

「じゃあ、アッシはこれで。」

太陽がほんのりと赤に染まり始める時分、青年は名前も知らないループスに「また明日」とだけ告げて去っていった。

——翌日、

その日、非番のジェイは朝早くから活気づく市の人と鱗獣を目の保養にグルグルと

巡った後、ブラブラと散歩をしながら例の場所へと赴いた。

「どうも。」

彼女はいた。昨日と全く同じ格好、同じ姿勢で。まるで置き物のように。

早朝ではないが、それでも浜辺ではようやく「海の家」がポツリポツリと店を開け始める頃合いだった。

釣り人としては大して早い時間でもないが…、

「…ウキ、沈んでやすぜ？」

「……」

彼女は竿を「竿」として使っていないし、バケツに至ってはインテリアぐらいにしか思っていないように見える。

銚にもまた、そんな風を使う場合もあるかもしれない。

「……」

銚の刃が、鱗獣の鱗や骨ではありえないような欠け方をしていた。かといってハガネガニ相手なら逆にこんな銚ごときでは刃が立つはずもない。

彼女は間違いなく昨日、銚を使ったのだ。

昨日は最終的に気を許した彼だが、たった一つの異変が、彼の警戒心を再び膨らませた。

しかし、それは昨日とは違う形で膨らんでいた。なぜなら彼女のそれがあからさま過ぎたからだ。

「…もしかするとアツシは、邪魔、してますかね?」

彼女自身の意思でしたことなのか。それとも他人に頼まれたことなのか分からない。だが、そのどちらだとしても、あまりにも迂闊すぎやしないか?

彼女のその物腰はとても「素人」には見えない。

だとすれば、ジエイがその変化に気付くくらいの洞察力のある人間だとわかるだろうし、彼がやって来ることも想定できたはずだ。

だからそれは敢えてそこに置かれているのだと彼は思った。彼に向けた何かのメツセージなのだ。

「これ以上関わるな」それとも…、「次の標的はキサマだ」か?

読み解こうにも彼女は一切口を利かず、それどころか眉一つ動かさない。物憂げに、海を眺めるだけなのだ。

ともすれば、自分だけが見ている蜃気楼なんじゃないかとさえ思えてくる。

良い人間か悪い人間か、わからない。生きているのか死んでいるのかも、わからない。だからといってこれ以上近付くのは危険な気がする。

彼女は、彼の知っているどんな人とも違っていた。

「……」

青年は腰を下ろし、昨日の続き読み始めた。

魅惑の海　　く包丁とナイフ編　　その二

——翌日、青年はまた休憩時間に彼女の様子を見にいくつもりでいた。

結局、先日の「銚もり」が何を意味しているのか答えが出せなかった。

同僚に話せば危険だと止められるかもしれない。けれども彼には——根拠はないが——、彼女が自分に危害を加えることはない気がしていた。

彼女の正体も目的もわからないのに。

それでも彼が会いに行こうとするのは……、

——海の家 “海が好き”

「ジエイお兄さん、ごめんね！」

幼いウルサスの少女はヒヨコのように小さく愛らしい頭と、やはりヒヨコのように若々しく愛らしい声で繰り返し頭を下げた。

たとえそれがどんな問題であつても、この絶世の愛玩少女の謝罪を前にまだグチグチと文句を垂れるような人間がいるのなら、そんなスクランブルエッグのような脳みその持ち主は一度、彼女のフライパンで矯正されるべきだろう。

もちろん好青年ジエイはそんな物騒な更生を必要とするような不良な人間ではなかつた。

「気にしないでくださいえ。アツシは海や皆を眺めながら店（こ）で飯を作つてるだけで、まあバカンスつてやつを満喫してますから。」

今日、当番の予定だったグムに友人からの熱烈な誘いが掛かつたらしく、彼女はそれを断れなかつたのだという。

「気が向いたら飯、食いに来てくださいえ。腕によりをかけやすから。」

「お兄さん、ありがとう！じゃあ行つてくるね！」

流行りのヌイグルミにもケージの中の小動物たちにも真似のできない、浜辺に映えるキラキラとした笑顔を浮かべ、彼女は元気一杯に駆けていった。

「君、良いところあるね。」

相方（パートナー）の灰色のコータスが、朗らかな笑顔を青年に向けていた。

「…皆幸せだったら良いなって、俺あ思うんすよ。」

彼女の笑顔と、水平線とひと続きの青空が、そんな日もあつたあの街の風景を思い出させる。

「…それに、見た目よりも優しいね。」

「ハハ、よく言われやすよ。お前の見た目はヤクザにしか見えねえなって。」

「ああ、ごめんね！そういう意味じゃなくて…。素直に良いなって思ったんだよ。」

青年は、訂正する彼女の「朗らかな笑顔」の中に、ほんの少しの愛情が混じっていることに気付く。

「まいったなあ。俺あちよつと、褒められるのに慣れてないんですよ。」

「アハハハ！そうなんだ。でもダメだよ、周りの人が認めてるってことはそれは君の長所ってことでもあるんだから。」

「長所、ねえ……、」

彼女はとても優しく、甘えやすい笑顔をつくるのが上手だった。…と言うと語弊があるかもしれないが。

「…少し、関係ない話をしてもいいですかい？」

「もちろん。」

青年は思った。彼女の笑顔は自分の故郷ではあまり見かけない。

そして、彼女にそれを身に着けさせたであろう経験や人間関係は、防波堤のループスには縁のないものなんだろうと思った。

「サベージの姐あねさんは口下手な人と接する時、何を考えてやすか？」

「…そうだねえ、」

姐さんはほんの少し、勘繰るような目付きで俺を見たけれど、そこはやっぱり人付き

合いの上手な人で。

敢えてそこを突っ込むような不粋ぶすいなことはしなかった。

「その人にいつ、自慢のキャロットパイを食べてもらえるかを考えたりするかな。」

「…それってえのは、打ち解ける切っ掛けって事ですかい？」

「そうだね。話しててわかると思うけど、アタシもお喋りが上手って訳じゃない。どっちかって言うと、勢いに任せちゃうタイプだから。キャロットパイはその起爆剤みたいなものなんだよ。」

姐さんには人を和やかにさせる笑顔がある。

つい心を許してしまう屈託のない口調がある。

努力すればなんとかなるように見えて、それは生まれ持った才能と彼女を取り巻く気の合う仲間がいればこそ身に付けられるもののように思えた。

「もし、そいつが悪い奴だったら？」

話の筋を大きく曲げる俺の一言に、姐さんは素直に驚いていた。驚きこそすれ、それでも真剣に、俺なんかのために頭を巡らせてくれる。

だからこの人は良い人なんだ。

「…アタシね、ロドスに入ってからよく思うようになったんだけど、」

そして俺はまるで仕返しをされるように驚かされた。

「どうしてアタシたちはその人を悪い奴だつて思つちやうのかな？」

「え？」

「周りの人に迷惑をかけるからかな？それとも自分に都合が悪いからかな？もしくは、^{ルール}法律を破るから？」

「…それは……、」

俺がそう見られる時はいつだつて「人相が悪いから」つてだけだ。

誰にも迷惑はかけてねえし、ましてや町のルールを破つたことなんか一度だつてありやあしねえ。

…そう考えると、あの人がだつてそうだ。

何もしちやいねえ。ただ、俺が今までの経験で一方的にそう感じてるだけだ。

だから……、

「分からないよね。アタシも分からないんだ。考えてたらだんだん自分も悪者に思えちやう時だつてある。」

^ド董の親父も似たようなことを言つてた気がする。

「悪人を悪人だと思てる奴もやつぱり悪人なんだよ。」

あの時は親父もだいぶ飲んでたから。ただのたわ言なんだと思つてた。

それでもこうして憶えてるのは、その後親父がこうも言つたからだ。

「テメエが悪人だと蔑さげすまれても、テメエの正義を曲げるんじゃないやねえぞ。俺たちは、どんなに大したことのない人間でも、あの店で人を幸せにすることができんだ。そうだろ、ジエイ坊？」

：もしかすると、俺が「危険な人だ」と感じているあの人も、誰かを幸せにしようとしてるんだらうか？

俺が理解してないだけで。

だったら、俺がこうやって彼女の善悪を見抜こうとしていること自体がお門違いってことなんじゃねえか？

「でもさ、」

姐さんは苦笑いを浮かべながら続けた。

「ロドスには悪人っぽい人って何人もいるでしょ？」

「確かに。」

嘘か本当かは分からねえが、密売人に殺し屋、それに——俺はあんまり関わってねえが——、レユニオンって犯罪組織を足抜けした奴もいるらしい。

「それでもさ、ドクターはその人たちとだつて上手くやつてる。付き合い方は違いかもしれないけど、平等に“仲間扱い”してる。そう思うと、もしかしたら“悪人”って決めつけることが“悪”なのかもしれないって思えてくるんだよね。」

…そうか。俺はようやくあの酔っ払いの言葉の意味を理解した気がした。

それと同時に、大将はやっぱりすごいお人なんだと改めて思わされた。

直接論ささなくても、こうやって周りの人間を育てられるすげえ人なんだって。

「…姐さんはドクターみたくできやすか?」

少なくとも、俺に真似できるとは思えねえ。

なんたつて、数年前の親父の言葉を今になつて理解するような出来の悪い奴なんだから。

だけど、それは姐さんも同じことを考えているようだった。

「うゝん、難しいよね。ドクターはアタシたちよりも沢山の経験をしてきて、それでいてあんなに努力してる人だから。やっぱり一朝一夕じゃ真似できないよ。」

「尊敬してるんすね。」

「そうだね。時々あの人の皮肉にはムツとすることもあるけど、それも含めてドクターは本当にすごい人なんだよ。」

家族を自慢する母親つてのはこういう顔をするのかもしれないねえ。

それだけ、姐さんの頬は緩んでいた。

「……、」

「君はどうしてその人のためにそんなに悩んでるの?」

「え？」

思ってもみないことを言われて、思わず間拔けな声を出しちゃった。

…俺は、あの人のためなんて考えてるのか？

俺はただ、あの人が仲間に加えるかもしれないって思ったから近寄っただけだったはず。

「多分だけどね。君は優しい人だから。その人のことを大事に思ってるんじゃないかなって思ったの。」

「……」

「ゴメンね、変なこと言ったかもしれないね。あんまり考え過ぎないで。良い人間関係はいつだって自然体でいられるかどうかだから。」

その言葉を体現するように、姐さんの笑顔にはとても他人とは思えない親しみやすさがあった。

「お詫びといつちやなんだけど、良かったらアタシのキャロットパイ食べてみない？」

サベージのキャロットパイ。それはロドス内でもかなりの評判があり、パーティーでは必ずテーブルに並ぶほどののだとジエイは強面の相棒から聞いて知っていた。

それを食べれば、誰もが彼女の虜になるのだと。

「…俺あ、上手く姐さんの罠に掛かったって訳ですね。」

「フフ、そうだよ。君も今日からワタシのファミリーだ。よろしく頼むよ、ジエイくん。」
少しおどけた演技を交わし、二人は姉弟のように笑い合った。

仕事は楽しく、仲間は優しい。

なのに、俺は一日中あの人の、波に攫さらわれてしまうような静かな横顔が頭から離れな
かった。

——バカンス最終日

その日は前日のお礼だとグムが当番を代わり、丸一日、予定が空いてしまった。

「……」

せっかくのリゾート地。行きたいところがない訳でもない。普段、関わりのない同僚
と遊ぶのもいいかもしれない。

そういう数少ない機会をフイにしても、青年の足はあの防波堤に向かうのだった。

「……」

あの人は変わらずそこにいた。変わらず、海を見詰めていた。

「釣れますか？」

「……」

返事は端はなから期待してない。むしろ今さら気さくに返されても俺のほうはなが困つちま

う。

…なんだか、今日の自分はいつもと違う気がした。

妙に、落ち着かない。

「……」

次第に、沈黙まで気まずくなってきた。…俺が？人前で緊張するような上等な人間でもないくせに？

「……」

それでも青年は声をかける言葉が見つからず、ただ彼女を見詰め、想いに耽^{ふけ}るばかりだった。

俺はこの人に何を感じているんだろうか。

この人はいったい何者なんだろうか。

そして、俺はどうしてこんなにもこの人のことを気にかけているんだろうか。

勘違いされやすい面立ち。そのせいで、俺は今まで散々周りに振り回されてきた。

危ない目にも何度も遭ってきた。

…この人は今までどんな人生を送ってきたんだろうか。

「……」

だからって、どうすればこの人のことを知ることができる？

俺にとつての「キャロットパイ」って何なんだ？

彼女はそこにいる。釣りもしない竿を握り、ただ静かに揺れる波間を見詰めている。
…そして、彼女からは「血」の臭いがする。

それは青年の生きる世界とは違う臭い。それでも青年は、ほんの少しの決心をする。
彼女に見た「悪」を掻か潜潜^{かく}潜^くつて、「彼女」へと歩み寄る。

「ほんの少し、俺の話をしてもいいですかい？」

「……」

彼女は何も言わない。けれど、今の青年にはそれが彼女なりの「肯定」なのだと思えるようになっていた。

そんな都合のいい解釈をしている自分に気付いた時、これは「聞いて欲しいこと」「じゃない。「口したいこと」なんだと、青年はぼんやりと思った。

「龍門^{ロシメン}の下町で生まれ育ったからか。俺あ、ちつとばつかし血の気が多いんです。」

青年は海を挟んだ向こうにある、遠い、遠い生まれ故郷を想った。

容易に浮かぶ雑多な景観。聞こえてくる物騒な遣り取り。そして、口に入れると生きてることを実感する温かな飯。

それらが自分を育てたんだと、ロドスに来て——町の外に出てみて——彼は痛感し

た。

「そこで俺は飲食店やってて…。俺一人で回せる小さな店ですけどね。…それで、迷惑な客と揉めたことがあるんです。まあ、龍門じゃあ大して珍しいことでもないんです。」

無銭飲食をキメようとした不良ども。町の人に手を上げるゴロツキ。

どいつもこいつも碌ろくでもねえ奴らだった。

だから俺もあまり深く考えずに手を出した。

「俺は、誰かのために思ってやったつもりでいたんです。」

そうだ、それこそ俺は誰かのために想って、俺の育った町を護るためにやったんだ。

悪人がどうのという話以前の問題だと思った。

「それなのに、董の親父は俺を叱りつけたんです。『どんなに腐った奴が相手でも手を出せばテメエの負け』なんだそうさ。」

実の親は早くに他界した。あの魚団子を作ることしか能のない、冴えない人だけが、俺の家族だった。

そんな頑固で、屁理屈で…、そこで人情味のある董さんは、一度だって俺の拳を褒めたことはない。

「ジエイ、お前は筋が良い。団子の味も悪くねえ。だから、もつとシツカリしな。」

董さんはあの下町を愛してる。仲間も、町並みも、店の味も。

それなのに、町のためと思ってる俺を褒めてくれないのはなぜなんだ？

董さんはいつも俺に理解できねえ言い回しで俺の道理すじを迷わせる。

「…アツシには未だに理解できませんがね。」

それが、今の俺が出せる精一杯の答えだった。

俺には悪たれどもを殴ることができる。町の誰かが血を流さずにすむ拳が付いてるんだ。

だったらそれを使うのが筋つてもんじゃねえのか？目を逸して魚相手に包丁突き立ててる方が町のためだつてののか？

「テメエに奴らを倒す力があるつて？自惚うぬぼれるなよ。ねえよ、そんなもん。」

だったら俺が追い払ったゴロツキはなんなんだ？俺に感謝の言葉を掛けてくれたあの人たちはなんなんだ？

「だったら、そいつらがテメエの団子を喰って金を払ったことがあるか？」

「…はい？」

その時ほど親父が理解できない時はなかった。だからこそ出た、心の底からの声だった。

すると親父はそんな俺の顔を見て大笑いをしやがった。

「ハツハツハ、そらみろ！テメエの力なんざまだまだそんなもんよ。拳を振り回してい

い気になつてただけの小僧つてことさ。」

「……じゃあ、親父はどうなんでえ。親父だつてアイツらに金を払わせたことなんかねえじゃないですかい。」

あの時、もしかすると俺は言つちやならねえことを言つちまつたのかもしれない。

それまで威勢の良かった親父が、どこか昔を懐かしむような、何かを諦めたような顔で俯いた。

けれど、俺の前だつてことを気にしてか。すぐに顔を上げて言つた。

「そうさ、だから今はお前も店に立たせてるんだ。俺は出来だったが、ジエイ坊、お前は違う。磨けばこの町一の魚団子屋になれるんだ！」

笑つてたが、目尻が薄つすらと濡れているのに俺は気付いてた。

「だから、地道に頑張れよ。」急いては事をし損じる「だ！」

そしてまた、親父の都合のいい教訓が一つ増えた。

……そうだ。親父からもこの人と同じ臭いがしたんだ。

うまく「鱗獣^{りんじゆう}」で誤魔化した気であるのかもしれないねえけど、「鱗獣」の臭いと「人」の臭いを間違えるほど俺の鼻はバカじゃねえ。

だからなのかもしれない。俺がこの人のことをこんなにも考えてしまうのは。

だからなのかもしれない。昔話をし終えて逆にモヤモヤした俺は彼女にこんなこと

を聞いていた。

「アンタはその力、正しく扱えていやすか？」

「……」

尋ねて返ってくるのはいつだって、押しでは返す波の音だけ。まるであの街の雑踏ざつとうのように。

…変わらないんだ。

この海も龍門も、親父もこの人も…、そして俺も。

誰も、誰かを護ろうと思つて生きちやあいねえ——護りたくても護り方がわからねえでいる——。

皆、与えられた命を自分なりの「屁理屈」の中で飼い殺しにしてるんだ。

—— チガウ

「……え？」

俺にはそう聞こえた。

重なる潮騒しおさいに合せて、不意に彼女が振り向いた。初めて向き合う黄金色こがねいろの瞳。

海を見詰め続けたからか。ほんの少し「青」が映り込んでいるようにも見える。

彼女の視線は真つ直ぐで、目を逸らす気にもなれない。

綺麗だ。

だけど、恐ろしい。

その形容はどちらも——親父の言う——俺の弱さを突いているように感じられた。

「お前の拳は強くない」

だったら、彼女の目が語った（俺が勝手にそう感じたただけだが）、

「違う」

それはどういう意味なんだ？

また、俺あその言葉を理解するのに何年も費やさなきゃならねえつてのか？

考えている内に彼女はまた海へと向き直り、竿の先を眺め続けていた。

「釣りをしない殺し屋」は何も語らない。

まるで「海」が釣り糸を伝って彼女の体の中に染み込むように。

特に意味はない。けれど俺は彼女が今、何を感じているのか想像してみることにした。

腹に山程の鱗獣を抱える海。青い血そのものが心臓となつて潮流を生み出し、腹の中で鳴る命の音を全身に響かせる。

そこに細い、細い一本の釣り糸がひっそりと漂う。

糸はしなるカーボンの竿を通つてリールへ、ロッドへ、ナイフがよく馴染なじみそうな手

へ、そして一人の女性ループスへと辿り着く。

海は彼女を腹へ引きずり込まず、彼女も海を陸おかへと打ち上げない。だから二人は一つに見える。

一見、無意味な時間で、空虚な関係に見える。

ただどこか、その一体感には無二の「平穩」を感じる。

親父があ町の求めているもののように。

だとしたら、俺や親父があ町の店で「町」の一部になれてるんだとしたら、親父は俺にゴロツキたちのための「釣り糸」になれって言ってるのか？

アイツらが「町」に溶け込めるように？

だとしても、どうすれば良いかなんてわかりやしねえ。

団子を作ってるりやなんとかなるってのか？ そんな訳わけやあねえだろ。

……でもそれは、「拳で語り合おう」として今の俺も同じだおんな。まかり間違つてスポ根展開でも起きなけりやあ、俺も奴らと何ら変わんねえ。

—— だったら、そいつらがテメエの団子を喰つて金を払ったことがあるか？

「……」

悩みが解決した訳でもない。妙案が浮かんだ訳でもない。

けれど、青年の中で確固たる「目標」が一つできた。それだけで何か胸のつつかえが

取れた気がした。

「…お、引いてやすぜ？」

「……」

彼女の竿は動かず、ただただ穏やかな潮風に身を任せていた。

——翌日、ロドス本艦、社長室

そこに、幼さの残るしかし、どこか大人びた表情を見せるコータスの少女と防波堤のループスがいた。

「お疲れ様です。どうでした？」

コータスの少女は上司と同じく書類仕事に追われながら、やはり上司と同じように余裕のある声で尋ねた。

「問題ない。ロドスは、安全。」

ループスは与えられた任務に対し、簡潔に答えた。

ロドスは国籍を持たない。そんな彼らが各国でいくつもの仕事を抱え、熟^{こな}していけば自ずと何かしらの組織と軋^{あつれ}轢を生むことがある。

防波堤のループスはそういった者たちの動向を伺う意味も含めて、休暇中の社員たちの安全を護る任務を受けていた。

彼らのバカンスを邪魔しないよう、あくまでも陰ながら。

「ただ、アイツに、見つかった。」

「アイツ？ 誰ですか？」

少女は手を止め、顔を上げた。

「…ジェイ、」

防波堤のループスはロドスの船員を全て把握している。

護るべきもの、殺すべきものを判別するために。

対して、防波堤のループスの正体を知るものはほとんどいない。

同じ船に乗り、同じ未来を目指していながら。

「そうなんです…。」

だからこそ少女は彼女の本音を知りたかった。

彼女は今、幸せなのか。

「…仲良く、なれました？」

「……」

ループスの表情は変わらない。…けれど、

「ジェイさんのお店、龍門の三番区画にあるそうですよ。」

「……ありがとう、アーミヤ。」

「フフ…、どういたしまして。」

会いに行くかどうかは分からない。けれど、その言葉が彼女の口から聞けたことが何より嬉しかった。

ケルシー先生は彼女を過酷な役職に就けた。

ただどそれは決して彼女を「群れ」から孤立させるためじゃない。

結果的にそうなってしまうことを先生は後悔しているけれど、先生もドクターもせめて彼女がここを「家」のように感じてくれればと願っている。

「…？ 銚で何か取ったんですか？」

「…これ、服、乾かすのに、便利。」

ループスは小さく笑った。

魅惑の海　　くヒーラの受難編く　その一

砂浜を白に染める陽射し。

俺には少し暑すぎるようにも感じられるが、浜辺で子どものように戯れる同僚たちを見ればそれがどんなに素晴らしいものか私にでも理解できる。

大の大人があんなにはしゃいで……。

故郷でこんな光景を見たことは一度だつてない。

日頃、過酷な任務の連続で俯うつむきがちだつた彼や彼女があんなに笑っている。

……本当に、素晴らしいことだ。

「そこ……そこがズレてるんだつて！」

そんな楽園の中で赤毛の令嬢が声を荒げている。

「なによ、アーミヤちゃんだつて色んな男引つ掛けてるじゃん。夏なのよ、リスカム？アタシだつて良い思いの一つや二つ作つたつてバチは当たらないでしょ？」

…俺は、どちらかといえば姦かしましい女性ひと性はあまり好まない。

「……」

…ハア。まったく、こんなところに来てまで私は何を考えているんだ。

そもそもこんな失礼極まりないことを考えるのは俺の性分じゃなかったはずだ。それがどうしてこんな風になってしまったのか。

それはおそろく……、

「お前もそろそろ所帯を持つてもいい頃合いなんじゃないか？」

旦那様にそう言われたからなんだろう。

旦那様の言葉全てを真に受けるのは良くない。あの方の忠実な部下であるならなおのことだ。

その辺りでどうにも融通が利かないから俺はまだまだ未熟なんだ。

「じゃあね、ジエイお兄さん、あとはグムたちに任せて！」

「……」

グム、彼女は良い子だ。献身的で努力家だ。それに、愛嬌もある。

料理に関しても、素朴ながら自分の味を持っている。経営学を学べば店を構えても問題なく生きていけるだろう。

いいや、彼女には看板娘の気質もある。きつと繁盛する。

だからぜひともその気持ちを忘れずにいて欲しいと心から——

「……マッターホルンおじさん、どうしたの？グムの顔に何か付いてる？」

……心から願う。

「いいえ、何でもありませんよ。さあ、忙しくなる前に残りの仕込みもやってしまいたいです。」

知らない間に私は、他人に「未来を望む」ほどに年を取ってしまったらしい。

だが、それも悪くはない。それが人間の運命さだめだというのなら、私もその一員なのだと誇るべきだ。

私たちが共に働くのはこれが初めてではない。

ロドス本艦のカフェテリアでも何度となく顔を合わせてきた。

ロドス職員は本艦に勤めている者だけでもゆうに200人を超える。入院患者を含めれば、ピーク時の忙しさは街一番の人気店を超えるだろう。

それに比べれば「海の家」規模の仕込みなど――扱うメニューもいつもの半分以下なのだから――、私たちにかかれば一時間と掛からないのは分かり切っていたことだった。

「思ったよりも早く片付きましたね。」

「そうだね。」

それでも私がそう言ったのは、グムが褒めて伸びるタイプだと知ったからだ。

ところが、彼女は私がそれを言葉にするよりも先に思いもよらないことを口にした。

「だけどね、 Gum、 思うんだ。 マッターホルンおじさんと Gum だからここまでできるんだよ。」

「え？」

それは、共に困難を乗り越え切磋琢磨してきた仕事仲間への、心からの^{ねぎらい}の言葉だ。

……温かい。

ならば私も彼女にこの気持ち伝えるべきだろう。そう思い、口を開くが、彼女の言葉はまだ終わっていないかった。

「他の人たちもそうだけど、マッターホルンおじさんはいつも Gum のことを見てくれるでしょ？ だから凄くやりやすいんだ！」

…彼女に悪意はない。それは彼女の^{あどけ}の邪気のない笑顔が十二分に証明しているじゃないか。

だとすればそれはもう、そのまま受け入れるしかないように思う。…いいや、思わせられる。

「マッターホルンおじさんがいてくれれば Gum、なんだってできそうだよ！」

その笑顔は、無駄に人を虜^{とりこ}にしてしまうのだ。

…そこで一つの懸念^{けんねん}が生まれる。

「そう言っていただけだと私としてもやり甲斐がありますね。 Gum お嬢さん、これから

もよろしくお願いします。」

一層、意識しなければならぬ。

「うん、よろしくね！」

……私は、まともな大人だと。

——午後三時

「お客さん、減ってきたね。そろそろ交代で休憩しよう？」

「そうですね、では私はまだ平気ですのでグムお嬢さんからどうぞ。」

「そう？じゃあ、そうするね。帰りにお土産持つてくるから楽しみにしててね！」

それを言うなら「差し入れ」ですよ。

そう言う隙もなく、彼女は少女らしい——その瑞々みずみずしい太ももの躍動感ほまさに若さ

の証ともいえる——軽やかな足取りで真っ白な砂浜へと旅立たつた。

「……」

私は何をそんなに落ち込んでいるんだ？

たかが1数時間会えないだけで……!?!いいや!それ以前の問題だ!私は何を考えて

いるんだ!?!恥知らずにも程があるぞ!!

私はイエラグ国の御三家シルバーアッシュ家に仕えるヤーカだぞ!?!

年端としはもいかぬ少女に欲情するなど罪深いにも程がある！

恥を知れっ!!

「…だ、大丈夫ですか、ヤーカの兄貴？」

「!?」

反射的に、俺は声の主に包丁ナイフを突き付けてしまった。それが主人の護衛中であればまだ納得できるだろう。

だが、今の私は「海の家」の店員だ。たとえそれが極悪非道な面構えをしたシラクーザ人だろうと、店先にやって来た客に出会い頭に刃物を突き付けていい理由にはならない。

…自分の顔が青褪あおざめていくのが手にとるように分かる。

場合によっては始末書を書かねばならない。私がシルバーアツシユ家の汚点になる

……、

そんなことは、断じて許されない！

かくなる上は首を切つて——、

「あ、兄貴、なにを!？」

やって来た客は店先から身を乗り出し、私の利き腕を押さえ込んだ。…その素早い身の熟こなしには、覚えがあった。それに、

……兄貴？

——とにかく私はひどく混乱していたらしい。やって来た客の顔すらろくに覚えていなかった。

自分が愚だったことに変わりない。だが、不幸中の幸いだったのは、それが身内だったということだ。

「……ヴァイスか？……すまん。」

「兄貴、いったいどうしたっていうんですか!？」

普段、甘い表情を保って感情を読ませない義弟が、額に汗を浮かべ取り乱していた。

「いや……、少し朦朧もうろうとしていただけだ。慣れないこの都市の暑さにやられてしまったんだろう。気にしないでいい。」

「……」

ヴァイスは同じシルバーアッシュ家に仕える従者で、私よりもよほど思慮深く、旦那様はもとより私たちを陰ながら支える出来た従者だ。

そんな気心知れた身内なのだが、さすがにこの奇行には虚を突かれたらしく、目を丸くして私を見詰め、固まっていた。

「……本当に、大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない。じきに慣れるだろう。」

「…もし兄貴さえ良ければ、手を貸しますよ?」

「……」

何に對してか明言しないところがコイツの強かきでもある。

…いいや、旦那様からよく学んでいると言った方がいいか。

「いや、いい。それよりも腹は空いてないか?何か一皿作つてやろう。」

「え、いいんですか?では、お言葉に甘えて頂きます。」

今の俺は、この「氣の迷い」を適切に言葉にできるような精神状態じゃない。

火と刃物を扱っている方がよほど世の秩序を乱さずにすむ。

油の跳ねる音が、ベーコンの焼き具合を語り掛ける。

滲み出す脂が、炒める野菜の表面を艶やかにしていく。

……よし、悪くない仕上がりだ。

「…とところでだな、ヴァイスよ。」

「はい、何でしょう?」

ロドスで学んだ簡単かつ栄養のある一皿を義弟に振る舞い、私は慎重に尋ねた。

「お前は、結婚はしないのか?」

「んんっ!?ゴホッゴホッ!!」

やはりまだ気持ちは落ち着いていないのかもしれない。自然な流れで聞いたつもり

だったが、義弟は喉を詰まらせて派手に咳き込んでしまった。

「ど、どうした！大丈夫か!？」

「い、いえ、すみません、大丈夫です。…さすがにその質問は予想していませんでした。」

「……妙か？」

「いえ、全然。ただ、兄貴にそんな素振りがなかったので突然どうしたのかと思っただけです。」

「…実はな、」

私は義弟に事の発端^{ほったん}を話した。

旦那様の言葉…。初めは遠回しな解雇通知なのかと不安に思ったが、そんなことはなかった。

旦那様は純粹に私の人生を考えて下さっていただけだった。

「お前にはまだまだ私の下で働いて欲しいと思っただけだ。」

その言葉を頂けただけで大きな不安は拭えた。ただ、拭った後に小さな不安が残っていた。それだけの話なのだ。

「なるほど、それで兄貴は何に困っているんです？」

「…具体的に、嫁探しとはどうすればいいものかと思っただけ。」

…私ははぐらかしてしまった。

決して、この男を信頼していない訳ではない。これは私自身の…、尊厳の問題なのだ。それに、

「兄貴は、結婚したいんですか？」

ともすれば、私は旦那様やロドスの汚点になつてしまふかもしれない。

「…わからん。だが、旦那様が案じて下さっているのに無下にする訳にもいかんだらう。」

「そうかもしれないませんが、恋人ではなく、家庭を持つというのであれば、兄貴にも相応の意思や決意が必要なんじゃないかと思えますよ。でないと…。」

「でないと？」

「後で痛い目を見る？ことになるかもしれない。」

恋人がいないという点では同じ立場にいるはずが、なぜか義弟の言葉には妙に重みがあつた。

「…お前は、ロドスに来てから少し変わったな。」

考え方が俺より老けたんじゃないか？

「ええ、自覚はあります。なにせ、ここには色々な人がいますから。」

ロドスには本艦の他にも各国に支部があり、彼らも報告のために時折本艦に帰投することがある。

そんな彼らも含めれば、ロドスはまさに人種と文化の坩堝るっぼといえるだろう。

不思議なことに、それだけ多くの人間がいながら既婚者はあまりいないようだった。ヴァイスはその社交的な性格柄、そういう多くの人間が抱えている私情を自然に耳にしているのかもしれない。

「ところで、なんですけど……、」

「どうした、改まって。」

その慎重な物言いが、いやに俺を身構えさせた。

いや、これは俺に心の準備をさせるコイツなりの親切心なのかもしれない。

「ヤーカの兄貴が悩んでるのって、本当にそれだけなんですか？」

「んぐっ!?ゴホツゴホツ!!」

……コイツ、さっきの仕返しのももりか？

いいやそれよりも、感の鋭い奴だとは思っていたが……。もしくは俺に不自然なところがあったのかもしれない。いや、この際それはどうでもいい。

問題は……、

「お前は、口が堅いか？」

「…兄貴の知つての通りです。」

「……俺は、」

俺は、俺は……、

「…犯罪者なのかもしれん。」

俺は自分の中で起こっている不穏な心の動きを包み隠さず話した。

幸い彼女はここにおらず、客足もまばらで厨房の影に隠れてしまえば話の腰を折られることもほとんどなかった。

「兄貴、極論は時に自分を追い詰めます。まずは慎重にならないと。」

その言い回しはドクターに似ているな。ヴァイス、お前は本当に良くできた従者という他ない。

「つまり？お前はまだ私があともな人間だと信じているということか？」

「兄貴、それが極論の一つかもしれませんよ。」

「…どういう意味だ？」

「ボクは世の中の常識を全て把握しているという訳ではありませんが、ボクたちが知らないだけで同性愛を認めている地域もあるんです。」

義弟は知見も広い。世界^{テラ}全土の文化を許容するロドスでそれをさらに広げたのかもしれない。

…だが、お前の言うそれはつまり……、

「お前は、やはり私が年端もいかない少女に恋慕していると言いたいんだな？」

「兄貴、年は少し待てばいいだけの話です。兄貴がボクに想いを寄せているよりは随分とまともな感情だとは思いませんか？」

「ヴァイス、これはそういう話じゃない。今現在、私がグムお嬢さんに恋心を抱いているかもしれないということが

問題な——」

「あつ……、」

まるで「びつくりチキン」のような間抜けな声を出したかと思えば、義弟の顔色はみるみる青褪めていった。

「な、なんだ。なんて顔をしているんだ。」

その目は確かに、何かを捉えていた。

「いったい何が——、」

振り返ってはならないという悪寒と、たちの悪い冗談なのだと思う義弟を期待する私
がせめぎ合い……、それでも恐る恐る、促されるままに振り返った。

「へえ、アンタが恋ねえ。」

……そこに、ウルサスの将軍が立っていた。

「ズ、ズイマーさん……。」

彼女は笑っていた。

笑っていたが、笑っていないかった。

「冬將軍」などという悪辣あくらつな異名を持つ彼女は、グムと一緒にロドスに救助されたウルサス学生自治団のリーダー。

当然、彼女とも繋がりがあある。

むしろ、彼女の保護者と言ってもいい。

よりにもよって、この人に聞かれてしまうとは……。

「ズイマーさん、一つお願いがありますっ！」

私はともかく、旦那様に迷惑をかける訳にはいかない。ここは土下座をしてでも口止めしなくては！

そんな私の浅はかな行動は彼女にはお見通しだったらしい。

私の嘆願を先回りして会話の主導権を奪い取ってしまった。

「安心しろよ、誰にも言わねえさ。アンタとは知らねえ仲でもねえしな。ただよ……」

口調は変わらず穏やかだが、眉間には見逃しようもない警告の筋がクツキリと刻み込まれている。

「アイツはまだガキだ。本気だつてんならアイツが大人になるまで手を出すんじゃないやね

え。いいな?」

「ズ、ズイマーさん、私は——、」

「…イイナ?」

この女性ひとは本当に学生なのか?

その鬼気迫る眼力はアークトス様さえも上回るのではないかと思えた。

「ハ、ハイ……、」

私はその気迫に怖気おじけついて渴かわいた返事をし、残りの「言い訳」は生唾と一緒に飲み下すことしかできなかった。

「ああ、あと、アタシは何にもしねえからな? そういうのはアタシの領分じゃねえしな。」

「ハイ……、」

「そういうこつた。まあ、ガンバンな。あ、焼きそば3つな。」

釘を刺されはしたものの、想像していた以上にアツサリとした警告だけで見逃された。

注文した焼きそばを手にすると彼女はサツサと友人たちの待つ浜辺へと帰っていった。

だがどうだ?

だんだんと、彼女の背中が溶け込んでいくその白い領域が、有象無象の悪魔たむろが屯する

魔窟に見えてくるじゃないか。

「まあ、彼女なら心配することもないでしょう。それより兄貴…、ヤーカの兄貴、大丈夫ですか？」

「……」

なんのことはない。やはり私は罪深い人間なのだ。

「ヴァイス…、今まで世話になったな——、」

「あ、兄貴！早まつちやダメです！」

その後、義弟は俺から半ば乱暴に包丁を取り上げると、人生についてコンコンと説教をするのだった。

「…二人ともどうしたの？」

二人分の飲み物を持って帰ってきたグムは怪訝けげんな顔で私たちを見詰めていた。

「なんでもありませんよ。ただ、兄貴が熱中症になっっていることも気付かずに皮むきをして手を切ったものですから少し反省してもらっているだけです。」

「お、おい……、」

人一倍心配性の彼女にそんなことを言えばどんな反応をするか明白だろうになぜわざわざそんなことを言うんだ。

それともお前はそうやって私を試しているのか？

「え、本当?!グムに診せて!」

予想した通り、彼女は救急箱を手早く持つてくると慣れた手付きで、熱心に手当をしてくれた。

「はい、できたよ。でもグムには応急手当しかできないから。今日はもう、グムに任せておじさんはホテルに戻ってちゃんと治療を受けて。」

「だ、大丈夫ですよ、グムお嬢さん。ヴァ…、クーリエが少し大袈裟に言っているだけですから。」

「おじさん、病人はみんなそう言うんだって、グム、知ってるよ?」

いくらか抵抗したものの、彼女の気遣いは段々とエスカレートしていき遂には、言うことを聞かねば暴れ出すような雰囲気を感じ取り、私は渋々ヴァイスと一緒に厨房を後にした。

「あ、忘れてた。マッターホルンおじさん、これあげるね。」

「これは?」

戦場で酷使した彼女の小さな手の中には、ワックスで加工されているかのような艶やかなエメラルドグリーン（かいか）の巻貝があった。

「砂浜を歩いてたら見つけたの。キレイでしょ?マッターホルンおじさんにはいつもお世話になってるし、シエスタの良い思い出にもなると思っただ。だから、あげる。」

「…ありがとうございます。本当に、 Gumさんは優しい方ですね。」
「えへへ…」

——よく見れば、その笑顔は「じゃがいも」のように見えた。

果樹や他の野菜では枯れてしまうような寒冷地でも耐え忍び、凸凹になりながらもスクスクと成長することを止めない。

蒸^{ふか}したそれを一口頬張れば、家族、友人、世話になった故郷を思い起こさせる。

そんな笑顔だった。

彼女はこれかもロドスにいる限り多くの戦場、多くの病と向き合うことになるだろう。

それでも彼女はその笑顔を忘れないのだろう。

もしも彼女の隣に立つ男がいるのならそれは、同じ顔で笑える人間こそが相応しいに違いない。

……それは、俺ではない。

何がどうこうなる前に俺は、自分で勝手に抱えた問題を自分で勝手に解決させた。

「…いったいどういうつもりだ?」

ホテルまでの道すがら、俺は義弟の真意を尋ねた。

「どうもこうもありませんよ。あんな事をしておいて、僕にはあれ以上彼女と仕事ができとは思えません。」

「……すまない。確かにあれは正常な人間の行動じゃなかったな。」

するとヴァイスは顔を綻ばせ、溜め息を吐きながら俺の背中を優しく叩いた。

「少し疲れているんですよ。バーに行きましよう。ボクも付き合いますよ。」

「…そうだな。最近はお前とあまり腹を割って話せてないからな。いい機会かもしれん。」

その日の夜、私たちは私たちだけの幼い頃の失敗談で笑い合った。

魅惑の海　くヒーラの受難編く　その二

——受難……もとい、バカンス2日目

どこまでも広く、透き通る青い水溜り。

遮るもののない水溜りの上を駆ける潮風に頬を撫でられれば磯の匂いが特有の爽快感を誘う。

空は水溜りの色を映し、水溜りは太陽の輝きを返す。

時折り飛沫^{しぶ}く水が口に入ればほんの少し、この世の世知辛さを感じさせる。

楽園と呼ばれる都市、シエスタはそんな世界の一面を教えてくれる場所だった。

「いやあ、マッターホルンさんは飲み込みが早いですね。イベント大会に出場していないのが勿体ないくらいですよ。」

ロドスが社員に用意した特別休養期間2日目、「海の家」の当番もない私はこの都市で人気を博しているスポーツ「サーフィン」というものに挑戦することにした。

海の危険性も何も知らない私たちはまず、インストラクターを雇って安全な遊び方を学ぶことになったのだが、なかなかどうして。思ったよりも早く海のあれこれに馴染む

ことができました。

「特に体幹がずば抜けてますね。だいたい初めての人はボードの上に立つだけで数日かかるんですよ。」

「ハハハ、仕事上、安定しない足場で踏ん張ることも多いからですからね。それが生きたのでしょう。」

初めこそ「水上」という経験のない足場に困惑したが、数度試してみればそれは新雪の上で格闘している感覚に似ていると気付いた。あれよりも抵抗が少ないものだと思えば体は自然と海を受け入れていた。

「え、マッターホルンさんの勤める会社って製薬会社なんですよね？」

「ああ、私はおおむね警備や護送を担当しているんです。ロドスは貴重な人材や薬品を扱っていますからね。」

「なるほど、じゃあ他の方々もそうなんですね。いやあ、みなさん運動神経が良くて羨ましいです。」

私以外にもこの「物珍しい遊び」に興味を示した同僚数人が同じようにインストラクターの称賛を浴び、楽しげに海面を滑っていた。

「キャアツ！」

……ただ一人を除いて。

「……ああ、また落ちてる。」

今日、彼女の悲鳴を聞いたのはこれで17回目だ。

彼女に付いているインストラクターも苦い顔をしながら溺れる彼女を支え、一からレクチャーし直している。

私のインストラクターは同僚を憐れみ、私に助け舟を求めるように尋ねてきた。

「あのキャプリーニーの方は目が不自由なんですすよね？」

「……はい。」

聴力に関しては視力以上に悪い。補聴器は付けているが海は見た目以上に多くの音が入り乱れている。おそらくインストラクターの言葉も正確に聞こえていないだろう。

彼女の性格上、話しかける人間の言葉を無視できない。そちらに集中力を割いてしまいうから余計に自分の体がおろそかになってしまう。

……分かり切ったことだった。

初め、彼らは彼女の身体的障害に気付けなかった。通常の客だと快く迎えてくれた。

一方の私たちはそれを知っていたが、「遊びなんだから、危ないって分かったら諦めればいいじゃない。そのための講習でしょ？」などと軽い気持ちで彼女の参加を許したのだ。

「こう言うてはなんです、海はそんなに生易しい遊び場ではありません。身体に不自

由があればそれだけ命を落とす危険性は高まります。」

「そうですね。身をもつて実感しました。」

海は想像以上に危険な場所だ。例えるなら宿主のいない巨大なアリジゴクのようなものだ。不慮ふりよの事態に陥おちれば、たとえ幾度も窮地きゆうちを掻かい潜くぐってきた熟練の天災トランスポーターでも生きて帰ることは叶わない。

潮に飲まれ、窒息を待つしかない。

「でしたらマッターホルンさんから彼女に助言していただくことはできませんか?」

「……」

だが、彼女は私なんかよりもよほど聡明で、なおかつ自分のハンデをきちんと理解している人だ。

そんな彼女がどうしてあそこまで意固地にこの「遊び」に取り組んでいるのか。私には理解できなかつた。

初めは私も——彼らに言われるまでもなく——それとなく促すつもりだった。

しかし、彼女が必死にボードにしがみつく姿を見ていると、どこか「人生の壁」に立ち向かっているように思えて口出しできなくなってしまうていたのだ。

……だが、それもここまでなのだろう。

「そうですね。これ以上はアナタ方に迷惑をかけてしまうかもしれません。私がなんと

か説得してみましよう。」

他意はない。いくら「遊び」といえど、「死」は単なるゲームオーバーじゃない。そして、彼女はこんなところで命を落として良い人ではないし、その責任を彼らに負わせる訳にもいかない。

私は意を決して彼女の下へと向かった。ところが――、

「まったく、見てられないわ。」

「フ、フランカさん？」

足取りの重い私が駆けつけるよりも早く、あの姦し……、饒舌な彼女が場の険悪なムードにさらに容赦のない一言で切り込んでいた。

「アナタ、教え方が下手なのよ。」

「な……、私のせいなんですか？」

「あら、耳も悪いのかしら？ そう言ってるのよ。だいたい、これがアナタたちのお仕事なんですよ？ 一辺倒なマニュアルをなぞるだけなら素人のアタシにだってできるわよ。」

「素直さ」、それは彼女を語る上で「美貌」の次に並ぶ要項のように思えた。

その傍若無人な物言いに彼らが腹を立てない訳がない。

「お言葉ですが、サーフィンは五感を使った海との一対一の勝負の世界なんです。研ぎ澄ませていないと海は私たちの足元を掬ってバカにし続けるだけなんです。そんな必

須の感覚も持たない人にどうやって戦い方を教えるつて言うんですか？そうでしょう？」

彼らの言い分はもつともだ。サーフィンに限らず、スポーツの全ては健全者の五感が暗黙の条件ルールと言える。

それを無視した私たちに非がある。

だというのに——、

「アハハ、えらく上からものを言ってくれるじゃない。自分だつてその域に達してないアマチュアのくせに。」

「フランカさん！」

ダメだ、保護者のいない彼女に社会的対応なんて期待できそうもない！

「だつて、そうじゃない。だから大会にも出られなかったんでしょ？それに、この程度のハンデでこんなに楽しい遊びを教えられないでよくもインストラクターなんて名乗れたものね。いつそのこと“役立たず”に改名したら？だつてそうでしょ？私たちが汗水流して手に入れたお金を払わせておいて、ちよつとイレギュラーな客だからってこんなに簡単に匙さじを投げてみせたのよ？私たちの戦場でこんな奴が味方にいたら敵より先に始末したくなるわよ。」

「なつ、言わせておけば！」

オブラートの欠片もない彼女の暴言が、多くの顧客を満足させてきた彼らのプライドに火を点けた。

今にも殴り合いが始まろうと……、いいや、彼女であればたかがサーファーの拳ごとき軽々といなししてしまうだろう。

：いやいや、そういう話でもないだろう！

そこへ、新しい遊びに夢中になっていた他の同僚たちが「仲間」の表情に敏感に反応し、彼らを自分たちの日常へと引きずり込もうと意気を振りまいてやって来た。

「なんだよ、ケンカか？オレサマが全部燃やしてやろうか？」

「ハハハッ、いいねえ。海の上でケンカするなんて粋じゃねえか！」

「キアーベ、ブローカ、やるのは構いませんが、ここがシラクーザじゃないことをくれぐれも忘れてはいけませんよ。」

これは彼らの運命なのか？こんな時に限ってなぜこんなにも血の気の多い連中が集まったんだ！

「待て、全員、一度頭を冷やすんだ！お前たちはロドスの社員なんだぞ？ドクターたちに迷惑をかけるつもりか!？」

叫んでみたものの、そもそも彼らの拳には「常識」に傾ける耳はついてないのだ。

唯一届いた銀髪のループスも、オカシなことを言っているのは私の方だとも言おうよ

うに冷めた表情で淡々と返すのだ。

「ダメですよ、マッターホルン。コイツらにとつてケンカはサーフィンときして変わらないんですから。止めるなら飼^{ドク}い主^{ター}か権力者^{ケルシー}を連れてくるか、拳で黙らせるしかありませんよ。」

なんて奴らだ！非常識にもほどがある！

「だったらお前も手伝え！」

「嫌ですよ。そもそも僕たちの身内をイジメたのは彼らでしよう？だったらケジメつてものを付けてもらわないと。」

ダメだ、コイツが一番「シラクーザ人」が抜けてないじゃないか！

慣れたとはいえ、海上で不良共^{コイツら}全員を取り押さえることもできない。

万策尽きたか。そう思ったその時、

「止めてくださいいっ！」

「……」

彼女は決して陰気な人間ではない。だが「快活」と言えるほど周囲の目を引くような人でもない。そんな彼女がこんなにも通る声を出せるとは誰も思わないだろう。

それだけ今の状況に嫌気が差したのだろうか。それとも……、

「この人たちの言うことは間違つてないじゃないですか。それに、私たちは困ってる人

たちを助けるのが仕事なんですよ？こんなもの、ダメじゃないですか。こんなことをしないで、私が別の遊びを見つければいいだけの話なんですから。」

浮かべる苦笑いは、仲間想いな同僚たちを安心させようと耐えているのが目に見えて分かった。

「だから、ケンカしないでください。……お願いです。」

けれども今の彼女に、それを最後まで耐え抜くだけの気概はなかった。

「……お前はそれでいいのかよ？負けたままで悔しくねえのか？」

思うところがあるのか、ロドスの放火魔は彼女の言葉に耳を傾けていた。しかし、その表情を見て納得することができなかった。

「止めとこうぜ、お嬢。しよっぱいケンカほど後味の悪いもんはねえぜ？」

「……行きたきや行けよ。オレサマは逃げねえ。」

ガラの悪い方の赤毛のヴァルポが珍しく空気を読んで宥め^{なだ}ようとしたが、それでも放火魔は引かなかった。

「サリアならオレサマが何を言っても助けてくれる。」

かつて、檻の中で「苦しんでいた自分」を知っているから。

「……しよっぱがねえな。お嬢の納得いくまで付き合っつてやるよ。」

誰も引かない。

穩便に事を済ませようという気がない。

誰もが自分たちの生きてきて得たモノを信じている。

「で、そつちのお嬢ちゃんは何か言うことはないのかよ?」

「……」

小柄なキャプリニーは俯うつむき、唇を動かした。すると――、

ボンツ!

突如、目の前の海面が天高く水柱を上げた。

「アツッ!お嬢、何すんだよ!」

「オレサマじゃねえよ!」

水飛沫は収まる様子を見せず、むしろ海面からは湯気が立ち昇り始めた。

「アツ、アツッ!なんだこりゃあ!?熱湯じゃねえか!」

「おい、どうにかしろよ!」

「俺に言うなよ!おい、アオスタ!…あつ、あの野郎っ!」

唯一の知恵袋に頼ろうと振り返ると、袋と筋トレオタクは二人を置いてすでに遙か遠くまで泳いで逃げていた。

「お、おい!何しやがる!?!オレサマは逃げねえって言ってるだろ!?!」

「俺だつてよくわかんねえけど、どうやら俺たちはお呼びじゃねえってことだよ!」

困難な状況に陥った時、彼はいつだって自ら深みに嵌まる^はような行動を取ってきた。「アオスタのケツを追え」それが幾度となく失敗を繰り返してようやく学んだ、彼にできる唯一の解決法だった。

キアーベは放火魔の首根つこを掴んで全速力で友人たちを追いかけた。

小悪党のお手本のような撤退を見送りながら、お上品な方の赤毛のヴァルポは口を開けて事の成り行きを見守っているインストラクターたちにできる限り優しく助言した。

「アタシは術師でもなんでもないのでこれって結構体に負担かかるのよねえ。」

「え？」

「……まったく都合のいい耳ね。親切なお姉さんは今の内に逃げた方が良いって言うてるんだけど、分かるかしら？アタシたちはあと二日滞在してるからその間は家に籠^こもつてやけ酒でもなんでもしてればいいわ。あの子たち、三歩歩けばケガの理由も忘れるおバカだけど、顔を合わせたら何をしでかすかわからないおバカでもあるから。」

「……」

彼女の言いたいことはわかった。

けれども自分たちにもまだまだ言い足りないことがある。

だが、彼女が危機的状況を回避してくれたことには違いない。それを理解できるだけの理性はある。

それらのもどかしい気持ちを表すように、彼らは一様に唇をキュツと引き絞っていた。

「それともまだ、アタシたちプロに歯向かいたいのかしら？」

自分たちは空気を読んだ。

だのに返ってきたその言い草に、我慢できなくなった一人が口を開いてしまう。

「アンタらがそんなだから感染者のイメージが悪くなるんじゃないのか？」

「そうね、まったくその通りだわ。アナタ、賢いじゃない。だけど、アナタたちの小さな器のせいでアタシたちみたいな厄介者に絡まれるのよ。要するに、今回の件は痛み分け。そういうことにしない？」

それも実のところ、彼女が仕組んだ我々、感染者と健常者の間で交わされるべき相互理解の一步だということに彼らは気付いていない。

「……」

「アナタも、それでいいのよね？」

感情的に『力』を使ったせいか、ボードの上で息を切らしているキャプリーニは力なく頷いた。

俺は、それら一部始終をただただ黙って見守っていた。

魅惑の海　くヒーラの受難編く　その三

楽園での楽しみ方を教えてくれるはずの講師サフリーマンたちは消化不良の表情のまま浜へと引き返していった。

「大丈夫ですか?」

尋ねるまでもなく、キアーベたちの前で気を張っていたエイヤファイヤトラさんは今、ボードの上で力なく俯うつむき、完全に意気消沈した顔をしていた。

「まったく、どいつもこいつもどうして人生を上手く生きようとしなのかしらね。あそこでアナタがもつとあの人たちの同情を引くようなことを言ったら丸く収まったかもしれないのに。」

「:ちよつとフランカさん、それはあまりに失礼ではないですか?」

昨日は酔っていたからかと思っていたが、シエスタで会う彼女の様子はどこか普段と違って全体的にトゲトゲしいように思えた。

「楽園」などと大仰に謳いながらその実、結局は普段と変わらない人種を相手しなきゃならない名ばかりのリゾート地が彼女を不機嫌にさせているのかもしれない。

言っていることは正論なのかもしれない。だが、その言葉遣いはあまりに暴力的なの

だ。

そう指摘しようとする、俺は思わぬ反撃を受けた。

「アナタはそうやって正義面をしていれば満足なの？」

「な!?それはどういう——、」

「どうせアナタも、皆を護ること」は、誰も傷つけさせないこと」だとも思ってるんでしょ?」

「その何が悪いんですか?」

「だったらアナタのご主人さまはどうしてアナタみたいな護衛を付けてると思ってるのよ。」

「……言ってる意味がよくわかりませんが、企業戦略の中には暴力で訴えてくる者もいます。俺はそんな恥知らずな輩やからから旦那様を護るために傍そばにいるんです。」

言いながら俺は不安を覚えていた。彼女の口から聞くべきでない「真実」を耳にするかもしれないと。

それは、的中した。

「はあ…、やっぱりわかってないのね。企業のトップなのよ?…ねえ、よく考えてみて。頭がキレル人間か、力に訴える人間か。どっちのイメージで繕つくろっていた方がより先方は本音でやり取りをしてくれるのかしらね。」

「それは……、」

常々、疑問には思っていた。

旦那様は仮にも、かのカジミエーシユの騎士競技で名を馳せた「黒騎士」の手ほどきを受けた人だ。

それほどの実力を持つていながら、これまで悪漢を前にして堂々と対峙することはあつても、手を出したことは数えるほどしかない。

旦那様にもしものことがあつてはならない。「護衛」が俺たちの仕事なんだ。だからあまりそのことには触れないようにしていたが……、

俺たちが手こずっていたとしても、事態が収束するのをただただ見守っていることがほとんどだった。

それはつまり……、

「アナタの大事なご主人さまは暴力で傷つくこと」が怖い訳じゃないの。悪いイメージが定着して他の企業と良い関係を築けなくなってしまう。不利益を被りたくないだけなの。」

……俺たちの役目は「護衛」ではなく、「身代わり」スケープゴートだったということなのか？

私は今、とても情けない顔をしているのだろう。

明らかに彼女の方が、より近い場所で、より長い時間を共に過ごしてきたはずの私よ

りもよほど旦那様のことを理解しているように思えたのだ。

「たまにアナタみたいな人を見ていて怖くなるのよね。信じて気を許したと思つたら目を逸^そらしている間にアタシを巻き込んで大ケガさせてくれるんじゃないかって。」

「……」

「するとアナタたちは決まつてそんな顔をしてこう言うのよ」そんなつもりはなかったんだ”つて。そんな当たり前のことを言つて何が許されるのかしらね？」

とても…、自分の考えが幼子^{おきなこ}の感想文のように思えてとても悔しく思えた。

けれどもそれを口にはいけない。

俺は辛うじて彼女への攻撃を踏みとどまることができた。

「別に悪役でもいいじゃない。誰かがほんの少し傷つくだけでスツパリ解決するならそれでいいじゃない。それで護りたいものが護れるならむしろ本望、本懐^{ほんかい}つてもものじゃないの？」

…だから彼女はあの講師たちにあんな態度を取つたのか？

対等な「悪」であれば血を流さずに場を収められると踏んで……。

だから傷心の彼女にも辛く当たるのか？

自分が「悪」であるほど彼女に非はないと感じさせるために……。

「……返す言葉もありません。」

年は俺よりも若いはず。だというのに、まるで曼殊院まんじゆいんの長老連中からの説教を受けているかのようで、ただただいたたまれない気持ちになるのだった。

「それで、結局アナタはどうするの？ たかが遊びだからってここで止めちゃうつもり？」
唐突に矛先を向けられたエイヤファイヤトラさんはビクリと肩を震わせ、しばらくの間、沈黙で答え続けた。

そして、ようやく動き出した唇は整理のついた気持ちをゆっくりと、一つひとつを確認するように語りだすのだった。

「……私は……、ロドスで研究をさせてもらってるだけでも十分過ぎるくらいに幸せなんです。先輩……、ドクターみたいな凄い人からのご指導してもらえて、幸せなんです。」

「だから？」

「あんまり欲張つたら罰バチが当たるかもしれないじゃないですか。」

彼女はまたあの苦笑いを浮かべ、やり過ぎそうとした。

彼女もまだ子どもなのだと思えた。そんな曖昧な返事は却かえって彼女を怒らせるのだと思つてもみないのだ。

「それは何？ リターニア語で“ふおう巫王の呪い”って意味の鉄板のジョークか何かなの？」

「え？」

「もしもリターニア人が皆、アナタみたいな人間だったらその呪いの正体もたかが知れ

てるわね。」

エイヤファイヤトラさんの故郷リターニア国では魔法の研究を至上としており、「巫王」は名実ともにリターニア国の頂きに立つ人物だった。

しかし、いかに最強最悪の術師といえど「永遠」に打ち勝つことはできなかった。

仔細は知らないが、「双子の女帝」により「巫王」は討たれ、その際に「巫王」はリターニア国に逃れたい呪いをもたらしたという。

フランカはそんな彼女の出生を揶揄したのだ。大人気もなく。

「フランカさん、そもそも私は目が……、」

「だから何よ。いいえ、そんなアナタだからこそ、死ぬまでにあと何回、海に来るなんて機会があると思う？」

身体的な問題だけではない。彼女がロドスに提供する治療の対価は、日々刻々と変化する。火山活動と天災の関連性を導き出すというもの。彼女には限られているのだ。

そもそもプライベートな時間というものが彼女には限られているのだ。

「アタシの、BSWの同僚たちはアタシと違ってクソが付くくらい真面目ちゃんばかりだけど皆、他人の指図なんて撥ねのけて自分の生き方を貫いているわよ。でも、だからこそ、あの子たちはどんな時も真面目を貫いていけるの。」

「……」

「アタシの言ってる意味、分かる？」

「……アタシに、できるでしょうか？」

「……もう一度言うわよ。アタシの言ってる意味、分かる？」

フランカの態度はどこか強制的で、しかし一方では「他人の人生は他人のもの」というような不干渉を貫いているようにも見える。

それでも後輩を育てた経験があるからか。挫ける少年少女を見捨てられないのだろう。

「……私、やってみます……、」

おずおずと、しかし彼女は意を決して口を開いた。けれども、そんな彼女をフランカはまだ認めなかった。

「嫌々ならしない方がいいわ。これじゃあアタシたちもあの能無したちと変わらないもの。」

……アタシたち？

確かに彼女の助けにはなりたいと思っている。フランカの考えが立派だということも理解できる。

だがなぜ、そこで俺が含まれるんだ。

俺の小さな不満を余所に、彼女は憑き物を振り払うかのように頭を大きく振り、火山

やデスクの前でするのであろう挑戦的な表情でフランカに向き直った。

「私、やりたいです!」

「…じゃあ、仕方ないから手伝ってあげるしかないわね。」

その表情を心待ちにしていただろうに。フランカはあからさまにそれを表に出すことはなく、逆にそれをごまかすようにシラけた顔のまま、ジョークを利かせて俺を呼びつけた。

「ちよつと、その海の家の人。暇ならゴムボートを一つ借りてきてくれない?」

「…フツ、畏まりました。少々お待ちください。」

他意はない。だがふと、俺はフランカの立ち居振る舞いに、手間にかかるスキウース様を根気強く論ず^{さと}ラタトス様の姿を見た気がした。

それは俺にささやかな郷愁と親近感を覚えさせるのだった。

十数分後、俺とフランカ、そしてエイヤファイヤトラさんはゴムボートに乗り、ギリギリ浜^がが見える辺りまで沖に出た。

「さ、じゃあ始めましょうか。」

「フ、フランカさん、少し沖に出すぎじゃないですか?」

ここまで出てくれば当然、海底を肉眼で確認することはできない。さらに当然なことに、足を大地につけるといふ人類全てに約束された基本の姿勢も許されない。

この状況に少なからず、彼女は怯えているようだった。かく言う俺も、若干の不安を覚えている。

陽はまだまだ高いというのにお夜の帳とまりを降ろしている「海」という底知れない世界が、俺たちをどう扱うのかと考えると、自由過ぎる妄想が不要な感情までも刺激してくるのだ。

「そう思うのが素人さんの浅はかなところよ。」

フランカはそんなことお構いなしといった様子で、むしろ新しい世界を楽しむように答えた。

彼女の観察眼いわく、より浅瀬である方が波の上下は大きくなり、初心者が水上に立つという訓練には不向きなのだという。

そういう意味で、ここは波が最も穏やかな場所らしい。

「なるほど……。」

さらにゴムボートであれば多少、不安定ではあるものの、サーフボードよりも海面に接する面積が大きく、転覆することもほとんどない。

転覆がもたらす「失敗」という精神的負担を軽減させた良い手法だった。

「あとは慣れよ。」

「…ハイ、頑張ります！」

俺は意気込む彼女に聞こえないようにフランカに耳打ちした。

「なにも水上にこだわらなくても、浜でボードに立つイメージトレーニングをしても良いのでは？」

どんな場所、状況においても、「立つ」という行為に対して「姿勢」というのは重要だ。逆に、姿勢によって重心の位置を把握してしまえばより、この練習も^{はかど}捗るのだと思っただのだ。

しかし、俺がフランカをさしおいて「最善の答え」を出すということにはなかった。

「女の子を喜ばせるコツ、知りたい？」

その一言は「余計なお世話です」と言わざるを得なかったのだが。

「あの子は何も、本気でサーフィンがしたい訳じゃないの。」

「……なるほど。」

そこまで言われてようやく自分の頭の硬さに気付かされた。

要するに、彼女は純粋に「海」を体感したいんだ。

研究の一環とまでは言わないだろうが、自然環境に関心のある彼女は、この世界の「未知」に足を踏み入れてみたい——この点で言えば実に研究者らしいのだが——のだ。

「ダメよ、そんな口ポットみたいに体を強ばらせたなら。大丈夫、安心して。海は何も怖くないわ。」

「…ハイ……、」

「ほら、もつと視線を上げて。これがアナタの見たかった景色でしょう？」

フランカはとても器用な人だ。言い方は悪いかもしれないが、他人の気持ちを誘導することに長けている。

それは、仕事上立ち向かわなければならぬ「困難な挑戦」に何度も打ち勝ち、培ってきたからなのだろう。

おおよそ一時間後……。そう、この挑戦自体はそう困難なものにはならなかった。

だがそれは逆に、彼女に「困難」が必ずしも高い壁を伴うものではないと教える良い機会になったのだと思う。

「……フランカさん、マッターホルンさん。私、立ててますか？」

「ええ、まるで海の女神様みたいよ。」

重い身体障害を患う少女は今、少しずつ朱に染まっていく陽の光に照らされ、その微笑みを何倍にも美しく輝かせていた。

「海って……、とても凄いとこなんですね。」

今、彼女の耳に信頼する仲間たちの言葉は届いていない。

彼女は今、その足で潮流の躍動ステップを感じ、その耳で——潮騒しほさいや海鳥の合唱ではなく——撫でる潮風や乾いてヒリつく塩水を感じている。

そして、その盲^めしい目で海に沈む果てしなく大きな炎を感じていた。

五感において人よりも劣る彼女は、人とは違うものを胸に描いているに違いない。

「…バテイさんも、連れてきたかったな……、」

「バテイって?」

「いつも私のお仕事に付き合ってくれる人です。火山地帯はとても危険な場所なのに、いつも嫌な顔ひとつせず手伝ってくれます。とつてもお世話になってるから、なにかお土産を用意できないか考えてたんですけど……、」

たった今覚えたばかりの感動が、陽の光と共に海底^{みなぞし}に吸われていく。

「困難」を乗り越えたばかりの彼女に再び無力感が込み上げてくる。

すると、赤毛のヴァルポは前置きもなく身の上話をし始めた。

「……アタシの同僚にはね、頼んでもないのにお節介^{めせつわ}を焼く目障りなヴィーヴルがいるの。」

…だんだんと、彼女の言葉遣いが頭の中で翻訳されるくらいには耳に慣れてきたようだった。

「ただの里帰りなのに、しつこく突つかかってくるの。」

おそらく、それもウソなのだろう。基本的に彼女は照れ性なのだ。

「だからその時のアタシは知ってる知識をフル活用してあの子をからかってやったの。」

その光景が目には浮かぶようだ。

ネチネチと陰湿に攻めてくるかと思いきや、唐突に鈍器で後頭部を殴ってはまんまと「激情の渦」に叩き込むのだ。

けれども、彼女はなにも好き好んで人をバカにしている訳ではない。

「でもね、ある人に正直に話してみるように勧められて…、それで話してみたらなんだか必死に隠してた自分がバカみたいに思えちゃってね。」

彼女は「悪役」でいることに慣れきっているのだ。一番伝えたい「それ」が相手に届かなくても構わないとでも言うように。

「……じゃなかった。そうしたらあの子はね、いつものしかめっ面でアタシをバカンスに誘ってくれたの。」

自分のことだからか。知らず識らず脱線していく自分を止められなかったらしい。

彼女にも人並みに「感情的になる」のだとわかるとより彼女への親しみが湧いた。

「アタシが言いたいのはね、エイヤ。本当にアナタとバティさんが信頼し合ってるなら、どんな贈り物でも大事に受け止めてくれるってこと。」

「……」

「だからね、ただ伝えてあげるだけでいいのよ。アナタが今日感じたものを。どんな小さなことでも。」

今になって俺は、夕陽は彼女にも平等に差しているのだと気付いた。

「そしたら次の瞬間にはきつと、アナタも彼も笑い合ってるわ。」

「……はい、そうですね。」

そう答えると彼女はとても満足した顔でまた、海を見遣った。

まるで、今まさに大切なパートナーへの贈り物を選び、煌びやかなラッピングしているかのよう。

結局、サーフボードに乗ることこそ叶わなかったものの、それでもエイヤフイヤトラさんは目的を果たした表情で砂浜に足を下ろした。

「じゃあ、うちの保護者様が探してるだろうから。アタシはここで失礼させてもらうわね。」

「はい、今日は本当にありがとうございました！」

フランカはこれまでの天邪鬼な言動が全てウソのように柔和な笑みを浮かべ、エイヤフイヤトラさんの頭を撫でた。

「好きなことをして生きていいの。それが多少、周りに迷惑をかけてしまうようなことでもね。」

「……」

エイヤファイヤトラさんはフランカの顔をボンヤリと眺めた。

「…なに？」

「……いいえ、なんでもありません。」

「ウソ、どうせお母さんみたいだとか考えてたんでしょ？」

「え、なんでわかつちやっただんですか!？」

とても、心温まる光景だった。

旅先の知人友人から受け取る一枚のポストカードのように。

「明日はなにか予定があるんですか？」

感動的なシーンを見せられたからか。それとも彼女自身の魅力のせいか。気付けば私は彼女をエスコートするような文言を口にしていた。

「フフ……、」

けれども彼女はそんな軽薄な男にひよいひよいとなびくような女性ではない。彼女は遅^{たぐま}しく、そして美しい人なのだ。

「明日は溜まった調査データをまとめようと思ってるんです。」

「え、仕事、ですか？それはまたどうしてですか？」

「…人に言われたからそうするっていうのもなんだか恥ずかしい話なんですけど。なる

べく仕事を溜めないようにしたいんです。もつと言えば、プライベートな時間をもつとつくりようと思っんです。」

「…なるほど。確かにそれは大事なことです。ですが、大事なことと言うならもう一つあることを忘れてませんか？」

「え？」

「アナタの周りには助け合える仲間がたくさんいるということですよ。」

「……フフ、そうですね。」

「!？」

それを期待して言った訳じゃない。…いいや、そこまで期待して言ったつもりは微塵もない！

不意に、私の手を取ると、彼女はあのゴムボートの上で見た天使のような笑顔で私に感謝の意を述べた。

体温の高い彼女の髪はすでに乾いていて、潮風に乗ってフワリと香る彼女の匂いが、私の脳内を瞬く間に夕陽色に染め上げてしまった。

「エ、エイヤファイヤトラさんっ！」

「へ、へえ!？」

妙な声が出た。それにつられて彼女も声が裏返っていた。

気付けば私は彼女の小さな肩を握りしめていた。それはまるで、獲物を逃さんとする熊のように。

彼女の瞳も、それを物語っていた。

……いや、私は彼女を怖がらせたんじゃない！……いやいや、それ以前に私はいったい何をしているんだ!?

体が言うことをきかない！全身から吹き出る汗がいつそう私を混乱させていく！

「エ、エイヤ、ファイトラさん……、私は……、」

……それはもはや、本能としか言いようがない。

腰を落として彼女の視線に合わせると、今まで出したことのないような色気づいた声色で彼女に迫っていた!!

「イ、イヤアアツ!!」

……その後、彼女が私の前から消えるまでの記憶が一切ない。

じんわりと、頬が熱い気がした。

ある人の声が背後から聞こえて初めて、私は意識を取り戻し、自分の犯した罪の重さにハッキリと気付かされた。

「よお、アンタって奴はそんなに見境がねえ奴だったのか？」

“冬將軍”、真夏の海に舞い降りた本物の熊は、不敵な笑みを浮かべつつ、岩礁よりも固く握りしめられたその拳でもって、私の意識を深い、深い海の底へと叩き込んだのだった。

沈んでいく意識の中、俺はボンヤリと思った。

俺は、今日という日を、決して忘れないだろう……、

魅惑の海　くヒーラの受難編く　その四

俺が彼女に出会ったのは本当に偶然だった。

「ご注文は何になさいますか？」

彼女は町中のハンバーガーショップの店員にニコヤカに尋ねられていた。

俺はファッシュョンに疎い^{うと}方だが、彼女の装いはどちらかと言えば最先端の部類に入るのだろう。

夜のシエスタの海辺に佇めば、白い砂浜の妖精と見間違えてしまうかもしれない。

そんな彼女が昼日中に立てばまさに「妖精」と例えたように、その白い髪と肌は陽の光に溶け込んでいくように見えるのだ。

唯一、彼女の体としては異質なほどに黒く太いワニ族^{ワニ族}の尻尾が彼女の存在を確固たるものにすると同時に、彼女の美しさを改めて際立たせる。

そこに「田舎臭さ」は微塵も感じられない。道行く人々も、その洗練された姿に見惚れるものも少なくない。

ところが……、

次の一言が、世俗的なハンバーガーショップに現れた一羽の美麗な妖精の幻想を完全

に打ち砕いてしまうのだった。

「あ、甘いものが食べてみたいです!」

「……甘いものですか……。」

少女々々した言動と顔付きが、瞬く間に彼女を「妖精」から親とはぐれてしまった「迷子」につくり変えてしまった。

「……はい、甘い物は、ありますか……。」

それにしてもまた、随分と漠然とした注文だな。最近流行りの喫茶店には呪文のような注文を要求するところもあるが、ここはごくごく一般的なハンバーガーショップだ。メニューにある商品名を一つ上げるだけで事足りる。

……もしや、文字が読めないのか?

おそらく俺と店員は同じ考えに至ったのだろう。百貨店のサービスカウンターよろしく、なんとか迷子かのじよの要望に沿えるようサイドメニューのシェイクやアイスを読み上げては勧めていた。

「あ、い、いえ……、このマイルドヤンキーバーガーのセットを、一つ、ください。」

……なぜそうなる?

俺は一瞬思考が乱れたが、相手はハンバーガースタッフ歴数十年というような完璧な笑顔と明るい声で彼女の注文を受け付け、厨房へと通した。

そんなクルーたちの活気に気圧されたのだろう彼女は数歩下がって俯いてしまった。「大丈夫ですか？」

「うえ？あ、ご、ごめんなさい。…あ、アナタは……。」

正直、俺たちは艦内で一度、二度顔を見たという程度の、本当の意味での顔見知りでお互いの名前もろくに知らない。

「はじめまして、私はロドスでお世話になってるマッターホルンと言います。アナタは確か、ガヴィールと同郷の方でしたよね？」

それも同僚たちから聞いた話でしかなかったが。自分のことを知っている人間が声をかけてきたことに余程安心したのか。

思った以上に元気な返事がかえってきた。

「は、はい……ト、トミミと言います。私は、ガヴィールさんの相棒です！」

ガヴィールはサルゴンのジャングルの出で、ロドスでは古株の医療オペレーターだ。彼女と同じアダクリスのトミミは——その愛らしい容姿からは信じられないが——、故郷では一族の族長を務めていたらしい。

「二人で町を歩いているんですか？」

すると今度は急に落ち込み、泣きそうな声で答えた。

「はい…、本当はガヴィールさんと観光するはずだったんですが。ガヴィールさん、急な任務

が入ったらしくて帰っちゃったんです。」

ガヴィルは「エリートオペレーター」でこそないが、その働きは遜色ないと周囲からも認められている。

医療分野においてはもちろん、戦闘に関しても彼女の右に出るものはそうそういない。

さらに言えばロドスにおいてプライベートや休暇を返上しての勤務を求めることは異例で、それだけ彼女がロドスにおいて重要な役割を担っているということなのだ。

「彼女はとても優秀ですから。仕方ないと言ってしまえば仕方ないのかも知れませんね。」

トミミのことをあまり知らないためにどう言葉をかけるべきかわからず月並みな慰めになってしまった。

だがはか図らずもそれは、彼女の性格を知るのに十分な言葉だったらしい。

「そ、そうですね！ガヴィルさんはとても優秀だから仕方ありませんよね！」

「……トミミさんはガヴィルが好きなんですね。」

「え、え……っ！」

全く否定する気のない、赤面する彼女がとても眩しく見えた。

そんな遣り取りをしている内に俺とトミミの注文したものを合わせて袋に入れたス

タッフが私たちの下へとやって来た。

「マイルドヤンキーバーガーセット、ウルトラロッカーバーガーセットお待たせしました！」

「……トミミさんさえ良ければ一緒に食事をしがてら、彼女の話聞かせてもらえませんか？」

「え、い、いいんですか?!」

どこか、あのスタッフの思い通りに操られているような感覚も否めないが。そして、昨日までの自分の失態を思えばこれは回避すべき事態なのかもしれないが。

しかし、こうも彼女の目を輝かせてしまった以上、俺もそれなりの責任を取るべきなのだろうと覚悟を決めざるを得なかった。

……まあ、嬉しそうに語る同僚と食事をするのは悪くはない。

その軽率な判断は、俺がまだ彼女の性格をよく理解していないがために下したものだ。だった。

その時の俺は、耳に「ガヴィル」という名前のタコができるのだろうかというぐらいの気持ちで彼女を誘ったのだが、そのタコは腕がドリルにでもなっているのか。「ガヴィル」という四文字の物量でもって鼓膜を突き破り、脳に蓄えた「知識」を根こそぎ踏み潰していくのだった。

話の内容を理解する間に次の「ガヴィル」が、また次の「ガヴィル」が押し寄せ、俺の脳みそは遂に「ガヴィル」の抑揚だけで全てを理解しなければならぬのだと悲鳴を上げ始めていた。

そこには俺の想像していた、女性特有の同性への憧れを語る熱っぽくもいじらしいだけの姿はなかった。

どちらかと言えば、オリジムシやハガネガニを熱愛するバナラやビーンストークのような、あるいはかつては映画俳優だったというエファイターの熱狂的なファンのウユウのような、もしくははその言動の9割が口からでまかせではないかと思わせるコンビクシヨンのような……。

トミミは、それらの珍妙な人種に見劣りしない語り口調を見せたのだった。

「——マッターホルンさんはどう思いますか？」

「え？」

「ガヴィル語」を解説することに忙殺されていた俺の脳みそは、突如として投げかけられた問いに怯えるかのように顔を引き攣らせた。

しかし、トミミはやはり内向的な性格なようで、これだけ私にガヴィルへの「好意」を見せつけておいて、いざ俺とキャッチボールをしようとすると途端に声を窄め、俯き、上目遣いになるのだった。

「私、ロドスの人はとても優しいし、親切な人ばかりだと思います。ですが…、」
そこまで言うとうとうとう、俺と会話していると証明できる「上目遣い」までもが下を向いてしまった。

「時々、ガヴィルさんは」医療部よりも戦士の方が似合ってる。って言葉を聞くんです。」

「……」

それは間違いない。

アダクリスの全てがそうとは言えないが、ガヴィルに限って言えば間違はなく「アーツ」や「医療器具」を使って患者の容態を診るよりも、その「拳」でもってそこにいる者たち全員を説き伏せる方が何倍も性に合っているように思える。

それだけ彼女の腕つぷしは——私ですら敵わないほどに——確かなのだ。

「私も、ガヴィルさんには戦士ティアカウとしてアカフラに帰ってきて欲しいし、大族長になって欲しいと思っています。」

かつてのトミミはそのための手段を選ばなかった。

族長を決める祭典の時期にガヴィルの里帰りを催促し、ロドスの飛行ユニットを撃ち落とし、「ガヴィルウィル」という群れをつくってまでガヴィルのロドスへの帰艦を阻止しようとした……らしい。

それ程までに彼女のガヴィルへの執着心は強い。

「でも、私、ロドスに来て、ロドスで働くガヴィルさんを見て、自分がワガママを言うてるんだって気づいたんです。」

俯きながらも彼女の目は輝きを忘れない。その視線の先には常に憧れの人が立っていると錯覚させるほどに。

「患者さんを診てる時のガヴィルさんは闘ってる時には決して見せない顔をするんです。闘ってるガヴィルさんもカッコいいんですが、そこには私の知らないガヴィルさんがいて…、なんだかそっちの方が本当のガヴィルさんに見える時があるんです。」

太陽は輝きを忘れない。だがそこに雨雲が走れば途端に、俺たちの目は彼女の輝きを見失ってしまう。大地を慈しみ、俺たちに恵みを与えてくれる同じ「空」であるにも関わらず。

「私、ガヴィルさんには自由に生きてほしい…、自由なガヴィルさんが一番カッコいいんです。」

彼女の一面であるということを知らないのは俺たちだけで、彼女は常にその向こうで輝き続けているというのに。

「…だから彼女の一面ばかりを見ている人が許せない、と?」

「え?」

もしかしたらトミミは今、自分が語っていることにすら気付いていないのかもしれない。
い。

ならばそれは間違いなく彼女の心の声なのだ。

「アナタはガヴィルを〃型にはまった何者か〃にしようとする周りの人間が疎ましいと思っているんじゃないですか？」

すると彼女はさらに内気な性格を發揮し始め、「あ…、えつと…、そんなこと…、ないです」とタイムラプスで枯れていく花のように顔も声も萎しおれていった。

……ふむ、どうしたものか。

食後のホットコーヒーをひとくち口に含み、その芳醇な香りで「ガヴィル語」で荒らされた脳みそを整える。

……「悩み」というのは得てして単純である場合が多い。

確かに、誰かが何かを成すのに「他人」という存在は厄介である場合も多い。だが……、

「では、トミミさんはガヴィルのどういうところが好きなんですか？」

すと思うた通り、「ガヴィル」と「好き」という言葉に反応したようで彼女は幾分か澆はたら刺とした表情を取り戻し、さらに「…え？今さら？」というような困惑もしてみせた。

「…自由で、カッコいいところですか……。」

「そうでしょう?」

「え?」

「悩み」は時に、単なる「栓」であることもある。

そこに問題なんか初めからないというのに、自分の手でそこに壁を設け、一人で藻掻もがいて、一人で疲弊してしまうこともあるのだ。

これもまさにその一例なのだ、カフエインで自我を取り戻した脳細胞が辛うじてこれらの膨大な「ガヴィル語」の中から導き出してくれた。

「あのガヴィルが、他人に何か言われたくらいで生き方を変えるような軟弱な人間に見えるますか?」

「……!?…いい、いいえ! ガヴィルさんは、とても強い人です! 誰にも負けません!」

「であれば、アナタはそんなガヴィルとガヴィルの魅力に気付いていく周囲の人間を傍観していればいいんですよ。」

「……」

今、まさに「栓」の存在に気付こうとしている彼女はポカンと口を開けて俺の言葉に聞き入っている。

「先に気付いている者の特権とでも言うんですかね。 案外、気持ちいいものですよ? 少しずつ理解者が増えていくのを待つというのも。」

「な、なるほど!」

それもまた無意識なのだ。足下に転がっている「栓」が何だったのかも分からず、自分が何に悩んでいたのかすらもわからなくなるといいうのも人間の面白いところなのだ。

この問題は自明の理とも言える。

なぜなら、幾人の心無い言葉に囚われているその時ですらも、トミミの瞳に「太陽」の輝きは陰らなかつたのだから。

それはもう、天気予報士など必要ないくらいに。

「マッターホルンさん!」

「はい?」

「も、もう一軒回りませんか?」

「ハ、ハイ……、」

というよりも、俺は天気予報士として失格なのかもしれない……。

迂闊うかつにも俺は、トミミというサルゴンの辺境で生きる女性かがやきの生命力を、侮あなどっていたんだ……。

——その後、「海が好き」の交代時間ギリギリになるまで、件の言語くたんを操る凶悪なタコに襲われ続け、辛うじて息を吹き返した耳も脳も——今日もまた——海の深淵へと

誘いざなわれてしまふのだった。

魅惑の海 おまけ その一

●おまけその一 「ダイヤモンド★クオーラ」

海辺のリゾート地には宝石が無数に存在する。

無論、言葉そのままの意味ではない。それこそ、安易に感傷に浸ろうとするロマンチストたちが使う、ごくごくチープな比喻でしかない。

その一つ、そして最も美しい輝きを放つダイヤモンドの中に今、名もなき小さなボールが吸い込まれていく。

「ホーームラーン!!」

……なぜなんだ。

「ふむ、さすがはロドスのオペレーターだな。なかなか手強い。」

なぜ、こんなにも人の心を惹きつけて止まないエメラルドグリーンを海の前にして
……、

「ゲームは始まったばかりです。気にせずいきましよう。」

足の裏を優しく包む真珠の絨毯を踏みしめながら……、

「……ねえ、これってホームランボールは全部、魚たちにプレゼントするシステムなの？」

なぜ、俺たちはベースボールをしているんだ?!

「おーい、シテロカちゃん、ガンバレ〜!」

急ごしらえのコートを一周し終えた亀族ペイトラムの少女が一際陽気に、バッターボックスに立つ見るからに強打者のフォルテに声援を送った。

「任せてください。私もクオーラちゃんに続きますよ。」

「随分な自信だな。なら私も全力でいかせてもらう。」

対峙する女性もまた、パツと見は細身ではあるがその実、元龍門の近衛局、特別督察とくさつ隊隊長という実力者だ。

「どうぞ。ミノスと龍門、どちらがよりベースボールに特化した人種か。ハッキリさせてあげますよ。」

……どうやら全員、暑さに頭をやられているらしい。

ならばこの際「どうして」などもうどうでもいい!一刻も早く試合を終わらせて、彼らへの長期休暇をドクターに申請しなければ!

「マッターホルン、いったぞっ!」

「え？」

……ポカリッ！

……イエラグの空は高い

靈峰を頂く麓の町から見上げたならそこが天国のようにも感じられるほどに。

降り注ぐ陽射しは鋭く、肌を刺すほどに凍てついている。痩せた大地から取れる作物も、辺りに生息する獣たちも多くはない。

一年を生き延びるために贅沢を控える私たちはどこか日々の温もりに欠けているように感じていた。

だから私は料理を覚えた。

たとえ質素な食材でも工夫次第でより美味しいものに変えられる。

食卓が賑わえば、人は——作物たちと同じように——豊かになる。鍋や包丁は料理を作るだけでなく、人の心に温かな水を注ぐことができる魔法のような道具なのだ。

俺はシルバーアツシユ家に仕える護衛だ。

だが、ナイフの代わりに包丁を握れば旦那様やお嬢様の体調管理や人間関係の改善にも一役買えると気付いた時、俺の取った選択は間違いじゃなかったのだと自信がついた。

俺は、あの家の、旦那様の役に立つことができるのだと……。

あの人たちにとって必要な存在になれるのだと……。

「……う、う……ん……、」

「あ、気がついた？」

「……」

それに比べ、ここの太陽は低すぎる。俺が何をしなくても友人たちは皆、素敵なお顔を向けてくれる。

「……は……、私は、なにを……、」

無垢なペートルラムはリターニアの画家も羨むような無垢な微笑みで、覗き込むように私を見下ろしていた。

……見下ろす？

「君、エラーしちゃったんだよ。」

「……え？」

情けなくも気絶していたらしい俺の頭を、彼女の柔らかな太ももが支えていた。……とても優しい、太陽の匂いのする………っ!?

「おっと、どうしたの？ なにか怖い夢でも見ちゃった？」

あわや互いの頭をぶつけてしまう勢いで飛び起きた俺に驚いてはいたが、その表情にはあの笑顔の余韻がしっかりと見て取れた。

「い、いや、ただ、今の状況に驚いただけだ。……あ、ああ、看病してくれていたんだな。すまない、ありがとう。」

だが、彼女には医学的知識はおろか、一般教養も標準に達してないことを俺は知っていた。

あの場にいた連中なら、ミノスの傭兵の方が適任だったろうに。おそらく彼女が進んで買って出てくれたのだ。

「お礼なんていらさないよ。君のおかげで大好きな野球ができたんだもん。ボクの方こそ、ありがとう！」

「………そういえば、そうだったな。」

昨夜、「海が好き」の厨房で翌日の仕込みをしていると、夜の砂浜でランニングをする彼女を見かけた。

「休暇中だというのに自主訓練か？ 精が出るな。」

気紛れに俺はトレーニング中の彼女に適度に冷えた飲み物を差し入れた。

すると彼女はまるで初めて見る生き物を見るような目で俺をじいつと見詰めてきたのだ。

「えっ……と、クオォーラ、俺が誰だかわかるか？」

俺とクオォーラはその役割上、同じ任務に就くことが多い。今では少なくとも顔見知り以上の関係にはなっていると思っていたが……、

「……」

「……お前は、クオォーラ、だよな？」

あまりに反応がなさすぎて、俺の方が人違いか何かしてしまっているような気分にした。

彼女に話しかけてから少なくとも1、2分は経っただろう。そうして彼女はようやく口を開いた。

「君って、お友だちは多い方？」

「……これが彼女の性格なのだ。」

いつもながら、彼女との会話には頭の切り替えの速さを要求される。だがなぜか不快に思ったことは一度もない。

それが、彼女の魅力がなせる御業みわざというものなのかもしれない。

「え?…まあ、少なくともはないと思うが。それがどうかしたか?」

「じゃあ明日、野球しようよ!」

「…え?」

確かに、彼女は日頃から野球にただならぬ関心を抱いていた。戦闘も——そもそも彼女は戦闘向きではないのだが——、バットでのケンカスタイルに拘る徹底っぷりだ。

だが、なぜ今?

しかし、よくよく話を聞いてみれば彼女の場違いな願望は、なるほどそういうことかと合点のいくものだった。

「ボク、ロドスでもこうしてずっと自主練してるんだけどさ、実際に皆でプレイしたこ
とってないんだよね。ロドスは野球をするには狭いし。球場のある町に泊まっても、そ
こにボクのお友だちはいないから。」

ああ、今の走り込みも戦闘訓練ではなく、走塁や守備のためだったということか。

「……ダメ、かな?」

同じ重装オペレーターとして、彼女と肩を並べた戦場も少なくはない。

戦闘のノウハウこそ少ないものの、ドクターの指示に忠実で、日頃の訓練を証明するような強固な「盾」となる姿には尊敬の念を抱いたこともある。

俺にとって彼女はユーモラスな友人であるとともに、大切な同僚なのだ。

そんな彼女の切実な願いなんだ。叶えてやりたいと思うのは当然のことだろう？

「ああ。もちろん、いいぞ。明日、できるだけ多くの人に声をかけてみる。」

「ホント？ やったあ!!」

「…ただプレイをするのも味気ないと思わないか？」

「え？」

あまりに愛らしく飛び跳ねるので、俺はつい意地悪を思いついてしまった。

「負けた方が勝った方になにか美味しいものを奢るといっちうのはどうだ？」

……いいや。これは意地悪というよりも、より野球というゲーム性を高めた、彼女の意向に応えたいという俺なりのサービスピ精神だ。

そしてそれは思った通り彼女の意欲に刺さってくれたらしい。俺たちはとびきりの笑顔とフィストバンプを交わし、誰もいない砂浜で純粹無垢なスポーツマンシップを瞬く夜空に宣誓した。

そして俺は、迂闊にも自分が熱中症にかかっていることに気付けなかった。

連日の騒ぎも影響したのだろう。陽射しにやられた俺は、飛んできた打球にも反応で
きず頭で受けてしまったらしい。……なんて情けない。

まあ、そのことへの反省はひとまず置いておこう。それよりも今は……、

「それで、試合はどうなった？」

「フツフツ……、それはね……、」

まるで大根役者のように演技臭い笑みを浮かべた後、彼女はやはり彼女らしい笑顔
で、

「ボクの勝ちだよー」

俺の期待に伝えてくれたのだった。

「……そうか。優勝、おめでとう。」

俺たちはまた友情を深めたフィストバンプで健闘を称え^{たた}合い、シエスタ一押し^のフア
ストフードを食べようと約束した。

少し値は張るが、あの青空に輝くダイヤモンドにも負けない笑顔がまた見られるな
ら、安いものじゃないか。

●おまけその二 【火山観測士の絵日記】

私はリタ―ニア人だから、アーツの適性は他の人よりも高い。両親のおかげで教養もそこそこにある。

だけど、私は、耳が悪くて目もいいとは言えない。少しずつ、皆の世界から追い出されていくような感覚で悪夢を見るときもある。

だけど、私は幸せ。

だって、私には居場所がある。

私の健康を気遣ってくれる人。弱った私を励ましてくれる人。一緒に闘ってくれる人。そして、私の努力を見てくれる人がそこにいる。

「エ、エイヤ、ファイヤトラさん……、私は……、」

久しぶりにこんなに走った。

部屋に駆け込み明かりもつけず、真つ暗な中で目を閉じて鳴り止まない胸にソツと手を乗せる。

……少し、恐かった。思わず打って、逃げてきた。

「……明日、謝りに行く……。」

ようやく少し落ち着いて、ホテルのソファに深く腰掛けながら長い溜め息を吐く。

ホテルのベッドはとても清潔で、なんだか恐いから落ち着かない。

ソファも似たようなものだけど、ベッドよりは私をソツとしておいてくれる。辛い
想いにさせない。

……だけど今日の出来事は、もっと私を驚かせた。

……あれは何だったんだろう。

わかりきってるのに、知りたくない。

……本当にそう？

マッターホルンさんは良い人。礼儀正しくて、正義感があつて、忍耐力もある。

じゃなかったら、私なんかのためにあそこまで支えてくれないもの。

だけど……、だから、恐かった。

「……ハンカチ、どこだっけ……、」

……私、情けないな。私を大切に想ってくれてるだけなのに、泣いちやうなんて。

「……先輩、何してるかな……、」

本当は先輩と一緒に浜辺を歩きたかった。お喋りなんかしなくてもいい。ただ……、

手を……、

「あ……、」

煌びやかな夜景を背景に薄つすらと、窓ガラスに浮かれた格好のキャプリーニが映って

いた。

水着…、がんばったのにな……、

購買部で見た時、とつても可愛く見えた。……そう言ってくれることを、期待して買ってしまった。着る機会なんかこれっきりなのに。

あの時も、煽おだてられて調子に乗っちゃったんだ。

でも、こうして見みると……、

…なんだか、子どもっぽいな……、

——夢を見た

湾曲する境界線から眩まぼゆいばかりの光を放つ宝石が現れて、線引された天と地を同じ色で染めていく瞬間を、私と誰かがゆっくりと上下するゴムボートに乗って眺めていた。

「……私、今、幸せなのかな……、」

そう言うと彼は、

「今、私は幸せだよ。」

そう言つて彼は私を力強く抱き寄せた。

魅惑の海 おまけ その二（終）

●おまけその三【頂きます】

刃先を、鱗を落とした皮の上を滑らせる。

朝一で研いだ包丁と薄つすらと濡れた皮は合わせ鏡になって青白い光を反射させる。

皮は鱗を落としてなだらかになっていても、撫でる刃先は僅かに「カリカリ」という音を立てる。

鰓えらという壁に突き当たり、そこから壁にならって滑り込ませるとソイツを支えていた一本柱に触れることができる。

俺はそれを壊さず、紙を通すように切り分ける。

その瞬間、俺はコイツを本当の意味で「頂いた」気分させる。

その後は供養、祈祷のような儀式的な工程が続く。

見る者が見ればそれは地獄絵図に映るかも知れない。

どんなに俺が感謝をもって「頂いた」ところで「殺し」に違えねえんだ。

そうだとしても俺は握る刃物を止めたりはしねえ。止めれば俺はただの「殺し屋」だ。

「……」

あの人の目を思い出す。

波間に釣り糸を落とし、あの人はただただ静かにその様子を眺めていた。

眺めていたものが何なのかはわからなかったが、あの時のあの人は何も殺しちやいなかった。

それがとても大事なことなんだ。

「美味しいですね!!」

今の俺が店に立って客の笑う顔に幸せを感じているみたいに。

「B級グルメって言うけど、昨日アタシが行った懐石料理よりも美味しいわよ?」

それが、俺の責任ってやつだ。

アンタは血の臭いを隠さなかったけれど、その臭いが波を荒立てることもなかった。
黄^{こがねいろ}金色の瞳は、ナイフがもたらす責任をごまかしちやいなかったんだ。

「……おい、コイツ、いくらなんだよ。」

ウルサスだとかループスだとか関係ねえ。人相が良いとか悪いとかそんな話でもねえ。

戦えば人は誰かを殺すし、腹が減りやあ何かを殺す。

「毎度、10龍門幣になりやす。」

だったらソイツは責任をもって海を育てなきやならねえんだ。

魚の味を良くするためじゃなく、魚の泳ぎやすい穏やかな海つてやつを守るために。

「ジエイ、お前なかなか筋が良くなったな。」

「……そうですかい？」

そりやあ、そうつすよ。

だつて俺は、ずっとアンタのことを尊敬してたんすから。

●おまけその四 「二本の短剣」

理想郷ユートピアがもたらす虹色の陽の光降り注ぐビーチで紳士淑女が日常で負った傷や病を癒している最中、シエスタの某ホテル、その地下もろに設けられたバーで企業のトップ同士のささやかな懇親会が行われていた。

「ノア、また腕を上げたな。」

毛並みの良い銀灰のフェリーンが椅子から垂らした大きな尻尾を、僅かに揺らした。

表情もさることながら、その身形みなりは企業のトップという立場に見劣りしないものだった。

コートはやや下品にさえ感じさせるほどの立派なファーは、丁寧に鞣なめされた皮の渋い光沢と対比することで着用者の高潔さ、高圧的な氣質を演出していた。

革手袋、簡素だが質の良いシャツに絹のネクタイ、その他、身に着けているもの全て——故郷の風習を示す独特の色使いの施ほどこされた髪飾りを除いて——は「敵」を萎縮いしゆくさせるためのものだ。

それは彼の家柄や留学で得た経験が彼に強いた「鎧」とも、普段対峙する商売相手へ優位な企業戦略を働かため「戦闘服」とも言いかえられる。

それらの性格、企みは彼の顔のあらゆるパーツからもハッキリと見て取れる。

そんな孤高を愛する彼が今、明らかに、向かう相手に心を許していた。

「そうか？まあ、好きこそものの上手なれと言うしな。」

ところがその相手は、舞台の陰に徹するバーテンダーでさえも疑心暗鬼を顔に出さずにはいられないような不審な身形をしていた。

「それに、対戦相手がお前だからというのもあるかもしれないな。」

声以外では性別さえも窺い知れないその男は、天井の設けられた室内で撥水加工の皮の雨具を着込み、フードの下には騎士さながらの真っ黒な鉄仮面を着用していた。

大雨の予報が？それとも古戦場に向かう前のタイムトラベラー？はたまた、衣装を脱ぐことにさえ面倒臭さを覚えるただのズボラな舞台役者？

もしも三択目だとすれば、銀灰のフリーマンの必要以上に威圧的な装いも特殊メイクと豪華な舞台衣装というオチとしてバーテンダーは日常を取り戻すことができたかもしれない。

しかし、世界は彼が期待するような現実ばかりで出来てはいなかった。

時空を旅する天気予報士が大胆にも黒のキングを盤面の中央に進めると、白のキングはまた少し自慢の尾を揺らした。

「笑わせる。お前はいつからそんな安い世辞と挑発を使うような詐欺師に転職したんだ？」

「全ては世の中を上手く回すため。賭けの内容次第で私は天使にも悪魔にもなるさ。」

性懲りもなく予報士は軽口を交えて対戦相手を挑発し続けた。

すると銀灰の尾は天秤さながら、トラベラーの怪しい予報を計りにかけるように大きく——あくまでも静かに、人目につかぬよう——揺らした。

「フン、いいだろう。もしもこの勝負でお前が勝利したなら、お前たちが入手に難儀しているという上質な源岩鉱を1トン買い付けてやろう。」

そう答える銀灰の尾は椅子の裏をトントンとノックしていた。

「正気か？上級の流通量を知っているだろうか？クルビアの全専門企業の年間産出量と同等の数字だぞ？」

一般に源岩鉱は、^{オリバシ}鉱石病の感染源となる空气中の源^{オリジニウム}石の吸着剤として用いられる。そして、吸着剤として用いられる程度の源岩鉱の価値は特別高くない。

しかし、このフェリーが言う「上質なソレ」はあらゆる機器の装^{アーツユニット}置稼働時に発生する負荷を効率的に軽減させることのできる、需要に対して極めて流通量の少ない、同量の金よりもはるかに価値の高い素材だった。

しかも、これの生成には高い精錬技術とクリーンルームが必須となり、大規模な生産は技術者不足と管理コストの関係上、未だ実現されていない。

「お前を悪魔にしてやろうと言うんだ。この程度の対価は当然というものだ。違うか？」

「……なるほど、それなら私は…、いや、吾輩は向こう十年間、お前の関係者の全ての治療費を賭けてやろう。」

金銭的負荷で見ればそれは圧倒的にフェリーの方が大きい。しかし、この雨具男が所属する会社はあらゆる方面の外傷、病の治療を行っている。

その中には伝染病かつ流行病として恐れられる「^{リかんしゃ}鉱石病」さえも含まれる。この罹患者に向けられる世間の目は、それだけで迫害の対象とされるほどに冷たい。

当然のように、彼らの「面倒」を診てくれる医療施設はほとんどなく、あつたとしても多額の治療費を要求して追いつ返すことがしばしば。

それを、この端役はやくのようないで立ちの男は無償で処置しようと言っているのだ。

もはや金銭的価値など問題ではなく、従業員に「感染者」を抱える銀灰のフェリーンにとってまさに喉から手が出るような提案なのだ。

「……それは、やめておけ。」

「なぜ？」

聞くとフェリーンは彼と相対して初めて、刹那、眉間にシワをつくった。

「私がそこまで考えが至らないほど愚かだとも？……いいや、お前はそういう奴だ。私の企みもすでに見抜いているのだろう？それを承知の上で、どちらに転んでも私が目論んでいたことを実現させようとしている。より露骨な形でな。」

「エンシオデイス、そういうことは言うだけ野暮だと思わないか？」

その後、数分に渡って彼らはお互いに譲らず、ゲームはケンカ腰に始められた。

「……つまり、どういうことなのかしら？」

バーカウンタ―から壁際の二人の話に興味津々で聞き耳を立てるネズミザラツク族が隣のヴィーヴルに尋ねた。

出身や役職こそ違えど、二人は間違いなく「同僚」の間柄ではあった。そして今も彼女たちは同じ任務を遂行している最中だった。

「他人のプライベートに立ち入るのもお前の仕事の内なのか？」

しかし、二人の共通点はそれしかない。

戦場で闘う相手も違えば、彼らの裁き方も違う。話し方も、好みの食べ物も、自身の悪癖への客観的視点も。

そして、銀髪のヴィーヴルは「秩序」を乱すことを嫌い、赤毛のザラックは「秩序」という言葉そのものを嫌う。(ザラックのいた世界の「秩序」は彼女を奴隷にするから) 銀髪のヴィーヴルが世間の求める完璧な装いよそおをしている一方で、

赤毛のザラックはドレスコードならに倣ならってスタイリッシュなドレスに身を包んでいながら、敢えて「過去の烙印」を晒さらしていた。

その印を見れば多くの人間は彼女の身分を勘ぐるだろう。浅黒い肌やギラギラと光る赤い瞳に偏見を抱くだろう。

それは彼女の意中の相手の品位さえ下げられるかもしれない。それでも彼女はそんな彼らの視線を故意に誘引することを止めなかった。

「あら、自分の主人…、いいえ。護りたい人のことをよく理解するって護る側からしたら重要なことなのよ？」

しかし、「共通点が少ない」ことが「気が合わない」ことを証明するとは限らない。

事実、ヴィーヴルはザラックの言っていることを違和感なく理解することができた。

元警備課主任という彼女の輝かしい実績がそれを物語っていたし、さらに言えば、今まさに彼女はその力を心から欲しているのだ。

それでもヴィーヴルにはザラックがそんな純粋な使命感をもって言っているようには聞こえなかった。

「……別に構わないわ。あの人の傍にいればいつかは分かることだもの。」

ヴィーヴルの表情を見て疑われていると気付いたザラックは「よくあることだ」と諦め、また二人の会話へと耳をそばだてた。

その甘い横顔は嘘くさく見えた。

「……お前は、なぜ彼を護りたいんだ？」

「……」

そして、その質問はザラックを素直に驚かせた。

今までにも何人かと同じような質問をされたことがあったが、それはそういう立場の人間だったから。彼女と同じように彼を護りたいと考えている人間だったから。

少なくとも、目の前のヴィーヴルのように他の誰かに夢中になっっている人間の口から……いいや、だからこそ知りたいのかもしれない。

もしかすると彼女はまだ、自分の気持ちを理解し切れていないのかもしれないのだ。

ザラックは今まで自分の職分や異性であることを利用して彼らの質問を誤魔化して

きた。

なぜなら彼女にとって彼らの立場は過去に自分を買った人間たちとあまり変わらな
いからだ。

目に見える親切を鵜呑みにしてはいけない。彼らが自分を脅かす「力」を持っている
限り、彼女の存在が「不都合」になった瞬間、それは自分に向けられるかもしれないか
らだ。

その可能性を視野に入れて動かなければ、彼女は生きてこれなかった。

そして今、私はこの身の全てをあの人^にに捧げている。私が退けるべきものは、彼を脅
かす全ての「障害」。

私は、彼の前に現れるどんな賢い「障害」も見逃す訳にはいかない。

けれども、目の前のヴィーヴルはどうだろうか。

彼と協力関係になって随分立つ。仲違いなかがすることも何度かあったと聞いている。そ
れでも彼女がロドスから出ていこうとしないのは単にあの子のため？

……それとも、彼女も彼を脅かす何者かになるのかしら？

「すまない、私も不躰なことを聞いたな。忘れてくれ。」

「……」

彼女を見ていてふと、故郷の物語に出てくる主人公を思い出した。

狂気によって自らを喪失すまいとする理知的な佇まい、力を模索し苦悩する言葉遣い、怠惰を正す鋭い眼差し。

だけど、それだけでは彼の求める剣にはならない。

彼はそういう経験をも、血と涙の区別がつかなくなるような気の遠くなるような戦いを経てようやく、人ならざるものを斬る術すべを手に入れた。

しかし、彼は失念していた。

手にした剣が「盾」を必要とするなど露ほども考えなかつたのだ。

そうして目の前で愛するものを奪われた彼は剣に飲まれ、世のあらゆるものを滅する

“大波”へと姿を変えた。

もはやその行為は天邪鬼という他ない。

それでも“大波”となった元騎士はやって来るあらゆる怪物たちを喰らい続ける。

「盾」など必要のない世界を創造するために。

——— “最初の騎士”

対となる古い伝承の物語を引き立てるため、今も存命の作家の手によってつくられた皮肉な物語。

私は、人気のある伝承の騎士よりも彼の方が憐れに思えた。「盾」を否定するために”

大波”になつた彼が築こうとする世界は「盾」はおろか、「劍」^{かれ}さえ必要のない世界なのだど氣付けていない。

そこまで追い込まれた彼が、愚かを通り越して憐れに思えるのだ。

目の前のヴィーヴルは、私なんか及びもつかない力を持つてる。けれども誰かと肩を並べて戦う時はいつも、彼女は拳を立てず、構えた盾を手放さない。

もしも彼が失う苦難を乗り越え「盾」を受け入れられたなら、このヴィーヴル…、サリアのような人間になつていたのだろうか。

そう思えばこそ、彼女が必要とする後押しをしてあげてもいいんじゃないかしら。

もしもそれが私の言葉の中にあるのならだけれど。

「アタシはね、あの人に感じるものがあるの。」

私は、惨めな生き方を送つてきた人間だけれど、敬意を表す相手を間違えたことはない。どんな頑固な人間だろうと、信じるべき相手は信じるべきなのだ、彼や大旦那様に教つたわ。

だから、誰に何を言われようよこの気持ちは確かにあるんだって自信を持つて言える。

「これが“恋”というものならそうかもしれないわ。でもね、アタシはきつと違ふと思ふの。」

「……」

サリアは続くザラツクの答えを辛抱強く待ったが、その忍耐が報われることはなかった。

「あら、これで終わりよ。だってまだ彼を知る途中なんだもの。当然でしょ？」

不満は残った。けれどもそれが彼女の本心であることに変わりはないのだと納得せざるを得ない。

「だからアタシはあの人の傍を離れない。たとえアナタが彼をたぶらかす悪魔だったとしても、アタシは恐れないわ。あの人が、こんな卑しいアタシを大切に想ってくれる限り。」

「……」

同僚を「敵」にするのには慣れている。しかしそれは事態がそうさせただけで私が望んだ訳ではない。

けれども彼女はどこか、それをこそ望んでいるように見えた。

私を疎ましいと感じているのか？ いいや、であればその言葉にはもつと「敵意」があつていい。

だが、それはどこか「挑発的」だった。

まるで、私を試しているかのような……。私を？なぜだ？

「アナタは？」

「…私がドクターをどう想っているということか？」

「そうよ。」

「……」

私がドクターに敬意を払っているのは間違いない。だがそれを越えたことはないし、そう勘違いされるような真似もしたことがない。

ならばなぜ、彼女はこうも私に挑みかかってくる？

「…洞察力や先見の明に関しては尊敬に値する。アイツが後方に立っている限り、それがテラの両端で生じた問題であろうと無駄な犠牲など一つも生まれはしないだろうな。」

それ以上、何を言えばいい？

私も、なぜ言葉が続くような言い方をしているんだ？

…私の目的はイフリータだけじゃないのか？ 本当は心のどこかで抛り所を求めていると？ それか、あの男だと？

「……」

沈黙が長すぎた。

彼女は「…そう」と相槌を打ち、遂には私への興味を完全に失くしてしまったようだった。

た。

ザラックが意中の相手へと視線を向けるとゲームは混戦を極めているらしく、戦いは盤外にまで及んでいた。

「お前の身勝手な行動と言えば、近頃、四六時中お前を見張っているあのザラック。お前は どう思っているのだ？」

「…お前らしくもない。妬み嫉みは視野を狭めるぞ、エンシオデイス。」

「盟友よ、私はお前を想って言ってるのだ。」

銀灰のフェリオンは視線を対戦相手から逸らし、カウンターの彼女へ向けた。彼女もまた、その視線を望みのままに受け留めた。

二人は彼を置き去りにして、ただ静かに睨み合っている。

「聞くところによると騎士の称号を持ち合わせているようだが、彼女を一見してそれを信じるものがどれだけいると思う？」

「…誰しも醜い過去の一つや二つある。それと向き合う器量があるだけ彼女は立派な人間だと思いがな。」

「なるほど、それは間違いないだろう。私も彼女の存在自体を否定するもりはない。だが、世の中には多くの人間がいる、そういう単純な話だ。もしくは、そのイメージが

お前、引いてはお前たちに及ぶことも計算した上で彼女を飼っているとしても言うのか？」

——一瞬にしてバーの空気が冷え切った

「……冷めてしまったよ。まさかお前がそんな幼稚なルール違反を犯すとはな。」
「それがお前の言い訳か？」

フェリーンは変わららず威圧的な表情を崩さず、ルークを敵のクイーンの目の前まで動かした。

「護るべき者は然るべき方法でもって護るべきだ。それを怠るお前にそもそもルールを口にする資格はない。」

「…人には人のルールがある。その尊厳を削ぎ落としてまで人を護る価値がどこにある。」

「その理屈は矛盾しているな。ならば、私の目に映る世界に彼女を連れ込んだお前は私の尊厳を蔑ろにしているんじゃないのか？それとも、お前にとって私はそもそも護る価値などないと、そう言いたいのか？」

盤外でさえも彼らは一步も譲らない。

ともすれば戦いはさらに外へ伸びるかもしれない可能性を帯び始めた。

「…ねえ、あれ、止めなくてもいいのかしら？」

あくまで傍観者に徹するつもりだったザラックは、衝動的になろうとする自分を抑えようと隣と同僚に意見を求めた。

「なぜだ？」

ところが頼みの同僚は戦場の空気などお構いなしといった様子で二人を見守っていた。

「あれでも大企業ひしめく世間を渡り歩いてきた組織のトップだ。我々には理解できない心理戦を繰り広げることはあっても、その引き際を見誤ることはないさ。」

「……」

「それとも、これがお前の限界か？」

「……」

危なかった。

彼女に指摘されなかったなら、彼女が動かないことを理由に私は柄に伸びるこの手を止めなかったかもしれない。

あのフェリーンが言うように、卑しい自分が彼を辱めていたかもしれない。

「……めんなさい。アタシ、また失敗するところだったわ。」

「……」

その姿には「騎士」としてのプライドと、卑しい身分に打ち勝とうとする「女」^{ひと}としての意地が見て取れた。

「私は、」

その姿を目の当たりにしてようやく、サリアは見逃していた自分の気持ちの一つを探り当てることができた。

「お前のそれとは違いかもしれないが、あの男を大事に想っている。」

「……」

「だが、同時にこうも思う。あの男は多くの人間から好かれすぎている。」

それがただの友好関係で済むのなら何の問題もない。だが今、あのカランド貿易会社のトップが見せたように、よりあの男に近づこうとするがゆえにその他の人間を不幸にするかもしれない。

その責任はいったい誰が負うんだ？

そうなる私も、あのフェリーの言うことに一理あると思わざるを得なくなる。

「お前は、そんなあの男が許せるか？」

「アタシは……、」

その後、酒を飲み、危険な口論が飛び交いながらもゲームが長引くことはなかった。「私の勝ちだな。」

それは意外な結末だった。

「…今月中に契約書を書き直してそちらに送付しよう。」

黒のキングが力なくうなだれていた。

しかし、それでも物足りないと言わんばかりに白のキングは歩みを止めなかった。

「その必要はない。」

「……なに？」

勝負は着いていないと？それとも、もつと法外な賭け金ルーを上乗せする気か？…だが、さすがに彼はそこまでするような男じゃない。

敗北した天気予報士はどんな凶弾が飛んでくるのかと身構えた。しかし、

「理由は簡単だ、ノア。お前の言うルール違反というやつだ。」

銀灰のフェリーンは諸手を上げ、降参の意思を示しながら続けた。

「あの時、彼女を盤上に引きずり込まなければ私に勝ち筋は見つけられなかった。私は勝利とプライドを天秤に掛けてしまったのさ。」

そうなのだ。あの時、私は冷静でいたはずが、単純な読み違いをしてしまっていた。あそこから、私はミスを取り返すことができなかつた。

会社のため、身内のためならプライドなど感じさせない攻めを見せる彼だが、こと私との勝負においてそれを見せたことは一度もなかった。

「……そんなに私のやり方が気に入らなかつたのか？」

「当然だろう。あれではただの施しではない。」

少しずつ、酔いが醒めてきた。それくらいしか彼の視線にかける言葉が思いつかなかつた。

「とにかく、今日はお開きにしよう。私もお前も飲み過ぎたのだ。君も、私のつまらないプライドのために、すまなかつた。」

「アタシはアナタが彼に手を出さなかつただけで満足よ。」

「……ふつ、貴女は私の思う以上に強い人間らしい。」

「強さ」も、人によって求めるものが違う。フェリーンはその「強さ」でもって故郷に富をもたらし、権力を手に入れた。

しかし、ザラックもまた非凡な「強さ」をもつて醜い過去を打ち倒そうとしている。彼女を護ろうとする理由を、彼はようやくよく理解した。

「エンシオデイス……、すまなかつた。私は自惚れていた。お前の優しさに応えようと気取ってしまったんだ。」

彼は、久方ぶりに覚えた反省に打ちひしがれながら言った。

「ノア、私たちも人間だ。過ちを犯すことはある。それでも、この程度でこの友情に亀裂が入らないことを私は知っている。」

「…ありがとう。」

二人は固い握手でもって想いを確かめ合うと、今度こそ銀灰はバーを後にした。

……ねえ、ドクター。

私はアナタほど頭が良くないから、今日のケンカの原因もハッキリとはわからなかったわ。

それでも今日、わかったことが二つあるの。

私はまだアナタの盤上に立つには相応しくない。この「烙印」すらもアナタを護る武器にならないのなら、私はまだアナタの戦場を知らなすぎるということ。

それと、サリアはアナタに警告するかもしれない。けれどそれはひどい誤解だつてこと、私は今日ハッキリ理解したわ。

アナタは人にできないことができる人。アナタは誰よりも多くを助けられる人だから。

奇しくも、私はあの物語の主人公と同じ称号を持っているけれど、彼と唯一違うところがある。それは、私は剣を二本持っているってことよ。

私はいつかそれをアナタに証明してみせるわ。